



始



時 219
917



著 編 敏 鳥 曉

清 澤 満 之
の
人 と 文

大 東 出 版 社



序

清澤先生の文集の編輯を大東出版社からたのまれたときに、第一に考へたのは、私が盲目に近いので読むことも書くことも出来ないのだから、不適當だといふことである。しかし、尙一層考へたところ、周囲の人の眼をかり手をかりても、先生の文集を編輯さしていただきたいといふことであつた。それから約半年間そのことをのみ思ひつづけてゐて、今やうやく編輯が出来た。原稿の少いのをふやすのも面倒であるが、多い中から選擇するのも容易でない。先生の書かれたものは、どの文も、どの文も、みな尊く思はれて、一文をも省きたくないので、選擇に困つた。だから、この文集に集めた以外の文章も同價値なものと思つていただきたい。

第一篇の宗教哲學骸骨は、先生の第一期研究時代の結晶であるから、ちとむづかしいと思つてたが、これを採録した。

次に臘扇記と有限無限録とは先生の臘扇と稱せられた時代のお作である。この時代を私は第二期立信時代と名づけたいのである。だから、第二篇立信時代の下にこの二つの文集を採録することにした。

第三期を行化時代と名づけたい。この時代は東京の浩々洞から雑誌『精神界』が発行せられ、日曜講話が始められた後の時代である。この時代のお書き物は随分多いのであるが、その中、私の記憶によく呼び起されるもの三十篇を採録することにした。

発行者から註釋をつけてほしいと申されたが、よく味へは分ると思うてあまりつけなかつた。尙本書を読む方にお願ひしたのは、先づ始めに第三篇を読み、次に第二篇をよみ、最後に第一篇を読み、更に改めて第一篇を読み、第二篇を読み、第三篇を読むやうにしていたきたい。先生の文章は『左傳』の文章のやうに深くかみしめなければ、その味ひがわからぬ文章であるから、卒讀してわからぬと云うて棄てないやうにしていたきたい。

大東出版社の御依頼により久しぶりで先生のお書きになつた文章を聴聞する御縁をいただき、新に先生の御教を受けることの出来たこと喜びに堪へないのである。先生の文集の編輯を私に依頼していただけるのも先生の御恩徳の然らしむるところであると喜んでをる次第である。

昭和十二年七月二十九日

北安田明達寺にて

曉 鳥 敏

目次

第一篇 研究時代

宗教哲學骸骨

(宗教義解)

(吾人の定義)

第一 宗教と學問

宗教心

宗教心の對境

道理心と宗教心

道理と信仰

第二 有限無限

有限無限
絕對相對
全體部分
諸性提結

依立獨立
唯一多數
完全不完全
二項同體

有限無數
主伴互具
(宗尊體)
有機組織
自力他力
(三身)

第三 靈魂論……………一九

靈魂
靈魂無形說
靈魂有形說
靈魂自覺說

第四 轉化論……………二五

變化轉
轉化と遺傳
因果の理法
靈魂開發
一體貫通
因緣
絕對と因果

第五 善惡論……………三六

善惡標準
良心說
幸福說
神意說

道理說
善惡質量
諸說通會
標準確定
有覺無覺

第六 安心修得……………四一

因分果分
安心(信心)
二素併說
樂土
無限の數
宗教と道徳
因分二素
修徳(修行)
成道往生
比說
成道可得

第二篇 立信時代

第一 臘扇記(抄録)

養生三寡……………五

殺身四鬼	五
演說自誠	五
平生心事	五
絶對の信	五
南無阿彌陀佛	五
エビクテタス十訓	五
流轉と還滅	五
一箇の靈物	五
吾人の自由境	六
佛心	六
惡心	六
宗教	六
未來の安心	六
病中の快然	六

眞諦俗諦	六
生と死	六
修養時感	六
胸中の主人公	六
一致調和	六
修養指針	七
生活問題	七
自由の範圍	七
妄念の根源	七

第二有限無限錄

有限無限	六
善惡	七
仁義禮智信	七

忠信孝悌	六九
智仁勇	七〇
義と利	七一
實際	七二
道義の發育	七三
内象	七四
外象	七五
權勢と君子	七六
道義と執着	七七
無限は眞理なり精氣なり	七八
道心は生命なり	七九
無限的眼光	八〇
宗教の効用	八一
佛教の特長	八二

我に絶對あり	八三
病者に對して示すためエピクテタスの言を書き送れと井上豊忠兄より 來書ありし故左の數項を書き送る	八四
日常止觀	八五
衣・食・住・具	八六
儉約	八七
儉約の實行	八八
克己制欲	八九
貧富は精神にあり	九〇
充足不足の世界	九一
道心と人心との争鬭	九二
知愚の天性	九三
順境と逆境	九四
角力は人生の快事なり	九五

電氣には兩極あり……………九〇

虚浮を觀ぜよ……………九一

不可知的……………九一

依頼は苦痛の源なり……………九一

人智は薄弱なり……………九一

學理の成立……………九二

是非善惡……………九二

他人を咎めんとする心を咎めよ……………九二

寂寞樂むべきか憂ふべきか……………九三

閑寂何在……………九三

我職業を愛重せよ……………九三

能を誇るべからず……………九四

不能を蔽ふべからず……………九四

飢ゑよ渴けよ……………九四

艱難汝を玉にす……………九四

苦惱の本源……………九五

遺傳と經驗……………九五

偽善は罪惡なり……………九五

至誠は道義の根本なり……………九六

違順……………九六

宗教の情は實修門にあり……………九六

無執無著……………九七

執著は奴隸心の源なり……………九七

宗教の實用……………九八

罪惡の念……………一〇〇

顯微鏡と望遠鏡……………一〇〇

無限の境界には善惡なし……………一〇一

福利の増進……………一〇一

公の爲にせよ……………101

各其能を盡せ……………103

公の爲にするものは秩序を重んず……………104

公の爲にするものは約を重んず……………104

公共の範圍に大小あり……………104

公共の各範圍に約束あり……………104

國家主義と個人主義との調和……………105

公共の爲にするものは我を別立せず……………105

公共心を修養せんには無限を観するを要す……………105

公共心は無我心たるを観すべし……………106

公共心は無畏心たるを観すべし……………106

公共心は不動心たるを観すべし……………106

百般の妄情は我心に根す……………106

報恩の經營は義務を守るにあり……………107

絶對無限と人格……………107

應無所住而生其心……………107

無念無想を誤る勿れ……………108

道德と宗教……………108

無上命令(本具心念)……………113

昇……………113

沈……………113

希……………113

望……………113

苦 痛(恐怖)……………114

苦……………114

樂……………114

死生を均くす……………114

一定の惡あることなし……………114

平等界は無功用以上なり……………115

宗教は信念の確立を主とす……………115

學理は信念に根據す……………116

我現在の信念……………	二七
我の信界……………	二八
精神界と物質界……………	二九
絶對的考察……………	三三
世界觀……………	三三

第二篇 行化時代

精神主義……………	三三
一 精神主義……………	三三
二 精神主義と物質的文明……………	三四
三 精神主義と競争……………	三七
四 精神主義と唯心論……………	三九
五 精神主義と他力……………	四三
六 精神主義と三世……………	四五

七 精神主義と共同作用……………	四六
信ずるは力なり……………	四五
萬物一體……………	四五
自由と服従との雙運……………	四六
遠美近醜……………	四六
本位本分の自覺……………	四七
宗教は主觀的事實なり……………	四五
智慧圓滿は我等の理想なり……………	四六
實力あるものの態度……………	四八
善惡の思念によれる修養……………	四七
迷悶者の安慰……………	四九
客觀主義の弊習を脱却すべし……………	四五
日曜日の小説……………	四九
信仰問答……………	四三

天職及び聖職……………	二〇九
倫理以上の安慰……………	二二三
倫理以上の根據……………	二二九
人の怒るを恐るる事……………	二三三
我以外の物事を當てにせぬ事……………	二三八
他力の救濟……………	二三三
咯血したる肺病人に與ふる書……………	二三四
宗教的道德(俗諦)と普通道德との交渉……………	二四三
我 信 念……………	二五七
最後の手紙(曉烏に送られたもの)……………	二六四
○	
小 傳 (曉烏稿)……………	二六七
年 譜……………	二六七

第一篇 研究時代

宗教哲學骸骨

『宗教哲學骸骨』は明治二十四年九月より翌年春に亘りて京都眞宗大學寮に於て宗教哲學を講ぜられたる原稿を刪定して同年八月法藏館より發刊せしめられた。同年九月より大學寮に於て再びこの刊本につき講義を爲すに當りて所々に書入れを加へられた。今この書入れの分を示す爲に片假名活字を用ひた。先生がこの書を講ぜらるるに當りて先づ始めに宗教哲學・宗教哲學の位置・宗教哲學と宗教學・宗教起源論大要の四項目について講じ、次に書入本に記されたる宗教義解を講じ、而して後に第一章より講ぜられたのである。

宗教義解

ホ ツ ブ ス (英一五八八—一六七八) 宗教ハ一國ノ認定スル見ル可ラザル諸力ヲ恐

怖スルモノ也。

ベ ツ ク (獨一七六一—一八四二) 各人其心内ノ判官タル良心ヲ標シテ外在ノ神

體ナリトシ其號命ニ從順スル、是レ宗教也。

カ シ ト (獨一七二四—一八〇四) 宗教ハ道德也。

フ ヒ テ (獨一七六二—一八一四) 宗教ハ知識也。

ヘ ー ゲ ル (獨一七七〇—一八三一) 宗教ハ絶待眞理ノ開發中ニ於テ再現的知覺ニ

對スル形狀也。

シユライエルマヘル (獨一七六八—一八三四) 宗教ハ無限者ニ對スル歸敬ノ感情也。

ス ベ ン セ ル (英一八二〇—) 宗教ハ宇宙萬有ニ關スル先天的考説也。

ル ヴ ァ イ ー ル (佛一八二六—) 人心ハ萬物並ニ自己ヲ統制スル不可思議ノ一



心ヲ認定シ、自ラ之ト結合セリト感ズルヲ以テ悦樂トス。而シテ此結合ノ感情ヨリシテ一生ノ行爲ヲ決定スル、是レ即チ宗教也。

タイロル (英一八三三—) 宗教ハ靈性的存在ノ信仰也。

マクス、ミューレル (英獨一八二三—) 宗教ハ感覺及道理ヲ離レテ無限ヲ知覺セシムル性能也。

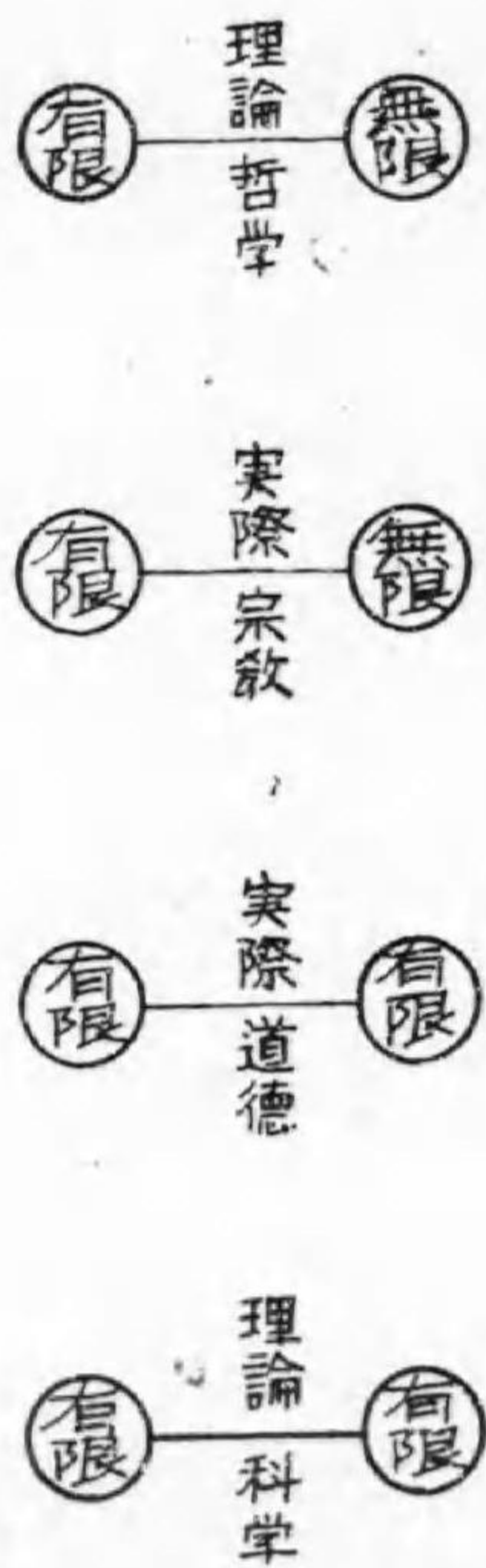
吾人ノ定義

宗教ハ有限無限ノ調和 (對合、コルレスポンドンス) 也。

無限は神佛眞如
有限は吾人自心

宗教ハ有限ノ無限ニ對スル實際也。(適切ニ吾人ノ方ヨリ云フ)

宗教ハ無限ノ自覺還元也。(無限ノ方ヨリ云フ)



科學アレバ、哲學ナカルベカラズ。道德アレバ、宗教ナカルベカラズ。何トナレバ、有限アレバ、無限ナカルベカラズ。有限無限アレバ、其關係 (理論、實

際) ナカルベカラザレバ也。

本質・實際・無礙・絶待・理想・不可知的・無覺・太極・眞如・天・神・理・一・妙法・眞理・本體・佛性・法性・如來・不可思議・阿彌陀。

之ヲ無限ト云ヒ、眞如ト云ヒ、神・佛等ト云フ。其感各々異也。是レ吾人ノ注意スベキ處也。

第一 宗教と學問

宗教心 宗教が吾人の間に存するは如何なる理由あるに由るかと言ふに、古來宗教起原の論區々にして一定せずと雖も、畢竟するに、吾人に於て之を提起すべき性能あるに由るなり。此性能を名けて宗教心といふ。然り而して、宗教心といふも、別に一種獨立の心體或は心用ありと謂ふにあらず。心體は固より單一にして、心用亦一類なり。唯、心體の對向する所異なるが故に、種々の性能の名あるのみ。且、宗教心は人心中一種の性能なりと雖ども、固より發達進化のものたるが故に、始にありては極めて隱微にして、漸く進んで顯著なるに至れるものなるなり。蓋し、宗教に、古今東西、種々の不同あるは、宗教心發達の差等あるに由るものなりとす。

宗教心の對境 宗教心は、其發達に種々の差等ありて一準ならずと雖ども、他の心用と別なる所以は、其宗教心たる本性に於て皆同一なるにあり。即ち、他の心性作用は大抵皆有限の境遇に對向すと雖ども、宗教心は之に異なりて、無限の境遇に對向するなり。

道理心と宗教心 無限に對向するものは、宗教心のみに限らず。道理心も亦無限に關係し得るに非ずや。

曰く、然り、道理心も無限に關係なきに非ず。然れども、道理心は、無限にのみ關係するに非ず、有限にも關係するなり。彼の諸多の學問は、皆道理心が關係する區域を表する者と謂うて可なり。而して其中に於て、唯哲學は道理心の無限に關係する區域を表するなり。然るに、道理心が無限に關係すると、宗教心が無限に關係するとは、大に異なり。道理心の關係するは、之を追求するにあり、宗教心の關係するは、之を受用するにあり。先に對向すと言へるは、即ち是なり。今少しく之を辨明せば、道理心は、無限の眞否を疑ひて、之を研究し之を討尋して、終に之を窮盡せんとす。故に、若し明々確々に之を獲得すれば、哲學の無限に關係する事業は終結す。然るに、宗教心は第一着歩に無限の實存を確信し、之に對向して以て其感化を受けんとするなり。故に、之を通言すれば、哲學の終る所に宗教の事業始まると謂ふべし。然れども、強に哲學を考究し終らざれば宗教に入る能はずと言ふにあらず、唯、無限を追求受用する順序に於て此の如き次第あり、と言ふのみ。^{*}直指横超、無限の實存を認めて、之を信仰し得る人に於ては、豈哲學の論議を要せんや。是れ古來、哲學は道理により、宗教は信仰による、と言ふ所以なり。

* 直指とは佛語に直指人心見性成佛とある言葉より來たのであり、直ちに無限に接するといふ意味の言葉です。又横超の横はよこさま、超はこえるで形式論理の範疇を超えて直ちに絶對に接する味ひを横超といひます。——曉島註

道理と信仰 果して然らば眞の宗教内には全く道理を許さざるか。夫れ然り、豈に夫れ然らんや。宗教の宗教たる所以の本性に於ては、信仰を根本と爲すと雖ども、若し夫れ宗教内の事に疑あるに當りては、豈道理

の研究を拒まんや。特に、宗教に達する行程に於ては、屢々道理の最も須要なることあり。世の智者學者が、宗教に達せんとするに當りて、先づ疑問を提起して之が解釋を求め、疑團氷釋して宗教に入るが如きは、實に正統の順序たるなり。是に於て注意すべきは、宗教は信仰を要すと雖ども、決して道理に違背したる信仰を要すと言ふにあらず。若し道理と信仰と違背することあらば、寧ろ信仰を棄てて道理を取るべきなり。何となれば、眞の道理と眞の信仰とは到底一致に歸すべきものなれども、道理は之を正すに方あり、信仰は之を改むるに軌なければなり。然れども、道理は其性質不完全を免れざるものなるが故に、人若し單に道理の一方に固着すれば、或は終に宗教の位置に達する能はざるやも保し難し。(世の學者多く此の理を了知せず、特に我國當時未熟學者徒に地球說、進化論を提して以て佛說を非難せんとす。大早計も亦甚しといふ可し。)是れ眞理探究者の常に省察すべき所の一點なり。蓋し、道理なるものは、事物に當りて常に其理由を求めて止まざるものなり。故に、甲を認むるに當りては、其理由とする乙を求め、乙を得るに及では、又其理由丙を求め、丙を得ては丁を求め、丁を得ては戊己を求むる等、愈々得れば愈々進み、到底休止する所なきが、道理の原性なり。(道理は常に不完不足を以て其特性とす。)故に、若し道理にして休止立脚の點を得んと欲せば、其點は當に一信仰たるべきや、必せり。故に、道理は到底信仰に依らざる能はざるなり。但、夥多の信仰あるに際して、其の間に彼此相契合するものと相矛盾するものとを甄別して、信仰の整調を得しむるは、即ち正に道理の本領たるなり。是れ、只宗教上の信仰に關してのみにあらず、一切の信仰に關して然るなり。此の如き

理由なるにより、道理と信仰とは、互に相依り相助くべきものにして、決して相害し相容れざるものに非ざるなり。相害し相容れざるは、彼の信仰と此の信仰との間に存するのみ。故に、道理に矛盾背反なく、總ての衝突争闘は信仰と信仰との間に存するものなりと謂ふを得べし。此點に於ては、信仰は道理によりて矯正せらるべきものたり、故に、道理は宗教内に於て甚だ須要のものたるなり。(宗教ハ哲學ヲ排斥スベカラズ。若シ之ヲ排斥セントスレバ、道理ニ訴ヘザルヲ得ズ。既ニ道理ニ訴フレバ、是レ則チ哲學ノ一部ニ進入スルモノニシテ、宗教ノ不完全ヲ證スルモノ也。)

第二有限無限

有限無限 抑々有限無限は、古來思想の二大項にして、其關係に於ては甚だ説明し難き所ありと雖ども、之を要するに、有限無限は相離るる能はざる關係を有するものなり、とするにあり。而して、無限を獨立・絶對等といひ、有限を依立・相對等といふ。今吾人は簡明に二者の性質を概説せんに、彼の萬物萬化するものは、是れ皆有限なるものなり。其故如何となれば、彼れ物化は、彼此相異あり、甲乙差別ありて、萬物萬化と言はれ、若し其別異なかりせば、萬物萬化と言はるる能はざればなり。而して、其別異なるは、他なし、彼此・甲乙の間に限界あるが故なり。然るに、此の如き萬物萬化は、ただ是れ唯一の無限なり。其故如何となれば、萬物萬化は物化の全體を包括するものなるが故に、其外に一物一化の之を限界するものなければなり。

Omni determinatio est negatio 限定ノ範疇

哲學ハ限定ノ疑問ヲ解釋スル能ハズ。唯宗教ハ此ノ如キ疑問ヲ見ズ。他語ヲ以テ之ヲ云ヘバ、哲學ハ有限ヲ以テ無限ヲ量ラントス、故ニ能ハズ。宗教ハ有限ヲ以テ無限ニ對ス。故ニ其事至當ナリ。只、其無限

ニ至ルハ所謂靈魂ノ開發ニヨルガ故ニ、轉化論ハ宗教哲學ノ最要所タリ*。

註解 神存在ノ證明(ロツツエ氏參照)

(一) 實在學的

(二) 宇宙學的

(三) 物理神學的

吾人ハ之ヲ述ブル事左ノ如シ。

有限ナルモノアルカ、無限ナルモノナカルベカラズ。若シ有限ナシト云ハバ、汝ノ自身ハ是レ何モノゾ。少クモ

汝ノ思想ハ是レ何モノゾ。

依立獨立 (實在學派) 有限は、其外に他の有限ありて、二者互に相限界するものなり。故に、甲の有限なるは、乙の之を限界することあるにより、乙の有限なるは、甲の之を限界することあるによる。然らば、甲は乙により、乙は甲に依るものなり。是れ依立なり。而して、此の如き有限は、幾何ありとするも、皆亦各々依立たるを免がれず。然るに、其有限の全體即ち無限は如何といふに、既に全體なるが故に、其外に一物の以て依るべきなきが故に、其體は依立にあらずして、獨立なるなり。故に、有限は依立なり、無限は獨立なり。

絶對相對 (カント哲學) 有限依立なるものは、常に彼此・甲乙相對して存するものなり、故に、之を相對といふ。之に反して、無限獨立なるものは、他に相對すべきものなきが故に、之を絶對といふなり。

唯一多數 (エレヤ哲學) 無限は、其外に一物なきものなるが故に、唯一なり。有限は、甲乙・彼此あるもの

なるが故に、多數なり。而して、茲に註記すべきは、多數の有限、各單一なりと雖ども、是れ單一にして、唯一にあらざるなり。多數の單一、相集りて唯一をなすなり。

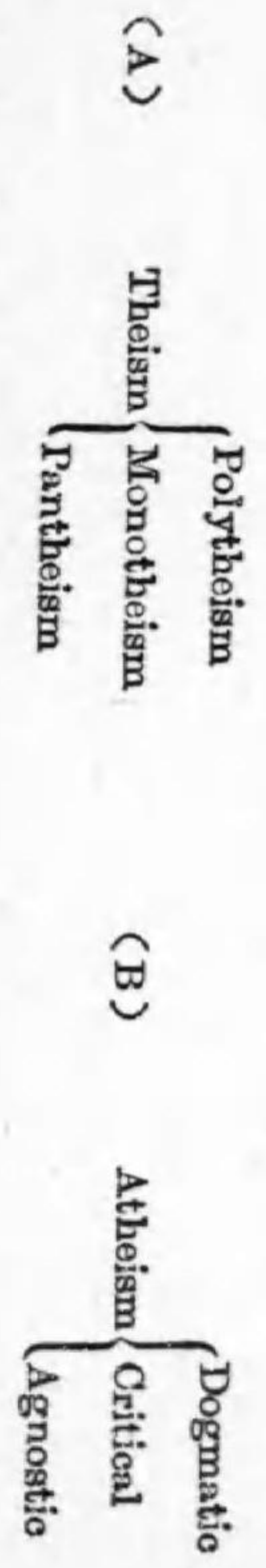
全體部分 唯一は、萬物萬化の全體なり。單一は、各其一部分なり。多數の單一、相集りて唯一を成す如く、多數の部分は、相集りて全體を成すものなり。

完全不完全 全體は、完全なり。部分は、不完全なり。故に、無限は完全なり。有限は不完全なり。

諸性提結 二項の諸性、略此の如し。今之を數學式を假りて提結すれば、

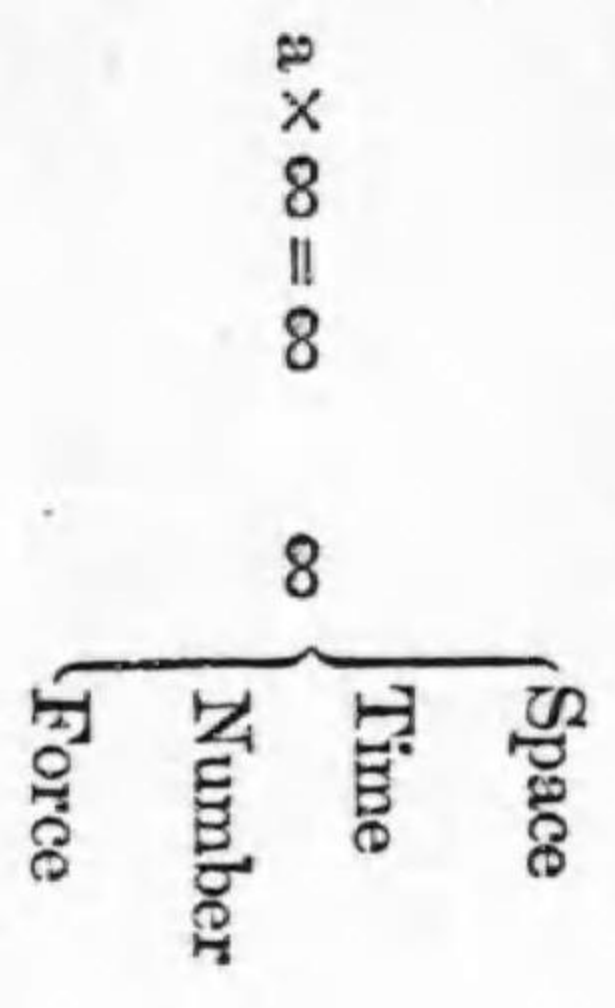
有限 = 依立 = 相對 = 單一 = 部分 = 不完全
無限 = 獨立 = 絕對 = 唯一 = 全體 = 完全

二項同體 (Pantheistic) 無限有限の二者、同體なりや、異體なりや。曰く「若しも二者異體なりとせば、無限の體の外に有限の體あらざるべからず。是れ無限の義に背反するものなり、故に、無限の體の外に有限の體あるべからず。即ち、無限有限は同一體たらざるべからざるなり。」



有限無數 有限無限は同體なりと雖ども、一個の有限は、無限と同體たる能はず、乃至、百千萬の有限

も、無限と同體たる能はず。唯、無數の有限相寄りて、始めて無限と同一體たるを得べきのみ。故に、有限は無數ならざるべからず。



有機組織 無數の有限は、相寄りて無限の一體を成す、其状態を有機組織と言ふ。蓋し、彼の單一が、互に相依り相待つて、一も獨立なるものなく、各單一が、常に他の一切と相別離すべからざる關係を有するのみならず、其關係によりて各單一が其自性を全うすること、恰も有機體の各機關が相依り相待て全體を構成するのみならず、此の相依相待によりて、始めて各機關が其特殊の作用を呈し得るが如きなり。喩へば、吾人の手は、全身と相別離すべからざる關係を有するが故に、若し之を切斷せば、全身に非常の影響を及ぼすのみならず、手其物は全く手たる活動作用を失ふに至るが如き、是なり。(柔術家ハ手指ヲ捉ヘテ人ヲ投ズ。齒痛、腹痛ノ全身ヲ惱マスアリ。頂門ノ一針能ク人ヲ殺スアリ。)無數の有限が各其自性を失はざるは、其他の無數の有限と有機組織を成し、諸機關相寄りて一身體を構成するが如く、諸多の有限相寄りて唯一無限體を組成すればなり。

有機組織ヲ細説スレバ堅ト横トノ二様アリ。其横ハ空間的、其堅ハ時間的ニ鶏・雛・卵ノ關係。歴史學・胎生學ハ、眞理其者ノ有機體タルニ因ルニト云フベシ。其根基ニ就イテ云ヘバ、思想ノ開發環アリ。「思想ハ有機體也」Schelling.

主伴互具 夫れ此の如く、萬多の有限は有機組織を成すが故に、各有限が、其自性自能を全うする爲には、他の一切の有限は之が機械たるなり。即ち、甲が其性能を全うするには、乙・丙・丁等の一切有限は之が機械となり、乙が其性能を全うするには、甲・丙・丁等之が機械となるなり。他語を以て之を言へば、宇宙間、各一の有限が主公となるときは、他の一切有限は之が伴屬となりて、互に相具足するものなり。

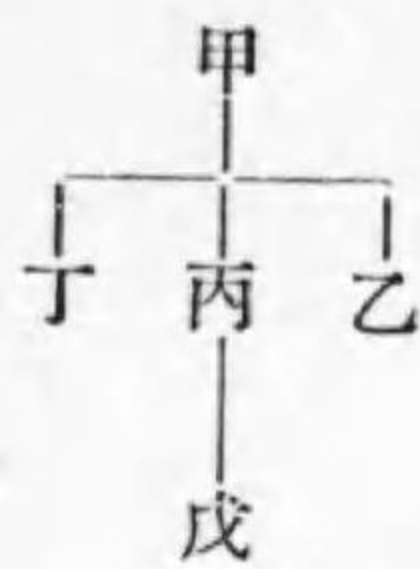
Is the world made for Caesar? Yes; and No.

It is made for man, for beast, for bird, for bird, for every thing.

舉 一 全 收

一國之主、萬金之翁

故に、一對の主伴を擧ぐれば、常に無限の全體を盡すものなり。然り而して、甲・乙・丙・丁等、何れの一が主となるも、常に同じく無限の全體を盡すと雖ども、其無限の内部の關係に於ては一々相異なるものなり、今上圖を以て之を解すべし。



甲・乙・丙・丁・戊は一家族の諸員たり。而して諸員は、皆各主公たる關係に立つを得るなり。其様左の如し。

第一。甲の主公たるときは、乙・丙・丁は其子、戊は其孫なり。

第二。乙の主公たるときは、甲は其父、丙・丁は其弟、戊は其弟甥なり。

第三。丙の主公たるときは、甲は其父、乙は其兄、丁は其弟、戊は其子なり。

第四。丁の主公たるときは、甲は其父、乙・丙は其兄、戊は其兄甥なり。

第五。戊の主公たるときは、甲は其祖父、丙は其父、乙は其伯父、丁は其叔父なり。

此の如く、吾人家族の上に於て血統の關係あり。而して、皆各主公となるを得るに當りて、甲の主公たる場合と乙の主公たる場合とによりて、全體上の關係、大に異相を呈するを見る。今、甲丙の間のみに就いて更に之を詳説するに、甲丙間に於て、絶對的の關係は一なりと雖ども、之を甲を主として見ると丙を主として見るとに於て、全く異相の關係となるなり。而して、之を實際行爲上の事を以て言へば、甲よりは、親として子を慈愛する思行を起し、丙よりは、子として親に孝敬する思行を起す。加之、甲より言へば、丙は其所所有の子となり、丙より言へば、甲が却て其所所有の親となるなり。宇宙萬有が、有機的の組織により、彼此平等にして、而も彼此差別あり、各の無限の全體を盡すと雖ども、而も各々相異なり、各々法界に彌互して、而も互に無礙融通せること、先の例を以て推解すべし。此關係を名けて主伴互具の關係といふ。宗教の要は此關係を覺了せしむるにあり。是れ、有限の無限に對向する所以なり。

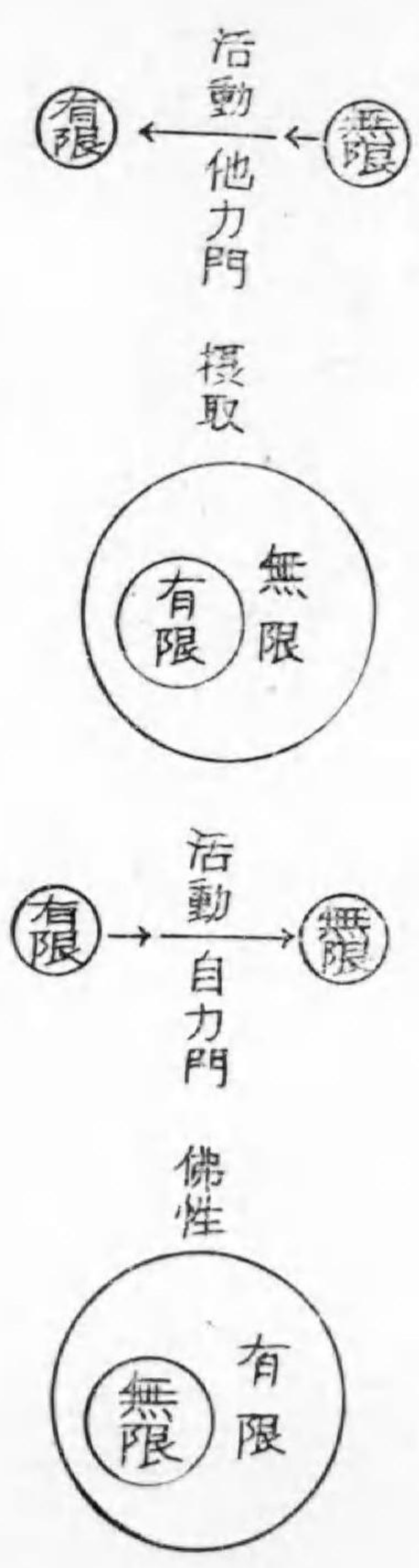
自力他力

有限が無限に對向するに於て、二種の不同あり。一は無限を以て因性とし、一は無限を以て

果體とする、是なり。蓋し、吾人が事物を認識するは、或は之を因とし、或は之を果とせざる能はざるなり。今無限を認むるも亦然り。之を因とすれば、未開發の性となし、之を果とすれば、已開發の體とするなり。因性は、未だ無限に顯現せざるものなるが故に、有限の内部に存するものたらざるべからず。果體は、既に無限に顯現せるものなるが故に、有限の外部に存せざるべからず。此に由て、宗教の實際に於ては、有限が其内部の因性を開發し、進んで無限に到達せんとするあり。又、有限の外部にある果體は、來りて有限を攝引し、無限に到達せしめんとするあり。前者を自力門といひ、後者を他力門といふ。即ち、彼の因性を開發するは、有限が各自己の力を以て之を爲すなり。又、無限の攝引するは、有限に對して他の力之を爲すなり。此二門の區別は、宗教上に於て最も根本たるものにして、吾人は此二門によらずば、宗教の實際に入る能はざるべし。人或は曰はん、二門の區別を爲さざるも、無限は、吾人の内外にありて、因果同時に、吾人を開導すと謂はざるべからずと。是れ、吾人をして、同時同體に種子たり樹木たるものを認むべし、と言ふ論なり。吾人は、到底之を爲し能はざるなり。彼の無限は、到底唯一なり。而して、吾人が之を認むるに當りては、現に之を因性の唯一なりとするか、或は之を果體の唯一なりとするかの、何れか一方に出でざるを得ざるなり。種子たるときは種子たり、樹木たるときは樹木たり、とせざる能はざるが如し。更に面を換へて之を論すれば、宇宙萬有は畢竟唯一體あるのみ、故に、其活動は唯一用たらざるべからず。故に、自力門に於ては、一切の活動を以て自己一人の作用とし、(故に、一切唯識或は三界唯一心等の見解を生ず)。他力門に於

ては、一切の活動を以て悉く他力不可思議の作用となす。(故に、願力回向、或は他力回向の信心等の言説あり)。然りと雖ども、其要とする所は、共に一無限力の活動によりて、有限が轉じて無限に進化するにあるなり。

實際ハ活動ナリ。



無限トハ何物ノ無限ナリヤ。曰ク一切ノ無限ナリ、悲モ無限ナリ、智モ無限ナリ、時間上ニモ無限ナレバ、空間上ニモ無限ナリ。

無
限
悲 智 時 空
間 間

宗尊體

上ニ論説スル所ノ無限ハ吾人所對ノ境界トナリ、理想トナル。而シテ其境界理想ハ、吾人ヲシテ、尊崇敬慕セシムルニ至ル。特ニ他力門ニアリテハ、其事顯著ナリ。然リ而シテ、此ノ如キ尊體ハ、無意無心ノ無限ニアラズシテ、有意有心ノ實體タル也。即チ後章ニ云フ所ノ轉化開發ニヨリテ、究竟ノ位置ニ到達セル心靈タル也。之ヲ報身ト云フ。

三身 無限ノ實體ニツキ、法・報・應ノ三身アリ。



第三 靈魂論

靈魂 前段論結するが如く、宗教の要は、無限力の活動によりて有限が進みて無限に化するにあり。之を有限の方より言へば、有限が開發して無限に進達するにあるなり。而して、有限は、萬種千類なりと雖ども、吾人の實際に於ては、各目の靈魂或は心識が開發進化して、無限に到達するが、宗教の要旨なりとす。然り而して、吾人の靈魂といふも、萬多の有限中、一種特別のものにあらず。唯其萬多中の隨一に過ぎざるものなるが故に、吾人が靈魂に就いて究明し得る所は、一切の有限に推及し得る所の事なるなり。(草木國土悉皆成佛と言へるは、吾人が無限に達することを得るが如く、草木國土も亦無限に達することを得といふものなり)。請ふ先づ靈魂の體性を考究し、次いで其開發に及ばん。

靈魂諸説

靈魂の觀念は、宗教と共に古く宗教と共に普し、隨つて其説亦甚だ區々にして、容易に説き盡し難しと雖ども、今其説を大別するに、左の三種に歸するが如し。

一、靈魂有形説

是れ、最も未開の説にして、靈魂を以て形體あるものとなすものなり。而して、其所謂體形なるもの亦甚だ多様なり。或は、靈魂を以て全く生人と異ならず、耳目・鼻口・胸腹・四肢を具

へたるものと爲すあり、或は、上半部は人身の如く、下半部は朦朧たりと爲すあり。或は、玉の如しと爲すあり、卵の如しと爲すあり。其他、各自の幽影を以て魂と爲すあり、氣息を以て魂と爲すあり、心臓を以て魂と爲すあり、夢中の現象を以て魂と爲すあり。又、靈魂の行爲を説くに、人死するとき、去りて他に行くこと爲すあり、去りて後屢々歸り訪ふと爲すあり、墓邊に徘徊すと爲すあり、歸りて他人の體に憑くと爲すあり。或は人の生活中に於ても、睡眠中には、體を去りて、他遊すと爲すあり、氣絶・癲癇等の時は、體を去りて他に在りとなすあり。其他、天に昇ると言ひ、地に降ると言ふあり。又、生活中、身體内一定の位所にありと言ふ等あり。此の如きは、皆靈魂を以て有形の體となし、其空間的關係に屬することを認信するものなり。

二、靈魂無形説　此説は、前者に反して、靈魂を以て全く無形のものとなすなり。而して、人智が前説より轉じて此に至るには、其間に數多の段次を経過し來るなり。蓋し、世間多數の人士は、靈魂を以て形質なしとすると雖ども、亦一種の本體ありとなすものあり。然れども、其説たるや、只本體ありと言ふのみにて、甚だ不明瞭なるが故に、動もすれば有形の言説を免れざるなり。即ち、靈魂は身體の或部分にあらざるを得ずと言ふが如きは、下意識の常人より上一世の碩學に至るまで、殆んど之を免れざるが如し。而して、此の如き亂想漸く其跡を絶つに至れば、則ち純然たる無形説を唱ふると共に、靈魂其形なしと論結するに至る。蓋し、吾人の知識が一程の度に至れば、事物の觀察實驗を貴重し、之に合するものが

實にして、之に合せざるものは非實なり、と爲すに至る。然るに、未だ思想の必然を確認するに至らざるが故に、彼の實驗觀察を以て全く感覺作用と同一視し、感覺に基くものは實なり、之に基かざるものは非實なり、と言ふ。其論の極、終に物質を以て唯一の實體とし、彼の靈魂の如きは、全く無形のものにして其體なく、唯物質分子の結合より生ずる一種の作用に過ぎず、と爲すに至る。是れ甚だ極端の説にして、其實、靈魂其體なしと爲すものなり。今其説系の概要を述べれば、抑々靈魂は、能く外物を認識し能く外物に反動するものなるが故に、其體物質と密接の關係を有せざるべからず。而して、實に此關係ありて、身體の疲勞・血液の量質等、諸般の有形事狀は、常に靈魂に非常の影響を及ぼすを見る。更に精しく審察すれば、靈魂は物質を離れては毫も其作用を顯はす能はず、神經を切斷すれば、感覺を失ひ、運動を生ずる能はず、腦髓を破壊すれば、知覺を失ひ、思想を失ひ、情意を失ふに至るなり。此等によりて之を觀れば、精神作用は神経系統に依屬す、と謂はざる可からざるが如し。又更に精察するに、高等なる精神作用は、始より此の如くなるに非ず。單純作用の漸次に積集聯生して起りたるものにして、其最單純なる反射作用は、神經の興奮性といふべく、神經の興奮性は、神經を組織せる物質の分子作用に歸着するものたるが如し。果して然らば、物質の外に靈魂の別體あるにあらず。物質分子の結果作用が、即ち心識或は靈魂の作用なり、と謂ふべきなりとす。是れ唯物論者の説を爲す所以にして、彼等の形體的作用の合果と稱するものなり。即ち、有形の物體に屬する作用が、相合して新奇の結果を呈するを言ふ。其最簡易なる場

合は、勢力の平行方形にして、喩へば、一船體の南進するに當りて、東風の加はる時は、船體は西南に向ふ結果を生ずるが如し。此場合に於て、船體は、機關の作用のみならば、南進する結果を現すべく、風力のみなれば、西進する結果を現すべし。然るに、今二力一時に働くが故に、西南に向ふ新結果を現せり。此新結果は、南進西進、兩結果の相合したるものなること、數理を以て、證明し得べしと云ふ。唯物論者は、精神作用も同類のものにして、其極めて複雑なるものに過ぎず、即ち、物質の分子作用の非常に複雑に聯合したる結果に過ぎず、となすなり。是れ、靈魂無形説の極端論なり。

三、靈魂自覺説 靈魂無體説（無形説中の極端論）は、靈魂説中の最も非理なるものなり。只極端唯物論者のみ、之を唱導せしかども、彼等も其自ら唱へし所を確信せしや否や、甚だ疑はしきものの如し。蓋し、物質・運動を偏重するの極、此二者あるを知りて其他あるを知らず、否、物質運動を説くも、其論理を精察せず、終に此の如き不稽の説を成すに至りたるものなり。今彼の形體的合果の説を驗して、其過失を證不せん。唯物論者は、合果なるが故に別體なし、と云ふと雖ども、吾人の見る所によれば、合果は反て必ず其由て起こるべき一體あることを、證すもの如し。彼の船行の喩を見るも、西南向と言へる合果は、一船體あるによる。若し船體なくんば、合果は決して起る能はざるなり。若し又船體あるも、其數二個にして、一個は機關の作用により、一個は風力を受けば、合果は決して現ぜざるべし。合果の現はれ得るは、彼の二作用を受くる船體の一個なるによるものなり。果して然らば、精神作用は、物質の分子作用

の合果なりとするも、此合果を生ずるとき、特別の一中心體なかるべからざるなり。是れ正に靈魂といふべきものならんか。然れども、是れ甚だ漠然たる言説たるを免かれず。吾人は、今之をして更に明瞭ならしめんとするに、直に吾人の精神作用の特性を討究すべし。吾人の精神作用は、多種多様なりと雖ども之を一括して覺知作用或は緣慮作用といふ。蓋し、精神の原能は、外界萬差の物化に對して之を覺知するにあり、客觀的の事物を緣として之を慮知するにあり。而して、覺知と慮知とは、其主體なくして起こるものにあらず、各個人が自から主となりて、覺慮することを得るなり。色を視、聲を聽くを初として、喜怒・思考・願望等、一切の作用は、面貌之を爲すにあらず、唇舌之を爲すにあらず、胸腹之を爲すにあらず、臟腑氣血之を爲すにあらず、筋肉神經之を爲すにあらずして、皆吾人自己が之を爲すなり。皆吾人各自の心識之を爲すなり、皆吾人各自の靈魂、之を爲すなり。之を自覺といふ。然れば即ち、彼の靈魂なるものは、此自覺作用の本體を指すものにして、決して形體的物質と混同すべからず。又、形體的運動の合果と爲すべからざるなり。更に進んで自覺作用を驗するに、此作用は常に統一的の性能あるものなり。乃ち、吾人は萬差の物化を見聞覺知すれども、其見聞覺知たるや、個々隔別分離したるものにあらざるなり。若し、個々隔別分離したるものならんか、前瞬の覺知は後瞬の覺知と關係なく、前念後念、刹那刹那の覺知は、各々別々に離散して、記憶・想像・判斷・推理等は之なかるべし。否、一切の精神作用は之なかるべし。然るに之に反して、常に前念後念の覺知が、同一體に記憶せらるるのみならず、數年數十年の間に身

體の物質は新陳代謝するも、其間の覺知が記憶回想せらるる已上は、茲に不斷相續の一體なかるべからざるなり。故に、精神の本體は、自覺の一體、即ち靈魂にあり、と謂はざるべからざるなり。

第四轉化論

變轉 吾人は心識靈魂の實在を論定したるが故に、次に其開發を考究せんとするに、靈魂の開發は萬有轉化の一分なるが故に、先づ轉化の理論より考究すべし。熟く宇宙の萬有を大觀するに、日月星辰は斷えず天空に運轉し、山岳河海は常に地上に動搖し、物體勢力は運動轉換し、物質元素は結合離散し、動物植物には生死・長衰・榮枯・開凋の現象あり。社會上・歴史上には文野興亡の變遷あり。其他、政治・經濟・製造・工藝等、人世百般の事業に至るまで、皆一も變化の事項にあらざるはなし。然り而して、此の如き萬化を屢々進化と概稱すと雖ども、是れただ其一半を擧ぐるのみ。若し全體を盡さんとせば、變化或は轉化と言はざるべからず。而して其變化或は轉化を外形上より區別すれば、進化・退化の二様あるなり。蓋し、轉變は無量なりと雖ども、畢竟するに、有限より無限に向ふものと、無限より有限に向ふものとの、二様に歸せざるはなし。而して、其有限よりするものを進化といひ、無限よりするものを退化といふ。(固より、何れを進化とし、何れを退化とするも、可なりと雖ども、宗教上に於て、有限の無限に到るを進むといひ、其反對を退くといふ、便宜上によるのみ。)

轉 化
進 化——有限より無限に向ふ。
退 化——無限より有限に向ふ。

然り而して、一切の轉化は皆悉く此二様に歸着せざるなし。其理由は他ならず、此二様は全く相反對のものにして、一物の變轉するは、一方に向ふにあらざれば、他方に向はざるを得ざればなり。

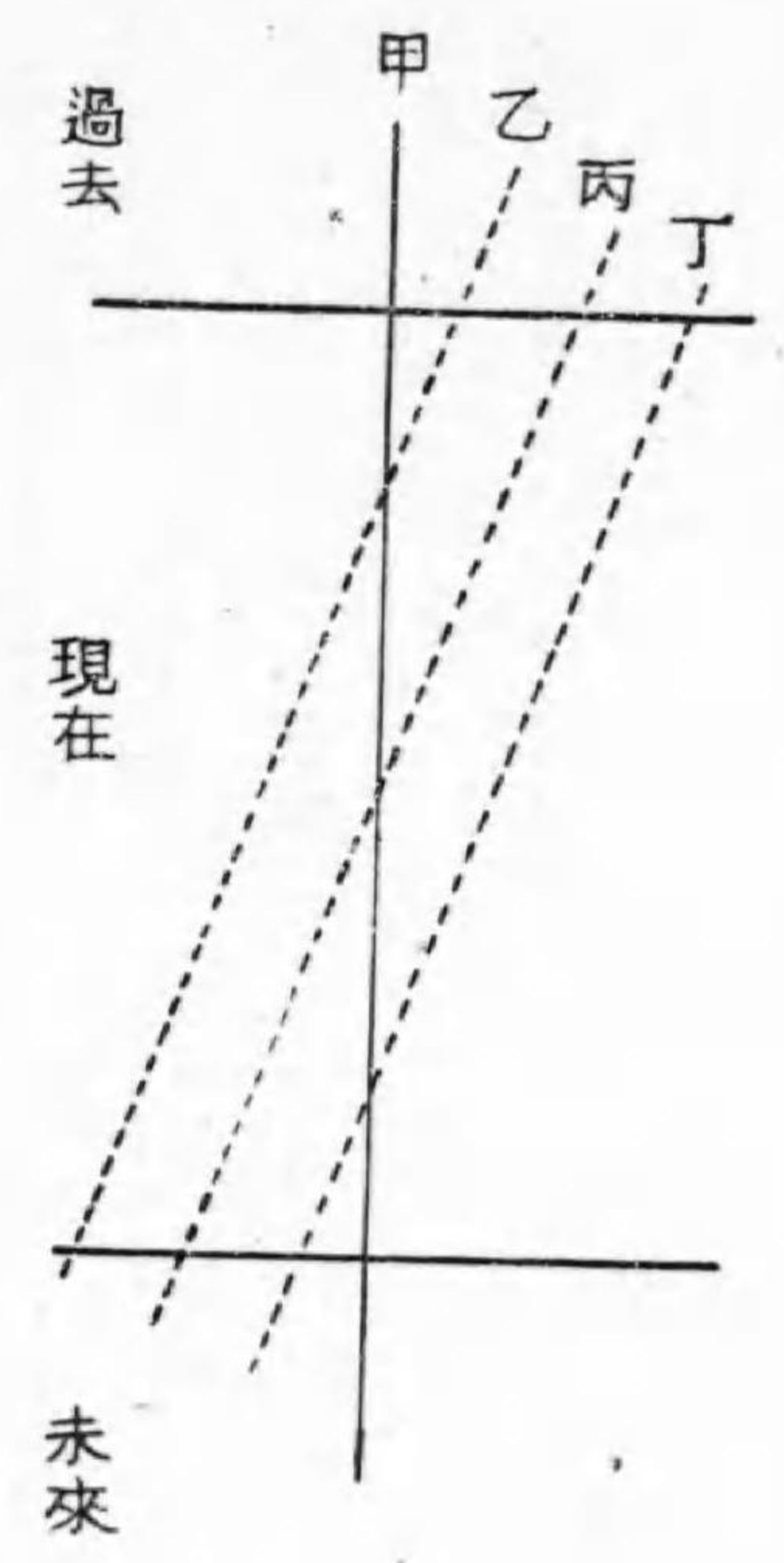
一體貫通 萬有の轉化に就いて、最も樞要なる一原理あり、一體貫通の原理といふ。即ち、一轉化には、必ず其前後の状態を貫通せる一體の存するを基本とすること、是なり。蓋し、轉變の作用は、之を解するに。前滅後生と一體貫通との二種あり。共に轉變作用を説明し得べしと雖ども、前者は、萬有の規則ある聯絡を解釋する能はずして、ただ亂起亂滅の厖雜無常を指說するを得るのみ。然るに、萬有轉化の實相は決して此の如きものにあらず、整然たる順序あり、秩然たる階次ありて、甲は必ず乙を引起し、丙・丁等を引起すことなきなり。是れ學問研究の成立する所以なり。若し、萬有の轉化に一定の規律原則あるにあらずんば、學理は到底存する能はざるなり。又、持戒修行の效力ある所以も、畢竟、其原因あれば確然不動の結果あるによる。若し原因なくして結果あり、原因あるも結果なきときは、誰か戒行を持修するものあらん。而して、此因果の必然なることを得るは、前後の状態を貫通したる一體あるによるものなり。若し此一體なしとすれば、因と果とは、毫も關係なきものなるが故に、其間に必然の關係は存在する能はざること、勿論なり。故に、轉變作用の基本は一體貫通を要す、と謂はざるべからざるなり。是に於て、因みに靈魂の存在を

一層確定することを得るなり。蓋し、轉迷開悟といひ、修因感果といふは、畢竟轉化作用に過ぎざれば、之を貫通する一體なかるべからざるなり。何ものか迷悟し、何ものか修感する。他なし、吾人各自の靈魂是なり。即ち、靈魂は、迷悟を貫通し、因果を貫通せる、一體たるなり。

自覺一致
靈魂實在の證
轉化基本

轉化と遺傳 夫れ此の如く、轉化は一體貫通を基本とするものなり。然れば、近代世間の所謂、社會の進化（野蠻より文明に進化すといふもの）・人類の進化（無社會より有社會に進化すといふもの）・動物の進化（下等動物より高等動物に進化すといふもの）等は果して適當なりや。此等の場合に於て如何なる貫通の一體あるか、吾人は之を認知する能はざるが如し。然れば、彼等は、進化といふべからざるか。請ふ、少しく之を考究せん。蓋し、彼等數者の進化は、廣漠多類なりと雖ども、凡そ生物の進化は、皆親子遺傳を根據とするものなり、即ち、親の性質を子が繼承し、子より孫に、孫より曾孫に、次第傳承する其間に於て、先代經驗の結果を繼承積集する所に、進化の事業成る、と謂ふにあるなり。然るに、其親子の間には、一體貫通せるものありやと言ふに、之あることなし。故に、吾人の轉化説よりいへば、親は親一人、子は子一人の上に於て、進化を談じ得べきのみ、決して親子兩體の上に及んで進化を謂ひ能はざるなり。乃ち、親は親一人にて、其一生の間に、幼より壯に、壯より成に進んで、漸次に轉化するものなり。子も亦然り。否、吾に

一生中のみにあらず、親子は各々其一體の過去・現在・未來に互りて進化すべきものなり。是れ、進化の正系なり。而して、彼の遺傳と稱する關係は如何といふに、是れ甚だ重要なるものにして、此關係によりて、子は親の性質を繼承するもの如し。然れども、是は子の一人一體轉化の行路に於て、此地位に投合するものたるに過ぎず。故に、之を進化と名けば、傍系の進化と謂ふべし。左圖中、甲は正系にして、乙・丙・丁は之に對する傍系を表す。



然れども、正傍の區別は比較的の事なるが故に、乙は乙一人、丙は丙一人、丁は丁一人にて皆各々自から正系となり得るなり、ただ甲に對しては皆傍系たるなり。蓋し、此正傍の關係は前の主伴の關係と應合するものなり。

轉化(進化)
 正系——靈魂開發
 傍系——親子遺傳

此の如く、正傍二系ありと雖ども、若し正系の轉化にして説明し盡さるれば、傍系上の轉化は自ら其内に包含さるるなり。但、吾人は靈魂の過去・未來を考究するよりも、現在に就いて觀察するの便宜多きが故に實際の研究上に於ては、傍系による方却て效果多きを覺ゆ。

因縁 然り而して、吾人の靈魂が正系の轉化を爲すに當りて、之に投合し來る所の傍系の轉化は、ただ所謂親子的の關係あるもののみにあらざるなり。通常吾人が無機・有機の非活物と見做す所のものと雖ども、苟も吾人靈魂の轉化作用に關係し來る所のもの、皆悉く傍系轉化の關係に立つものなり。而して、傍系轉化の場合に於て、通常は甲が乙・丙・丁に其性質を感傳することのみを提説すれども、其實、乙・丙・丁は、亦各々甲より其性質を感傳するものなり。蓋し、正動には必ず反動あるものなり。萬有は皆悉く互に有機的組織の關係に在るものなり。吾人は各自に開發性を具へて轉化すと雖ども、其行路に於ては、常に自他相助け、彼我相倚るものなり。此の如き自我を名けて因といひ、他彼を名けて縁といふ。縁とは、凡そ因に關係あるものを總括するものにして、其及ぶ所甚だ廣大なるものなり。今一例を擧げて之を解せば、茲に一人ありて、床上に住立す、と想ふべし。此人の住立し得る所以は、床板あるによる。而して、床板は柱脚あるにより、柱脚は地面により、地の上層は下層により、下層も亦其下層による等、其人の脚下に依止する

所、實に際限を見る能はず。而して。是れ唯一方のみ。若し上方に空氣天井等なくんば、其人は住立する能はずして揚擧せらるべし。又、左右前後の各方も若し眞空ならば其人は轉倒すべし。加之、其人の此姿勢を爲し得るは其身體の勢力による。而して、其の身體の勢力は血液の循環により、血液は飲食物による。而して、其飲食には、肥後の米あり、伊丹の酒あり、英の製あり、米の産あり、獨・佛・伊・澳の滋養攝生品等、其人の飲食資料たる以上は、其身體姿勢は英・米・獨・佛等の山河・草木・禽獸・金石と相ひ關係せるものなり。否、更に其關係を精察すれば、地上萬多の事物のみならず、天上遙空の日月・星辰等、一切の物象と關係するものなり。飲食の點より觀ること此の如し。衣服住居の點より觀ること之によりて類推すべし。次に轉じて又思想の點より考察すべし。彼の床上に立てる人の思想は、世界各國の學術技藝と相關係するのみならず、或は孔子と關係し、ソクラテスと關係し、耶蘇と關係し、釋迦と關係す。何となれば、此等の人士なかりせば、此人の現在の思想は有る能はざるものなればなり。否、吾人に現在過去と關係するのみならず、未來の人士と關係すること預め推認し得べきなり。夫れ此の如く、吾人が目前單獨の事項と認定する所のものに就いても、之を精察すれば、實に宇宙の一切萬有と關係するを見るなり。此理を推して精究すれば、宇宙萬有の轉化は、其如何なる幽微なるものと雖ども、各々常に其他の一切萬有と相關係して生起するものなることを知る。芥爾の一念に三千の法を具すといふ、其旨誠に深い哉。芥爾の一念、尙且つ然り、況んや是より廣大なるものに於てをや。之を結するに、一一體の、原因より結果に轉化するに當りて、其他の一切萬有

は、此が助縁となるものにして、因・縁・果の三者は、常に相寄りて萬有全體を盡くすものなるが故に、一切の轉化は、一方より言へば、單一物體の作なりといふを得れども、他方より精密に言へば、萬有全體の作用、即ち唯一無限の作用なり、と謂はざるを得ざるものなり。

* 芥爾の一念に三千の法を具すといふは天台學の教へるところであつて、芥爾の一念とは私共が暑いか寒いかの念のことであり、この念に三千の法を具すといふは、あらゆる森羅萬象を具ふるといふ意味である。——嶋鳥註

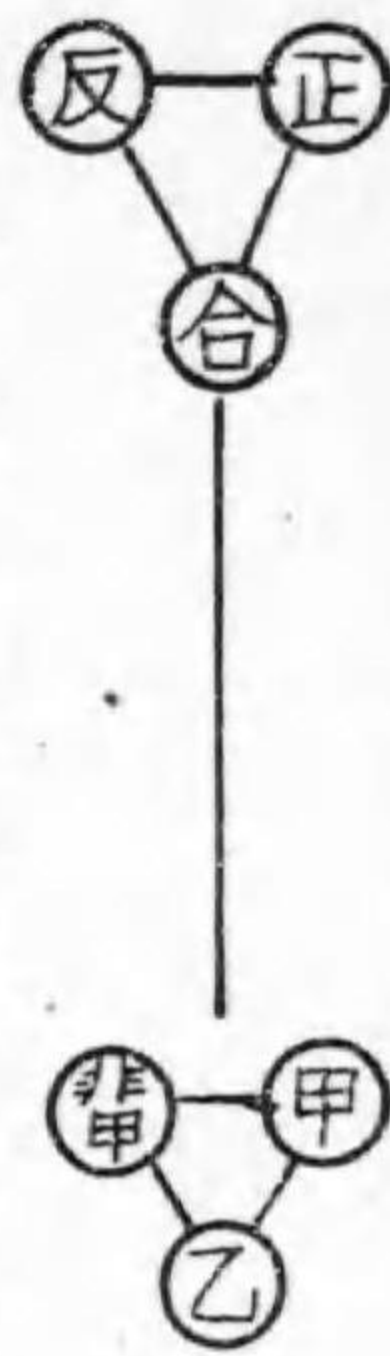
因果の理法

萬有轉化の理法は因縁果の理法なること、既に之を論述したり。然るに、此理法は萬有界中最も重要な原則にして、古來或は因果の理法といひ、或は充理の原則といひ、或は三段の軌範として、提說せられたるものなるが故に、今此等の諸説を批判して、一層因縁果の説を明らかにせん。抑々因果の理法といひ充理の原則といふは、共に前後二項の事實に必然の關係あることを提唱するものなり。其前項を原因或は因據といひ、其後項を結果或は果象といふ。

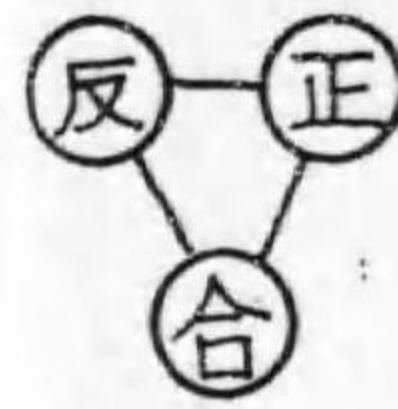
因果

然り而して、此因果の種類を説明するに於て、ショーペンハウエルの如きは、甚だ精密なりと雖ども、理法の源底成立を論究するに於ては、未だ盡さざるものあり。何となれば、單一の因項が何故に果項に轉ずるに至るべき、かを指説せざればなり。ヘーゲルの三段軌範は、正・反・合の三段を説き、始て精密を得たり、

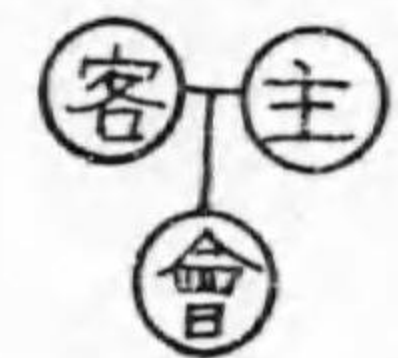
と言ふべし。然りと雖ども、之を説明するに、正は自然必然に反を提起し、反は自然必然に正と結んで合を



生ず、といふ。故に、正・反の二段のみに就いて見るときは、前の因果二項の説に同じきものなり。唯、正反の二者相結んで合を生ず、といふに至りて、新奇の説を提唱したるものなり。然るに、吾人は何故に、或る時は正の二前項にて反の後項を生じ、或る時は正反の二前項にて合の後項を生ずるの、差あるかを解する能はず。若し一前項にて後項を生ずべくば、何故に新奇の二法を要とするか。寧ろ、徹頭徹尾、一前項の後項を生ずるの單純なるに如かざるなり。然り而して、一前項が其のみにて後項を生ずることは、到底吾人の解する能はざる所なり。彼の物理学に於ては、静止體の運動を生じ或は運動體の運動を變ずるには、必ず他の勢力の加はるを待つと云ふ。吾人が轉化の觀念も亦之に似たり。一體の變化するには、必ず其他に客體の存するを要す。主客二體の會合によりて、其所に始めて一段の結果を生ずるを見る。ヘーゲルの反といへるは、蓋し此客體を指せるなり。故に、之を圖示せば、



にあらすして、



たらざるべからず

是れ、先に謂ふ所の因・縁・果なをり。蓋し、ヘーゲルの意は、絶對一元より相對多元様開展せしめんとしたるものなり、故に、此の如く二の方軌を一原則中に混合するに至れるなり。然れども、吾人の見る所によれば、絶對界・相對界の間には因果の關係あるものにあらざるなり。次節に論明するが如し。

因縁果ノ體



絶對と因果

吾人轉化の原則たる因・縁・果の理法を究明したるに際し、茲に一の最大注意を要すべき

ことあり、他なし、此理法は有限相對間の理法にして、絶對無限界の理法にあらざること、是なり。然るに古來、有限無限を以て恰も有限界内の二物の如く見做し、或は無限より有限を開發すといひ、或は無限轉じて有限と化すといふあり。是れ唯強て比説したるものとすれば、寛假して可なりと雖ども、若し夫れ其説により、無限の有限を發生する、恰も米種の米苗を生ずるが如く、卵子が雛鳥と化するが如く、思考するに至らば、非常の誤謬を免れざるべし。無限有限の關係は、無限先づあり、其無限滅して有限生ずるに非ず。眞如先づあり、其體轉じて萬法と化するに非ず。無限眞如と有限萬法とは、同體並立のものにして、決して前後別立のものにあらざるなり。一元が二元に自展し絶對が相對に轉化することは、吾人の思議し能はざる所

なり。假令、其關係を強て開發、或は開展と名くるも、是れ尋常の開發開展にはあらず。一體が其のみにて轉化を爲すことは、吾人の思議し得る所にあらざるなり。吾人の思想は、因縁果の理法を脱する能はざるなり。今絶對無限が相對有限に開發すといふときは、如何なるものが縁となるか、決して其物なきなり。然れども、若し強て絶對相對・無限有限の關係を轉化開發的に説かんとせば、吾人は因縁果の理法に隨ひ、眞如と無明と因縁相結んで、萬法の果を生ず、と謂ふべきのみ。此眞如とは絶對無限なり、萬法とは相對有限なり、而して無明とは、吾人の不得思議を提表して客位に假立したる者に過ぎず。故に、眞如の水が無明の風によりて萬法の波を生ず、といへるは、其實、眞如と萬法との關係は、吾人の思議し得ざる所の轉化なり、といふことなり。蓋し、轉化にあらざるものに轉化の觀念を適用したるものなり。

靈魂開發　轉化論の大要此の如し。而して、靈魂は有限界の一體として、其開發は轉化の理法に順はざる可からざること勿論なり。然り而して、其規則を追究するに先ち、茲に一個の要義あり。他なし、轉化の理法は有限界内の事にして、無限界に互る能はざるものなりと雖ども、前に説く所によれば、靈魂の開發は有限より無限に到達するにありといへり。是れ如何が理解すべき。曰く、靈魂の開發は有限より無限に進達するにありと雖ども、有限の靈魂が轉じて無限の非靈魂に化するに非ず。如何に開發するも、有限は到底有限にして、決して無限に轉化すること能はず。只、其理想或は境界が有限より轉じて無限に化するのみ。恰も、一珠玉は始終一珠玉なれども、琢磨の功により琢磨たる光輝を放つに至るが如し。固より境界は本體を

離れたるものにあらざるが故に、其光輝のある所に本體ありとすれば、彼の珠玉も、始は只其内部にのみ炯炯たりしものが、琢磨の功により十方を照耀するに至れば、其體十方に彌滿せり、と言ふを得べき歟。若し然りといふを得ば、彼の有限の覺知が開發し、進んで無限の理想・無限の境界に住するに至るとき、其體も無限に轉化せり、と謂ひ難きにはあらざるべし。特に、個々の有限は各々別體ありといふと雖ども、其は唯前に言ふ所の單一に就いていふのみ。若し其本眞の實體に至りては唯一の無限體なれば、各有限が實は無限のものたるなり。唯、此の如き唯一無限體上に數多の單一あるの關係は、定に不可思議なり。然れども、此關係は、吾人靈魂の開發によりて始て生じたるものにあらずして、本來本具の關係たるなり。而して、吾人靈魂の開發は、此本來本具の關係を覺知するに在るなり。通常の智德進歩に於ても蓋し亦同様なり。彼の智者・賢者は事物の性能を創造するものにあらず、只、其本來の性能を窮知して、其知識相應の境界に處するのみ。而して、其名聲の聞ゆる所、其德風の薫する所、人之を慕ひ草之に靡きて、至大の感應を生ずるを見る。靈魂の開發、無限の進化も、亦以て推想すべし。而して、因縁果の理法は正に其開發進化の行程に關するものなり。



第五 善 惡 論

善惡標準

轉化の理法は、其及ぶところ一切萬有に互る。而して、其宗教上發表にするもの、即ち善因善果・惡因惡果の軌則なり。茲に因果のみを表すと雖ども、其實、結果の生ずるは、因と縁との二者を具すること勿論なり。今は只、同體上のみを顯はして此の如く謂ひたるものと知るべし。然り而して、此軌則の眞意を明らかにせんとするには、善惡區別の標準を知らざるべからず。

標準諸説

善惡の説、古來一定ならず。茲に其主なるものを擧ぐれば、幸福を標準とするあり、良心を標準とするあり、神意を標準とするあり、道理を標準とするあり。今此等の諸説を評するに、

第一。幸福（快樂）を標準とするは、所謂諸種の功利説なり。然るに、幸福には自の幸福あり、他の幸福あり、暫時の幸福あり、永久の幸福あり、肉體の幸福あり、精神の幸福あり。何れを標準とすべきか、甚だ決し難し。彼の最多数の最大幸福といふは、當理なるが如しと雖も、其實如何なるものが果して是なるかを知るべからず。故に、此説を以て眞正の標準を得る能はず。若し此説をして實際に適せしめんとせば、吾人は各自一己の快樂苦痛を以て善惡を判定せざるべからざるべし。然れども、此の如くするは、即

ち各自良心の指導を以て善惡を決するものなり。

第二。良心を以て標準とする説は、所謂直覺教なり。是れ甚だ實用に適する説なりと雖ども、彼此の良心相一致せざる時は、如何すべきか。現に、國により、代により、所により、時により、善惡の直覺相異なるは、實際の事實なり。故に、此説は、各個人の場合には至極適切なれども、以て一般の標準とすべきものにあらざるなり。若し此説により一般善惡の標準を立てんとすれば、大聖全智の良心の指導を以てせざるべからず。而して、此の如き聖智は、即ち眞神の外ある能はざるなり。

第三。神意を標準とするは宗教の説なり。是れ、其宗の信者にありては至極の事なれども、未信のものに適する能はず。特に、神意といふも到底經文に據らざるべからず。而して、彼此異宗の經文、其説相容れざる所あらば、如何。現に其容れざるの事實あり。故に、此説により標準を求めんとせば、彼此の經典を比較對照して、不合の點を去り契合の點を取りて、一整せざる可からざるべし。而るに、此契合不契合を判斷するは、是れ吾人の道理に訴へざるべからず。果して然らば、經文よりも寧ろ道理を貴重するものなり。故に、煩はしく經典を比較對照するよりも、直に道理の批判を以て善惡を決定すべきのみ。是れ即ち第四説の趣意とする所なり。

第四。道理に契合するものを善とし之に背馳するものを惡とするは、正當なるが如しと雖ども、抑々宇宙の萬化は、一も道理に違背したるものなき筈なり。故に、道理を以て善惡を判定せんとするは、善惡説

の最も不稽なるものなり。

此他、或は國法・君命・習慣・輿論等を以て、標準とせんとするものあれども、要するに、此等は皆先の四説中に歸着するものたるなり。故に、前の諸説にして不完全なる以上は、此等も亦、不完全を免がれざるなり。然れば、善悪は到底判別し得られざるか。夫れ然り、豈に夫れ然らんや。請ふ、吾人の善悪説を述べん。

標準確定

抑々萬有轉化は、有限の方より無限の方に向ふと、無限の方より有限の方に向ふとの二者あるのみ。故に、轉化に善悪ありとせば、此中一を善とし一を惡とすべきのみ。是れ吾人前來の所説より必然に生起する所なり。固より、其何れに向ふも、道理なきに非ず、常に確然不動の道理ありて存するなり。乃ち、先の因縁果の道理ありて、或は無限に向ひ、或は有限に向ふものなり。然り而して、二種の行程中、何れを善とし、何れを惡とすべきか。宗教の目的は無限にあるが故に、之に向ふを善とし、之に背くを惡とするなり。故に、轉化の二種中、無限に向ふを進化といひ、之に背くを退化といふなり。然れば亦、進化を助くるは善にして、退化を助くるは惡なり、と言ふを得べし。

善惡質量

次に、靈魂の進化に於て、漸次高大なる理想を目的とするが開發なり、とするより言へば、理想をして漸次高大ならしむるは善にして、卑小ならしむるは惡なり、と言ふべし、更に、精密に之を説けば、善惡に高下大小を分ち得べし。乃ち、無限に進ましむる多少によりて大小の別あり、無限を離るる遠近

によりて高下の別あり、といふべし。



此の如く善惡の區別あり。而して、善惡は、強ち宗教内のみに限らず、一切の動作に屬すと雖ども、今宗教上に於て此善惡標準の實際應用を示さば、吾人が無限の理想を覺知して之に進達する爲になす所は善にして、之に反して、無限を覺知せず之を遠離する方に向うて爲す所は惡なりとす。

有覺無覺

善惡の説略此の如し。然るに、此説によりて觀れば、有限無限の關係を覺了したるにあらざれば、善惡の區別なきが如し。果して然りや。曰く、善惡に有覺無覺の差別あり。有限無限の關係を覺了し善惡の規準を覺知したる上の善惡は、有覺の善惡なり。之に反して、有限無限の關係を知らず、善惡の標準を辨ぜざる間の善惡は、無覺の善惡なり。



蓋し、覺知の有無に關せず、善行は善行、惡行は惡行なり。然れども、覺知は修徳上に於て甚だ重要な事項

にして、既に希臘に於ても、徳は知識なり、或は知りて爲せる悪は、知らずして爲せる善に勝る、などの説ありし所以なり。蓋し、整齊たる徳行は、覺知なくしては、到底成立する能はざるなり。特に宗教的の大成を成就するに當りては、此覺知の有無は最も切要の事たるなり。

諸説通會 更に此説により前の標準諸説を顧れば、彼の諸説は標準説にあらずして、吾人の茲に説きたる標準を認知實用する方法の種類なり。即ち、道理説は、各自の研究によりて、標準を覺知すべしとなすもの、神意説は、經典の指教によりて、標準を覺知すべしとなすものにして、共に有覺的の善惡に關する説なり。次に、良心説は、標準を覺知せざれども、實際の行爲に當りては、良心の指示によりて善惡を決定すべしとなすもの、幸福説は、目的の苦樂に應じて行爲を支配すべしとなすものにして、共に無覺的の善惡に關する説なり。之を圖示すれば左の如し。



此によりて之を觀れば、吾人實際の行爲に就いては、此の如き四種の何れによりても善惡を判定し得べしと雖ども、若し夫れ標準を確認して整齊たる徳行を修めんとせば、到底宗教に依らざるべからざること、瞭然たり。

第六 安心修得

因分果分 萬有の轉化は、善惡因果の理法を軌範とするものなること、前段既に之を指説せり。而して今、理法の説明に基き宗教の要義を陳ぶれば、宗教にいふ所の靈魂の開發は、最大の因果にして亦至善の因果なり。即ち、無限の善因により無限の善果を得る道を説くもの、即ち是れ宗教の要旨なり。故に、宗教の要旨は因分、果分の二部より成るものなり。

因分二素 宗教の因分に二種の要素あり。安心・修徳、或は信心・修行といふ。蓋し、有覺の轉化は常に目的に應ずる動作なるが故に、必ず知的・行的、二種の元素なかるべからず。即ち、知的の元素は目的を認信し、行的の元素は目的に應動するものなり。今、靈魂開發もまた一有覺的轉化としては、知的・行的の二元素を具すべきこと、勿論なり。乃ち、彼の安心或は信心とは知的の元素にして、修徳或は修行とは行的の元素なり。

安心(信心) 安心或は信心は知的の元素にして、宗教の目的を認知するを要とす。即ち、吾人有限が無限の存在を覺信し、之に由て、其有限の境界より進んで無限の境界に到達し得べきことを認信し、一心の安泰

を得ることなり。然り而して、此覺信は、自力・他力の二門に顯現するに於て不同なき能はず。自力門は、

心外無別法を根基とするものなるが故に、無限を覺信するに於ても、各自の心内に無限性を認知するなり。即ち、含藏無限或は因性無限を覺信するなり。他力門にありては、吾人は各自の有限微劣なる覺知を根基とするが故に、無限は固より吾人以外にありと認信するなり。是れ即ち、現實無限或は果體無限を覺信するものなり。然り而して、自力門の信者は、心内の無限性を認信すれば、其無限開發の疑なきに安心し、他力門の信者は、心外に無限體を認信すれば、其救濟攝取の疑なきに安心するなり。故に、二門の覺信、幾何か異なる所ありと雖ども、共に無限を認信して一心の安泰を得るに於ては、同一なりとす。



修得(修行) 既に無限を覺信し之に到達し得べきことを認信すれば、愈々其進達の實行に従事するは、

自然の順序なり。他語を以て之を言へば、吾人は無限に對し、智解的より意行的に進まざる能はざるなり。此實行を名けて修徳或は修行といふ。是れ正に、有限の吾人が無限の懸隔を斷消して無限の境界に到達する。雲梯なり。既に然るが故に、其大行たることを待たざるなり。無限の行程を経て無限の修行を積むにあらざれば、成就せざることを、勿論なり。然りと雖ども、今其概要を述べれば、凡そ意行は常に誘因、或は動念に指導せらるるものなるが故に、今此修徳修行の業も、畢竟、有害の誘因を征服斷滅して、有益の誘因を長

養育生するに在るなり。然り而して、其所謂誘因は千差萬様なるべし雖ども、大別すれば左の如し。



修徳の要は、此四種の誘因の中に就いて、(一)(四)を伏斷して(二)(三)を長養するにあるなり。然り而して、伏斷と長養とは、畢竟同一事項の兩面なりと雖ども、吾人有限の見解に於ては、其間に自ら差別なき能はず。即ち、自力門は、伏斷を表面とし、長養を裏面とするに對して、他力門は、長養を表面とし伏斷を裏面とするものとす。是れ他なし、自力門に於ては、究竟の地位に達するまでは、未だ無限の眞覺顯現せず。然れども、固より自力を存するが故に、之を以て妄念妄習を伏斷し得べきなり。然るに、他力門に於ては、信者に伏斷の力用なきなり。然れども、他力授與の信心は、無限の眞覺にして完全無上なるなり、故に、之を持念するは即ち長養の事たるなり。

二素併説 安心・修徳の概要、此の如し。今、其自他力二門に於ける様態を明らかにし、且、二者を併説せば、安心の要は有限が無限を認信するに在り。而して、自力門には、有限が進んで之を得るものなるが故に、所謂自力發得の安心なり。是れ有限の安心なり。然るに、他力門にありては、無限よりして之を與ふ

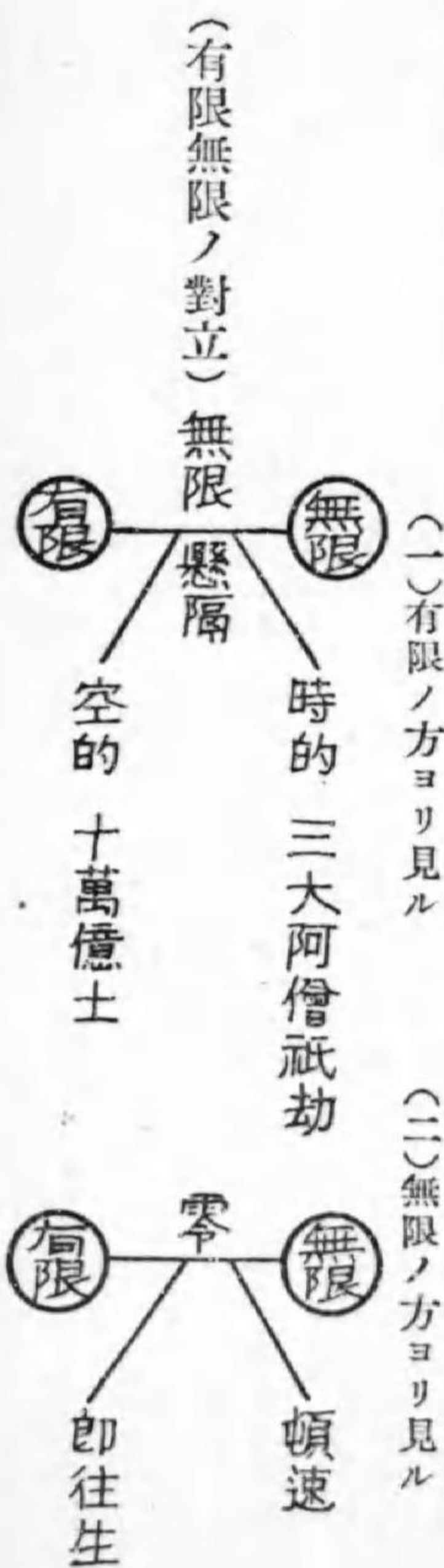
るものなるが故に、所謂他力回向の安心なり。是れ無限の安心なり。此の如くなるが故に、自力門の安心は軽く、他力門の安心は重きこと、勿論なり。是れ、他力門の安心あることを認むるは易きも、自力門の安心あることを認むるの難き所以なり。次に、修徳の點に就いて、自力門にありては、有限が各々自力により大行を成就せんとするが故に、其行たるや無限なり。然るに、他力門にありては、無限の方に於て之を成就せる故に、有限は毫も修行を要せざるなり。換言せば、吾人有限の方に取りていへば、自力門の行は無行なり、他力門の行は奇零なり。是れ、自力門の行の著しきに反して、他力門の行の認め難き所以なり。然り而して、安心・修徳の自力他力二門に於ける輕重・隱顯、此の如しと雖ども、抑々二者は相函蓋を爲すものにして、常に相應合せざるべからざるもののみならず、若し相離るるものならば、眞正の信行にあらざるなり。其詳細は今茲に盡し得べきに非ずと雖ども、靈魂の開發を以て有覺的轉化と認むる以上は、必ず茲に言へるが如き知的・行的の二元素、即ち安心・修徳の二要素の存せざるべからざるのみならず、其自力他力の二門に於て模様を異にすること、亦茲に略説せるが如くならざるべからざるを知るべし。

成道往生 吾人有限が前來説く所の因分二素を成就すれば、茲に大覺覺了して無限の妙境界に到達す。之を成道、或は往生といふ。蓋し、自力門に成道といひ、他力門には往生といふ、即ち、彼の妙境界を未來に認むると遠方に認むるとに由るなり。

樂土

無限の妙境界は、吾人の得て説く能はざる所なりと雖ども、之を比説して至樂の境界、或は樂土

といふ、また安樂淨土・無上涅槃等とも名く。蓋し、靈魂開發の極點なり。然り而して、有限の靈魂が此點に到達するには、無限の行程を經過せざるべからざるなり。此無限の行程を時間的に表すれば、無限の時劫（佛教には三大阿僧祇劫）を歴といひ、空間的に表すれば、無限の距離（佛教には十萬億佛土）を過ぐといふ。然るに、此境界は、彼の時劫を歴れば自然に顯はれ、彼の距離を過ぐれば嚴然と存するものにあらず。畢竟、吾人が、善惡因果の方軌に順じて進めば、遂に彼の境界に達するものたるなり。他語を以て之をいへば、彼の境界が吾人の覺知を去ること甚しきを、長時遠處と言へるものにして、今にも吾人の覺知が一旦豁然として開悟するときは、現在目前に彼の境界を知見するなり。故に、更に語を換へて之を言へば、未來といひ他方といふは、畢竟吾人の未だ之を覺悟せざることを表するに過ぎざるなり。而して、之を時間的にいふも、空間的にいふも、更に不同なしと雖ども、自力門は、無限を隱的に各自心内の因性と見るが故に、此因が時劫を歴て果に至るといひ、他力門は、無限を顯的に吾人已外の果體と見るが故に、吾人が距離を過ぎて彼の世界に至るといふものなり。他語を以て之を言へば、他力門は無限力の攝取を唱ふるが故に、其時間



は決して永多の時劫を要すべからず、自力門は、各自心内に無限性を見るが故に、有限無限の間に距離を見る能はざるなり。之を要するに、二門の説相異なる所あるも、共に有限無限の懸隔を認むるに於ては一なり。然るに世人、此時間的・空間的の上に就いて、一方を正とし他方を否とするが如きことあらば、不當の見解たるを免れざるべし。

比説 妙境樂界の實際は吾人の得て説く所にあらずと雖ども、今吾人は可及的其有様を推想して、爰に一段の比説を提出せんとす。先づ、彼の靈魂の進化は、漸次に高等の理想界に、住するにあることを記すべし。而して、茲に住すといふは、單に理想を認識して忘れざることを謂ふにあらず。認識不忘は言ふに及ばず、彼の理想が靈魂の固有性となり原本質となり、其主人の言動視聽をして一々彼の理想と順應せしむるに至りて、始て其理想界に住すとは言ふべきなり。今無限界に住すといふも亦然る歟。無限を認識して忘れざるのみならず、無限の觀念常に心裡に彌滿し充溢して恰も其性質となり、其悲智の行業をして一々無限的圓滿的ならしむるに至りて、茲に無限界に住すとはいふべき歟。此事甚だ解し難しと雖ども、吾人の知行進歩して止まざれば、終に無限を想觀し知見するに至ることは、幾分か想像し得べきなり。現に吾人人間に於ても、呱呱襁褓の中に在る嬰兒が次第に生長すれば、終に理哲諸學の原理を解究すに至るに非ずや。然り而して、既に無限を想觀し知見したる已上は、更に進んで其智解相應の行業を修習するに至ること、亦幾分か推想し得べきなり。彼の嬰兒が長じて理哲諸學を講究するのみならず、更に進んで自ら實驗窮理し、終に一家獨得の

系統を構成し得るが如し。更に一例に就いて解説すれば、吾人社會の結合團體に於て、其主領或は總理が眞に主領總理の職を盡さんには、其結合團體の趣意精神を認識明記して、其言動思行、毫も一己の私慾に關することなく、盡く結合團體の趣意精神に順應すべきなり。果して此の如きを得れば、其人は一己を以て生存せず、結合團體を以て其體となすものなり。今無限界の住者は、無限即ち萬有全體を以て己が任とし、萬有の痛苦を以て己の痛苦とし、萬有の歡樂を以て己の歡樂とし、萬有の本體を以て己が本體となし（法華經ニ曰ク、「今此三界皆是我有、其中衆生悉是吾子」）、以て無限微妙の靈活を營むものと謂ふべき歟。

無限の數 善惡因果の軌範に順じて、有限が無限に到達すること、略之を説述せり、然り而して、此の如く轉化し得る所の靈魂は、一個ならずして無數なり。故に、覺者即ち無限界の住者は、其數無量ならざるべからず、是れ亦、甚だ解し難きことなりと雖ども、第一章にいへる所の主伴の關係によりて之を推知すべし。今之を因果を以て説明すれば、修因の不同なるに隨つて感果の差別あるものなりとす。嘗に覺者のみならず、彼の無限の境界も亦各々相區別あるものなり。即ち、無限の世界は唯一にして、彼此覺者の境界は平等無差別なりと雖ども、其平等中また自ら差別なき能はず。覺者修因の不同によりて感應の報土また各別なるなり。之を喩ふるに、同一日本國なりと雖ども、西國の住人は之を東北長の國なりといひ、東北の住人は西南長の國なりと見るが如し。故に、樂土の數は、覺者の數と同じく無量なるものと知るべし。

成道可得

靈魂進化の因果、略之を説了せり。而して茲に一題の要義あり。成道の可得・不可得論、是

なり。蓋し、他力門にありては、既成の果體（即ち報身）の攝取によることなるが故に、此果體（報身）にして實在せる已上は、往生の成じ得べきこと疑ふべきにあらず、然れども、其果體（報身）は如何なる體なるか。先に自力の修行によりて成道したるものならずや。果して然れば、他力門も、其究竟根底には自力成道の可得を定置するものたるなり。故に、成道の可得・不可得は自力他力兩門の信仰に關する大問題たるなり。而して其難論次の如し。曰く、自力門の成道は到底不可得なり。何となれば、無限果を開くには無限の行を成就せざるべからず、無限の行を成就するには無限の時間を経ざるべからず。然るに、無限の時間は未だ経過し了れりと謂ふべからず。故に、未だ一人の成道したるものある能はざるなり。又、無限の時間は將來幾何時を経るも亦経過し了る能はず。故に、將來幾何時を経るも、亦一人の成道するものある能はざるべし。果して然らば、成道といふことは到底あり得べからざる事ならん。辨じて曰く、夫れ然り、豈に夫れ然らんや。無限の修行に於て無限の時を要すといふは、有限を以て標準とすればなり。然れども、宗教的修行は決して純然たる有限の行にあらざるなり、常に安心を根底とするものなり。而して安心なるものは、單に有限のみの作用にあらず、正に是れ有限無限の一致なり。固より自力門の無限は隱的或は因性無限なりと雖ども、其無限たるの性能は決して不足なきものなり。故に、眞正の安心に基ける修行は、有限無限の一致を以て勤むる行なり。而して、有限無限の一致は、其實、無限なるものなり。無限力を以て無限行を成す、其時間は一定すべからざるなり。之を數理に考ふるに、 ∞ は不可定なり。不可定といふは他なし、最極

小より最極大の間の量なり。故に宗教界に於ける修行の成就是、或は頓なるあり或は漸なるあり、遅きあり速きありて、決して概論すべからず。然れども、既に最極小の時間を以て成就し得ることある已上は、未だ一人の成道者なしと謂ふを得んや。況んや、將來とても亦、一人の成道し得るものあるべからずと言ふことや。是れ、前段所說中に於て今にも一旦豁然開悟云々と言ひたる所以なり。蓋し、吾人各自が實際に開悟成道し得る所に於ては、一大不可思議の事ありて存するなり。無明を斷盡すと言ふが如きは、此關門を通過するの謂たるなり。

宗教と道徳

已上、有限無限の關係によりて宗教の原理を説明し、自力他力の二門に就いて修因感果の要義を略述したり。而して、自力門は有限と因性無限との一致を安心とし、他力門は有限と果體無限との一致を安心とすと謂へり。然るに、自力門に於て、因性の無限が有限の内にありと言へるは、未だ充分明瞭ならざるなり。何となれば無限は、假令因性たりとも決して有限の内に入り了る能はざればなり。蓋し、自力門に於ては、安心發得の時に當りて有限無限の差別は消滅し去りて、只絶對の一元となり、其絶對の一元が漸次に或は頓疾に成道の地位に進達するあるのみ。故に、此門に於ては、宗教・道徳の區別なく、唯々一連の修行あるのみ、然るに、他力門に於ては大に之に異なるあり。此門に在りては、安心發得の時に當りて有限無限の關係は一層顯著となり、無限の範圍内に有限の存在、眞に明瞭となり、始て有限の有限たる所以を悟りて、一方には無限に對する宗教的關係を了し、一方には他の有限に對する倫理的的關係を知り、其宗

教的方面に於ては他力の攝取を喜び、其倫理的方面には人世の大道を踐行するに至るなり。

第二篇 立信時代

臘 扇 記 (抄録)

有限無限錄

明治三十一年八月十五日より翌三十二年四月五日に至る、半紙綴二冊の日記が即ち臘扇記である。この日記中に最も多く見るはエビクタスの抄録である。先には「阿含經」を讀み、今は又エビクタスの語録に親しみて死生の間に處す、先生の修養はこの間に益々自得の境に入り給ひしならん。ここには、二冊の中より特に感想に互るものを録する。

『有限無限録』は、先生自から名づけられたる書名である。明治三十二年の春より三十三年の春まで、先生、原子廣宣と共に、東京本郷區森川町二十番地に寓し、青年の薰陶に従事し、折々は圖書館にも通はれた。『有限無限録』は、其折、先生が一冊子に記された隨感録である。行文の按排等、皆先生自筆の書に據つた。但し句讀は編者が施せる所、圈點は先生自ら付けられたところである。

臘 扇 記 (抄録)

一、養生 三寡

寡欲以養精、寡思以養神、寡言以養氣

(明治三十一年八月二十一日)

酒。色。財。氣。

二、殺身 四鬼

月令廣義○氣者言多言忿恚爭鬪之類妄用氣力也。

三、演說 自誠

勿 希 求

感 賞

敬慎而不畏縮
平調而不緩漫
簡潔而不匆忙

宜 披 瀝

誠 信

右、演説等に對する自誠、當時必誦、一再すべきもの。(八月二十二日)

四、平生心事

勿顧慮他嘲笑。宜恪持自素質。

恪持素質は、懸値なき所を露呈して、避憚せざるの意なり。

(同日)

五、絶對の信

一 不變不動の樂地は、絶對の因によらざる可からず。絶對の因は、絶對の力たらざる可からず。絶對の力に對する心は、絶對の信たらざる可からず。

二 絶對の信は、毫も吾人の製作を許さず、完全なる信任たらざる可からず。吾人の製作は皆有限なるが爲なり。虚偽虚假は有限中の特象なり。

三 絶對の信任(たのむ)は、無一物たらざる可からず(禪)、無私たらざる可からず(儒)、忘己たらざる可からず(至心信樂忘己也)。

(八月二十七日)

六、南無阿彌陀佛

萬物の存立、萬物の發展は、皆南無阿彌陀佛なり。

『御一代記開書』に云く、「丹後法眼衣裝ととのへられ前々住上人の御前に伺候せられし時、衣のえりを御たたきありて、南無阿彌陀佛よと仰せられ候。又前住上人は御たたきをたたかれ、南無阿彌陀佛にもたれたるよし仰られ候ひき。」

之を知らざるが、愚なり、迷なり、之を覺せるが、智なり、悟なり。

悟の上には物に美醜なく、化に善惡なきなり。(諸法實相なり)。

(九月十一日)

七、エピクテタス十訓

一、如意なるものと不如意なるものとあり。如意なるものは、意見・動作及び欣厭なり。不如意なるものは、身體・財産・名譽及び官爵なり。己の所作に屬するものと然らざるものとなり。如意なるものに對しては、吾人は自由なり、制限及び妨害を受くることなきなり。不如意なるものに對しては、吾人は微弱なり、奴隸なり、他の掌中にあるなり。此區分を誤想するときは、吾人は妨害に遭ひ、悲歎號泣に陥り、神人を怨謗するに至るなり。如意の區分を守るものは、抑壓せらるることなく、妨害を受くることなく、人を謗らず、天を怨みず、人に傷けられず、人を傷けず、天下に怨敵なきなり。

一、疾病・死亡・貧困は不如意なるものなり、之を避けんと欲するときは、苦悶を免るる能はじ。土器は破損することあるものなり、妻子は別離することあるものなり。

一、我が職務を怠慢すれば、我が口を糊する能はざるべし、と思ふは、修養を妨害するの大魔なり。

一、奴隸心にして美食せんよりは、餓死して脱苦するに如かじ。

一、無智と云はれ、無神經と云はるるを、甘んずるにあらずば、修養を遂ぐる能はざるものなり。

一、自由ならんと欲せば、去る物を逐ふべからず、來るものを拒むべからず、(他に屬するものを欣厭す

べからず。

一、天然の分を守りて、我が能を盡くすべし。

分を守る者は、徴兆を恐れず。(常に福利を得るの道を知ればなり。)

一、必勝の分(如意の範圍)を守るものは、争ふことなし。

一、誹謗を爲し打擲を加ふるもの、我を凌辱するにあらざるなり。是等に對する我が意見が、我を凌辱するものなり。

哲學者たらんと欲するものは、人の嘲罵凌辱を覺悟せざるべからず。

一、人を樂ましめん(迎合)として、意を動すものは、修養の精神を失却したるものなり。(十月十二日)

八、流轉と還滅

絶對無限の相對有限に關するや、所謂、流轉・還滅の二路によらざる可からず、否、吾人の思想が此の如く考へざる能はざる也。故に、固より必ずしも時間的に流轉還滅が客觀的實事なりと云ふにあらず。吾人が絶對より相對に思向するが、流轉なり、相對より絶對に思向するが、還滅なり、と云ふも敢て不可とせず。之を實際門に應用せば、眞如海中より一切有情の出現せるは、流轉門なり、(此時未だ佛あることなし。)有情界より出でて、諸佛の各々に成道するは、是れ還滅門なり。此の如くに流轉還滅茲に一番して、有情あり、諸佛あり、而も皆これ自利的の生佛なり。然れども、既に佛あり、利他的の念慮なからんや。絶對利他

的の大悲のために一段の流轉還滅を成就するもの、是れ彌陀の因果なり。眞如の城を後にして、無明の暗鬼に迷はされ、昏々朦々として、曠劫以來の流轉の結果、茲に人界の生活を得たと共に、靈妙なる觀想思索の智力を獲得し、宇宙の壯觀に其疑歎を發し、沈思冥想、反りて萬化の本源を求め、漸く以て其舊里に還らんと欲するの念を起こすに至れり。嗚呼、曠劫の流轉も茲に初めて還滅の緒に就かんとするか。果して然らば、萬有の進化は、人間に至りて一段の極を結び、形體的の進化は、此より轉じて精神的の進化に入らんとすか。

曠劫の流轉、その歲月決して短少にあらずき。還滅の進路、豈また容易なるを得んや。然るに、路程の遠近、歲月の多少は、吾人の贅議するを必とせざるところ、要する所は、此還滅の大事を成就せしむべき素因は此れ何物なるや、其進化は如何に成就すべきやにあり。

嗚呼、吾人は果して靈智を具へ、妙用を備ふるものなりや、如何。果して還滅の素因を懷有するものなりや、如何。

人生の目的は何物なりや、吾人の心性は何物なりや。

吾人は流轉を辨識し得たるや、吾人は還滅を認識し得たるや。吾人は茲に人生に在り、佇立して反觀願望すべきにあらずや。

吾人の圍圍にある萬象は、吾人を驅りて内省の事に従はしむるにあらずや。艱難や苦勞や悲哀や涕哭や、

皆以て吾人の心裏に求むる所あるものならずや。

吾人の欲望は、吾人を驅りて宇宙の源底を探らしめずや。

吾人は絶対無限を追求せずして、満足し得るものなるや。

(同日)

九、一箇の靈物

吾人は一個の靈物なり。只夫れ靈なり、故に自在なり。(意念の自在あり。) 只夫れ物なり、故に不自在なり。(外物を自由にする能はざるなり。) 而も彼の自在と此の不自在と共に皆、絶対無限(他力)の所爲なり。共に是れ天與なり。吾人は彼の他力に信順して、以て賦與の分に安んずべきなり。

(十月十八日)

一〇、吾人の自由境

如何に推考を費すと雖も、如何に科學哲學に尋求すと雖も、死後(展轉生死の後)の究極は到底不可思議の關門に閉ざさるるものなり。

吾に死後の究極然るのみにあらず、生前の究極も亦絶対不可思議の雲霧を望見すべきのみ。是れ、吾人が進退共に絶対不可思議の妙用に托せざるべからざる所以。

只生前死後、然るのみならずや。現前の事物に就いても、其ダス・ワス Das was デス・ワルム Des warumに至りては、只不可思議と云ふべきのみ。

此の如く、四顧茫々の中に於て、吾人に亦一團の自由境あり。自己意念の範圍、即ち是れなり。 *γὰρ οὐκ*

αὐτὸν "Know Thyself is the motto of human existence" 自己とは何ぞや。是れ人生の根本的問題なり。

自己とは他なし、絶対無限の妙用に乗托して、任運に法爾に、此の境遇に落在せるもの、即ち是れなり。

只夫れ絶対無限に乗托す、故に死生の事亦憂ふるに足らず、死生尙且つ憂ふるに足らず、如何に況んや此より而下なる事件に於てをや。追放可なり、獄牢甘んずべし。誹謗・擯斥、許多の凌辱、豈に意に介すべきものあらんや。否、之を憂ふと雖ども、之を意に介すと雖ども、吾人は之を如何ともする能はざるなり。吾人は只管絶対無限の吾人に賦與せるものを樂まなかな。

絶対(自覺の内容なり、此自覺なきものは、吾人の與にあらざるなり) 吾人に賦與するに、善惡の觀念を以てし、避惡就善の意志を以てす。(所謂惡なるものも亦絶対のせしむる所ならん。然れども吾人の自覺は、避惡就善の天意を感ず。是れ道德の源泉なり。) 吾人は喜んで此事に従はん。

何ものか善なるや、何ものか惡なるや。他なし、吾人をして絶対を忘れざらしむるもの、是れ善なり。吾人をして絶対に背かしむるもの、是れ惡なり。而して絶対は吾人に満足を與へ、反對は吾人に不満を與ふ。故に、満足を生ずるものは善なり、不満を生ずるものは惡なり。満足あれば無慾心あり。無慾心あれば不動心あり。不動心あれば膽勇あり。膽勇あれば無畏心あり。無畏心あれば精進あり。(以上對外物的)。精進あれば克己あり。(以下二對自身的)。克己あれば忍辱あり。忍辱あれば不諍心あり。(以下對他人的)。不諍心あれば無瞋心あり。無瞋心あれば和合心あり。和合心あれば社交心あり。社交心あれば同情心あり。

同情心あれば慈悲心あり。大慈悲心は是れ佛心なり。

(十月二十四日)

一一、佛心

(一) 歸命心(信仰)。(二) 満足心(知足安分)。(三) 無慾心(無人慾之私)。(四) 不動心(我能不動我心)。(五) 不惑心。(六) 無畏心。(七) 精進心。(八) 克己心。(九) 忍辱心。(十) 不諍心。(十一) 和合心(溫良恭謙讓)。(十二) 社交心。(十三) 同情心。(十四) 慈悲心。(十五) 佛道心。

(同日)

一二、惡心

(一) 不信心。(二) 不足心。(三) 貪慾心。(四) 動亂心。(五) 迷惑心。(六) 恐怖心。(七) 退縮心。(八) 我慢心。(九) 不忍心。(十) 諍鬭心。(十一) 不和心。(十二) 無道心。(十三) 殘害心。(十四) 吞噬心。(十五) 逆惡心。

(十月二十五日)

一三、宗教

我と萬物とその成立如何と案するに、先づライブニッツ氏の原子説に到達すべし。曰く、宇宙間無數の原子あり、其成分一面には精神的にして、一面には物質的なり、而して最下より最上に向つて斷へず進化しつあり、今所謂吾人は此の如く原子の數多相寄りて成れるもの、其原子は各々不同の階級(進化の程度)にあり、最上の原子は蓋し正しく吾人其物ならん、吾人を以て外物と比するに、亦同様のものたるべし云云。(而してライブニッツ氏は、原子は各自獨立のものにして、更に他に關係なし、とすれども、是れ少しく考定

を要する一點也。)

果して然らば、宇宙の單元は原子にあり。然るに、各原子は自己獨成のものなるや、或は他勢力のために成立せらるるものなるや。之を吾人自己に問はんか、自成の始を知る能はず、自存の終を究むる能はず、恰も他勢力に左右せられつつあるの感を脱する能はざる也。

各原子は他勢力の支配する所のものなるか、其勢力は各個に隱在して、各個に獨立のものなるや、或は一種の普遍的勢力ありて、萬多の原子を統制するものなるや。

前者は多神教を喚起するの根柢にして、後者は一神教を招致するの本據なり。

或は、前者はプラトーン氏の多理想の説に入れば、更に各個理想の成立に疑問の生じて、純善或は絶對的理想の見地に進入すべし。

絶對的理想の見地は、是れ或は一神教に入り、或は汎神教に轉ずるもの也。

蓋し、一神教は到底萬物の創造なることを須ひざる可からず。而して亦一神其物の創造を究問せられて、終に創造神の創造神を説き、自滅の論に歸するか、然らずは汎神論に脱轉せざる可からず。

故に、此の如き思索の結極は、畢竟汎神論を以て根本原理とせざる可からざる也。

以上一段落、理論を説く。

(二) 多神教は最初の實際なり、汎神教は最後の實際なり。共に之を宗教とするに至りて、其效能甚しく異なら

ざるべし。何となれば、汎神教にありて、今日の吾人各自は完全圓滿にあらざることを認許すべきが故に、尙不可思議を脱する能はざるべし。而して其宗教的真髓は、亦この不可思議の尊崇に外ならざるべし。彼の多神教と雖も、其神として崇敬する所は、各々一個の不可思議に外ならざる也。故に、不可思議のものは、多なるや一なるや、其多に感ぜらるるものも、亦實は一なるや、到底知る可からざるものを、強て多なりと信するは、之を強て一なりと信するの簡易なるに如かずと雖も、而も其他力を信樂するに至りては、共に同一揆なりと云ふべき也。要するに、吾人の不完全は、不可思議に乗托せしむる宗教を以て、實際上の必須件とするもの也。

以上一段落、實際を説く。

自力の修善を勤むべし、(之を勤めざるは人間にあらざる也)。然れども、之を勤めんとするに能はざる也。如かず、自力を捨てて他力に歸し、其信仰の結果として、自ら避惡就善をなし得らるるを期せんには、(It is not possible to eject these things otherwise than by looking to God only)。(註)此の如く他力を信せば、修善は任運に成就され得べしと、放任すべきかと云ふに、決して然らず。吾人は他力を信せば益々修善を勤めざる可からず。(是れ信者の胸中に湧起する自然の意念たるべし)。而して修善を勤めんとせば、又從來の自力的妄念の紛起するを感知せん。是れ却て愈々他力を信樂するの刺戟なる可し。此の如く信仰と修善と交互に刺戟策勵して、以て吾人を開發せしむるもの、是れ則ち絶對無限なる妙用の然らしむる所、豈に讚歎に

堪ゆべけんや。(念々稱名常懺悔と云ふことあり。是れ信者が修善の事に従うに當つて、常に自力の妄念に攪亂せられ、其度毎に自力無功の懺悔と共に、他力の恩徳を感謝するの稱名、即ち讚歎の發作なるものを指説する也)。(註)他力信心は完全圓滿にして、毫も不足あるにあらず。然れども、其人世に活動する效用は、修練に従ふて光輝を發する也。故に、性來の智慧に關せず、信後の修養を務むべき也。是れ即ち報謝也。

以上信仰と修養の關係を略説す。

(十月二十六日)

〔註〕(一)是れソクラテス氏が能く一神を信ずると同時に國教の多神を崇敬したる所以。

佛教の多神教的なると同時に一神教的なると亦此による。

〔二〕悟後修行の風光なり。

〔三〕自信教人信に至る第一要件なり。

一四、未來の安心

嶺城老人來り問うて曰はく、予齡七十五に達せりと雖も、なほ前途の希望甚だ明瞭なる能はず、予は如何と。

答へて曰はく、生も亦然り、死後は七珍萬寶の樂土ありて生すべきや、或は鼎鑊劍林の奈落ありて墮すべきや、其樂土奈落の有無も未だ確信する能はず。只「數異鈔」の一段、「念佛は極樂へ參るべき種なるや、地獄に落つべき種なるや、總じて以て存知せず、只よき人の教を信するのみ」とあるに信服す云云。(十一月三日)

一五、病中の快然

○十六日(水)晴。昨夜中、時々鮮桃中に紅斑略出。余や、昨今咯血不停なれども、只少しく静黙を勤むるのみにして、起居動作、毫も變ずる所なく、或は却て心意の快然に於て益する所あるを感ず。蓋し、エビクテート氏の所謂、病に在つても喜ぶ者に達せざるべしと雖も、幾分之以に接するを得たるもの乎。讀書の惠亦大なる哉。

後四時、紅略三、餘略四五深桃。

註(是れ明治三十一年十一月十六日の記也。時に先生大濱に在りて、容態宜しからず。十日の記に曰く、今朝咯痰に血斑を見ること一回と。十五日の記に曰く、昨夜血痰三略と、又曰く、西參佛教會宛、病態不良、三十日出頭無覺東一を謝すと。十六日の記に曰く、昨夜中、時々鮮桃中に紅略出と。又曰く、後四時、紅略三、餘略四五深桃と。十七日の記に曰く、終日血跡不絶と。十八日の記に曰く、拂曉鈍桃三略と。而も此間に在りて、「エビクテタス」を抄せらるること、十日より十七日迄、一日として絶えず。——編者註)

一六、眞諦俗諦

天也、命也、數也、業報也、理也、性也、眞如也、實相也、法性也、法爾也、法然也、自然也、道也、本體也、勢力也、不可知的也、不可思議也、無限也、絶待也、神也、上帝也、阿彌陀佛也、本願力也、佛智不思議也、大悲也、皆他力也。

天は大慈大悲なり。然れども、風雨震害等を降して顧みざるが如き、蓋し亦其必然動かすべからざる分を守るもの歟。是れ却て天の至誠を表明するものなるべし。吾人は此等不可思議に對して疑惑すべからず。只益々彼の至誠に信憑し、天與の分に安住すべきなり。

エビクテート氏曰く、衣食は外物なり、吾人の如意なる範圍内のものにあらず、吾人は之に對して心を動かすべからずと。然れども、是れ凡人の絶對的に反對する所なるべし。今之を觀察するに、エ氏の言亦理なきにあらず。彼の禽獸を看よ、猶食に窮せざるにあらずや。又彼の罪囚を見よ、猶衣食住に困却せざるにあらずや。然れば、吾人の忘る可からざるは、衣食にあらずして、道心如何にあり。是に於てか、左の四類あり。

聖

- (一) 道心あり衣食あるもの。
- (二) 道心あり衣食なきもの。
- (三) 道心なく衣食あるもの。
- (四) 道心なく衣食なきもの。

凡

吾人は彼の第一者たる能はずば、希くば第二者たるを得ん乎。

道心者何。曰く、天道あり、人道あり。他力不思議を信じ天を怨みざるは、天道心なり、自力を盡して(如意(天與)の分を守るを云ふ)十月十二日の下参照すべし。人を尤めざるは、人道心なり。天道心は眞諦なり、人道心は俗諦なり。眞俗二諦は相寄相待の道心なり。

道心
真諦——信他力——不怨天。
俗諦——盡自力——不尤人。

(十一月十八日)

一七、生と死

宇宙萬有の千變萬化は、皆是れ一大不可思議の妙用に屬す。而して吾人は之を當然通常の現象として、毫も之を尊崇敬拜するの念を生ずることなし。吾人にして智なく感なくば則ち止む、苟も智と感とを具備する靈物にして此の如きは、蓋し迷倒ならずとするを得んや。一色の映するも一香の薫するも、決して色香其物の原起力に因るにあらず、皆悉く彼の一大不思議力の發動に基くものたらずんばあらず。色香のみならず、吾人自己其物は如何。其從來するや(生之所從來)、其趣向するや(死之所趣向)、一も吾人の自ら意欲して左右し得る所のものにあらず。只生前死後の意の如くならざるのみならず、現前一念心の起滅も亦自在なるものにあらず。

吾人は絶對的に他力の掌中にあるもの也。而も日常普通の現象は、却て吾人を正反對の思念(萬物は個々獨立自在なりと云ふ思念)に誘惑して止まず。蓋し、亦不可思議の起因(無始元本の無明)ありて然るもの。吾人は容易に其情勢を降服して正路に轉向する能はざる也。此迷倒は、云はゞ根本的撞着なるものに根據を有するものにして、吾人は此根本的撞着を單信せざる可らざる也。然れども、此單信如何にしてか之を起得すべきと云ふに、吾人に對する最大撞着(生と死とは吾人の實際に於ける最大撞着也)最大怨敵(死は生

に對する最大怨敵也)を觀念する處に於て、始めて之を獲得することあるべし。(此關門に嚴在せる原理は「矛盾は一致也」と云ふこと也。)

之を平易に通解せば、死に對しては吾人は無能也、吾人は之を防止する能はず、吾人は死せざる可らず。吾人は死するも、尙ほ吾人は滅せず。生のみが吾人にあらず、死も亦吾人也。吾人は生死を並有する者也。(正反對のものを並有するは、大矛盾也。)吾人は生死に左右せらるべきものにあらざる也、吾人は生死以外に靈存するもの也。(是れ死生を外にする云々の根基也。)

然れ共、生死は吾人の自由に指定し得るものにあらざる也。生死は全く不可思議なる他力の妙用によるもの也。(而して生死は只吾人以外の身體に關するもの也。)然らば、吾人は生死に對して悲喜す可らず。生死尙然り、況や其他の轉變に於ておや。吾人は寧ろ宇宙萬化の内に於て彼の無限他力の妙用を嘆賞せんのみ。生死は人界の最大事件。如何なる人事と雖、一死此が終りを爲さざるはなし。故に、吾人若し死に對して覺悟する所あらば、百般の人事決して吾人を苦むるものなし。何となれば、彼の百般の人事、皆一死以て終るべければ也。是れ死に對する觀察の人界に必要なる所以也。

(十一月十九日)

一八、修養時感

一、阿彌陀佛、迷へば其體なく、悟れば即ち實在なり。
一、在るとは何ぞや。知れるなり。知らざるものは、無きものなり。

一、我心を静止せず、静めんとすれば却て騒ぐ、是れ阿彌陀の然らしむる所、自然法爾なり。

一、騒を離れて静なく、攪を離れて寂なし。生死を離れて涅槃なく、苦界を離れて樂界なし。苦樂迷悟、善惡邪正の相對を離れて、絶對を執せば、迷大也。

一、眼ありて色あり。耳ありて聲あり。鼻ありて香あり。舌ありて味あり。果して然らば、五官なきものは如何。須く相對の理を觀すべし。

一、學識ありて、世界複雑なり。無知の人ならば、世界亦單純なるべし。果して二つの世界ありや。

一、人は之を見て水と云ひ、饑鬼は之を見て火と云ふ、果して二種の實物なりや。

一、小兒は之を見て大人と思ふ、親は之を見て少壯と云ふ。果して二人なりや。

一、親は子の親なり、子は親の子なり、絶對の親ありや、絶對の子ありや。

一、神人感通と云ふことありと云ふ人あり。實と思はば信すべし、思はざれば疑ふも可なり。

一、我周圍に靈物充滿せりと云ふ説あり。實らしくば信すべし、實らしからずば疑ふも可なり。

一、知らざるを知らずとせよ、詐る可からず。

一、嫌なことは廢すべし、辛抱して苦しむことなかれ。

一、嫌なことも、好きになることあり。此轉化を試むるも、愉快なり。成就せば、更に樂みの種を増す志ある人は苦行を爲すも可なり。(苦は樂の種)。

一、恐怖・心配・憂苦、拂ひ得べくば拂ひ除くべし。しかし、之あるも亦一變化なり。強ちに除くを要せず。

一、欲は苦の本なり。然れ共、欲なければ行爲なし。……文明開化は活潑動作の謂なり。故に、文明世界は欲世界なる事、勿論なり。能く能く考究すべし。
(明治三十一年大酒在佳頃の記ならむ。一編者註)

一九、胸中の主人公

學人、胸中主公あるを知るや、否や。常に汝の面門より出入しつゝあるを知るや、否や。主公内に在るときは、學人其本位に在り、主公内に在らざるときは、魔其位に坐す。善の行はれざるは、魔の爲に妨げらるれば也。學人其本位を失はざれば、魔其位を得る能はず。然らば則ち、魔の跳梁するは、學人自ら其本位を去ればなり。罪惡の根源全く此に在り。

主公を以て良心と謂ふなかれ。良心は有限的なり、主公は無限的なり。良心は執我の情を脱せず、主公は無我の智と共なり。然れども、良心は之を精練すれば主公と轉進するなり。精練とは他にあらず、有限的執我の情を脱して、無限的無我の智に達するにあり。

無限的の實在は、有限我の内に存するものにあらず。眞の無限者は、有限我の内外に瀰漫するものなり。吾人の常に之を觀知する能はざるは、無明魔の雲霧之を覆へばなり。
(明治三十一年の秋)

善惡の標準は有限無限の一致にあり。則ち有限が、上は無量大と一致し、下は無量小と一致するが、最高の善也。前者は上求菩提の智慧也。後者は下化衆生の慈悲也。智慧や慈悲やは。畢竟一致の最勝なるもの也。故に、若し智慧や慈悲やの如く見ゆるものにして、一致を破壊するものは、實に愚癡や害毒や也。要するに、一致の存する所が善の存する所也。故に和合は善也、不和は惡也。仁義禮智信は皆和合の幾形式也。仁は、慈悲の類也。義は、以て和合せしむるの本也。(同等異等の間)に於けるもの也。(禮は、以て和合を表せしむる形式也。(同等の間)に於けるもの也。)智は、智慧也。信は、前後の和合せるもの也。(人を信ずると云ふ場合は、彼我相對の上に現はるる也。)

一致は又は調和と云ふ。快樂は、感器と刺戟の調和也。故に、快樂を生ずるは善也。然れ共、身體の一機關に快樂を盛にするが爲に、他の部分を戕害するは、大調和を破りて小調和を致せる也。此の如きは善にあらず。故に、快樂も適度ならざる可らず。

布施は、己の多を減じて他の少を補ひ、以て自他を調和するにあり。持戒は、以て和合を破らしめざるにあり。(自他の和合、又は自體内彼此部分の和合を破らしめざる也。)忍辱は、以て和合せしむるの要素也。精進は、以て和合を求めしむるの元氣也。禪定は、以て智慧を生ぜしむるが爲也。智慧は、以て菩提を求むるの能力也。

煩惱は、不調和の現象也、又不調和を惹起するの元素也。貪欲は、不相當の欲也。瞋恚は、不和の源也。

愚癡は、調和に反する心情也。

眞の智力上の調和也。(論理的調和也。)

善は意志上の調和也。(道義的調和也。)

美は情感上の調和也。(形象的調和也。)

世の所謂善は、眞善美を皆善と稱する也。其物自身善なるあり。善なるものの爲にするに於て善なるあり。(善なる目的を達する爲になるものは、亦善と名けらるる也。)

(明治三十二年二月二十五日)

二、修養 指針

一 修養の方法如何。曰く、須く自己を省察すべし。自己を省察して天道を知見すべし。天道を知見せば、自己に在るものに不足を感ずることなかるべし。自己に在るものに不足を感ぜざれば、他にあるものを求めざるべし。他にあるものを求めざれば、他と争ふことなかるべし。自己に充足して、求めず争はず、天下之より強勝なるものなし、之より廣大なるものなし。

二 自と云び、己と云ひ、外物と云ひ、他人と云ふ、其何たるを精究すべし。(外物他人、ストア學者は之を稱して「エクステルナルス」と云ふ。)他人は知り易し。(而も妻子眷屬も亦他人たるを知らざる可からず。)外物は雑多なり。(禽獸蟲魚艸木瓦礫のみを云ふにあらざる也。)居家も外物なり、衣食も外物なり、乃至身體髮膚も亦外物なり。妄念妄想も外物なり。然らば、何物か是れ自己なるや。嗚呼、何物か是れ自己

なるや。曰く、天道を知るの心、是れ自己なり。天道を知るの心、是れ自己なり。天道と自己との關係を知見して、自家充足を知るの心、是れ自己なり。自家充足を知りて、天命に順じ、天恩に報ずるの心、是れ自己なり。

三 自家充足を知りて（物を求めず人と争はず）、天命に順じ天恩を報ずる（故に身勞を厭はず）の心、是れ自己なり。自己豈に外物他人に追従すべきものならんや。自己を知るものは、勇猛精進、獨立自由（人界の獨立なり、天道へ對して獨立なるにあらず。）の大義を發揚すべき也。

四 此の如き自己は、外物他人の爲に傷害せらるるものにあらず也。傷害せらるべしと憂慮するは、妄念妄想なり。妄念妄想は之を退治せざる可からず。是れ修養の必要なる所以なり。

五 自己が外物他人のために傷害せられざるが如く、他人も亦外物他人のために傷害せらるることなきも也。故に、吾人は自己に對して他人の爲せる罵詈譟、毀譽褒貶に頓着せざると共に、他人に對して無効なる惡口凌辱を加ふべからざる也。吾人は他人に追從迎合せざると同時に、他人を評隲罵詈せざるべき也。

（以上は卷末餘白文章の前に記されたるもの、三十二年三四月頃の書ならん。——編者註）

二三、生活問題

獨立自由の障礙を爲す所の大害物は、物質的關係、特に身體の維持、是れなりとす。如何せば可なるか。曰く、凡て物質的事物は、我已外のものなり、所謂外物なり、何時にても之を抛棄すべし。身體と雖も、亦

何ぞ異ならん。獨立者は常に生死巖頭に立在すべきなり。殺戮餓死、固より覺悟の事たるべき也。

既に殺戮餓死を覺悟す。若し衣食あらば、之を受用すべし。盡くれば從容就死すべきなり。而して若し妻子眷屬あるものは、先づ彼等の衣食を先とすべし。即ち、我が有る所のものは、我を措いて先づ彼等に給與すべし。其殘る所を以て我を被養すべきなり。たゞ、我死せば彼等如何して被養を得ん、と苦慮すること勿れ。此には天道の大命を確信せば足れり。天道は決して彼等を捨てざるべし。彼等是如何にかして被養の道を得るに到るべし。若し彼等到底之を得ざらんか、是れ天道彼等に死を命するなり。彼等之を甘受すべきなり。瑣氏曰く、我セサリーに行きて不在なりしとき、天、人の慈愛を用ひて彼等を被養しき。今我若し遠き邦に逝かんに、天豈に亦彼等を被養せざらんや、と。

（四月五日）

二三、自由の範圍

獨立者の身口意に發動する所のものは、皆自由の行爲と謂ふべきや。曰く、自由なるべきものに對する所、自由の範圍に止まる所のものは、自由なり。其標準は自己の內的經驗に徴せざるべからず。然れども、若し少しく贅辯せば、所謂發動にして、全く他人及び外物に關係せざるものは、固より自由なり。若し他人及び外物に關係する所のものも、其發動たるや服從的にあらずして、而も一の外他の障礙を感じざるもの、よしや外他の障礙あるが如く見ゆるも、其之に遭ふや、直に自由的に之を排除或は逃避する場合（例せば、物を所有せんとするに、他人之を奪取せんとする時は、快く進んで之を附與するが如き）は、是れ自由の行爲た

るに妨げなきなり。換言せば、障碍或は違背に遇うて、失望・悲歎・煩悶・惱苦に陥落するが如きは、皆これ奴隸的所作たるなり。

(同H)

二四、妄念の根源

主我に従属すべきもの(従件、エピクテート氏の所謂エクステルナルス)に三種の別あり。

(一) 妄念。(二) 他人。(三) 外物。

是なり。就中、妄念は外物他人に追従するを其性質とす。故に、之を刈除せざる可からざる也。

而して外物他人の内に於て、他人に服従するの妄念は、畢竟外物を追求するの念慮あるが爲なり。

故に、妄念の根源は外物を追求するにありと知るべし。

今この根源を刈除せんとせば、先づ外物の何たるやを考究すべし。外物は畢竟吾人に無關係のものたるべき也。吾人は之を收用するを妨げず、然れども、之を執着し之に服従せらるべきものにあらず。吾人は却て外物を服従せざる可からず。

他人は外物を所有するものにあらず。(他人も外物には無關係たるべき也。)吾人は若し外物を服従し(即ち外物に牽制せらるるの念慮を刈除し)了せば、決して他人に服従(壓服の意)すべき必要なき也。他人も亦吾人を服従(壓服の意、煩惱を生ずる従順なり。)すべき必要なき也。故に、他人と吾人とは同等の位置に住すべき也。(他人の命に順應するは自由の行爲なり、順應は煩惱なき従順なり。)之を要するに、

妄念は伏滅せらるべきもの也、

外物は無關係たるべきもの也、

他人は同等たるべきもの也。

(同H)



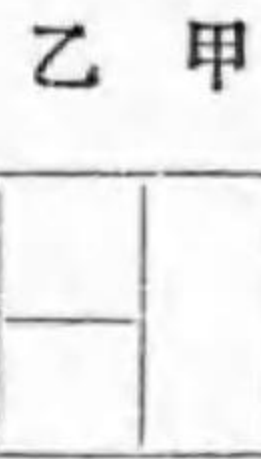
有限無限錄

一、有限無限

無限を知るの着歩。

時間的（相續繼起の）現象に就きては、因果法の根據を考察すべし。左の圖を得べし。

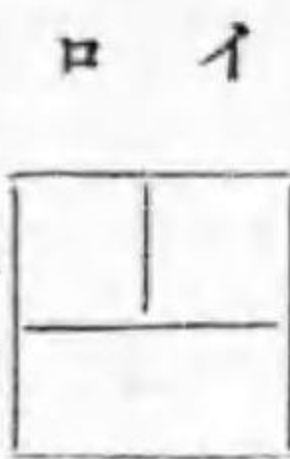
縦



甲は無限なり
乙は有限なり

空間的（同在並存の）現象に就きては、一物の他物に働作するの實狀を考究すべし。左の圖を得べし。

横



甲は無限なり
乙は有限なり

此考究にはロツチエ氏『純正哲學』「變化」の章を参照すべし。

二、善 惡

無限的行爲は善なり。（公の爲めにする行爲なり。）

有限的行爲は惡なり。故に、利他的は善なり。佛心者大慈悲是なり。

利己的は惡なり。然れども、利他的に正邪あり。

或人のみに對する利他は、畢竟利己的と同性質也、即ち有限的也。故に

或人のみに對する利他は邪なり。

一切人に通ずる利他は正なり。

汝の行爲をして一般に對する法則たらしむべし。（カント氏無上命令、是なり。）
而して

實際上に就きて云へば、

或人に對する利他的行爲も一般に對すべき精神を以てせば正たり。

故に、

正義公道は善なり。

不正義私道は惡なり。

三、仁義禮智信

仁とは利他的精神なり。(仁は天の徳に盡すの心なり)

義とは無上命令なり。

禮とは仁義の發表なり。

智とは仁義の智識なり。

信とは仁義の信仰なり。無限を信知するなり。

四、忠 信 孝 悌

忠とは君上に對する仁義なり。

信とは同朋に對する仁義なり。

孝とは父母に對する仁義なり。

悌とは弟妹に對する仁義なり。

要するに百徳皆仁義に外ならず。

仁は對他的なり。

義は對自的なり。

仁の弊や、妄動に陥る。之を匡正するは義なり。

義の弊や、隱退に陥る。之を救正するは仁なり。

仁義相助けて、正鵠を誤らざらしむ。

曰く、天地の大道より打算し來りて(仁)、一己の當に爲すべき所を盡す(義)、是れ徳行なり。道義は決して爲し難き所の事を命ぜざるなり。(Thou canst, therefore, thou oughtest.)

五、智 仁 勇

我無限を信知して(智)、茲に道義なるもの(仁)を認知し得たり。道義の信念、愈々明にして、茲に實際斷行の元氣(勇)を得。故に曰く、

智より仁に入り、仁より勇に入り、三徳を完成す。(其終極や盡誠のみ。)

六、義 と 利

利に正邪あり。道義と共なるは正利なり。非道と共なるは邪利なり。正利は取るべし、邪利は排せざるべからず。利の要は福樂なり。最上の福樂は道義の受用にあり。衣食は福樂を助くるものなり。衣食足りて始めて禮節を知るなり。

(?)道樂也は、必ず衣食の援助を要す、只主伴の顛倒なきを警むべきのみ。

この項は先生自ら記して尙再考の餘地ありと認められたものらしい。衣食足りて禮節を知るといふことは先生の記されたものよりみれば未到の言と思はれたやうである。この句の冒頭に(?)を記された所以である。「道樂也は」とあるのは古語にある「道樂也」といふ言葉を表示されたのである。「道樂也は」は「道の楽しみなるものは」といふ意味である。——曉鳥註

七、實 際

我、義に合へるか合はざるかを反省すべし。我、利を得べきや否やを憂慮すべからず。

又

私の義に合はざるを恐るべし。

人の威の盛なるを怖るべからず。

又

我、人位人爵の前に屈するを要せず、仁義大道の前に伏するを要す。

又

我が心頭を悩ますものは名利權勢なりや、正義公道なりやを細察すべし。

八、道徳の發育

我裏に正義公道の根據ありや否やを省察すべし。之なくして正義公道を行はんとするは、夫れ木に縁りて魚を求むるより愚なり。

道義の萌芽は之を培養すべし、之を枯死せしむべからず。

吾人各自ら其道義を培養せば、終に百花爛漫の美園に逍遙するを得べし。

吾は先づ我愛芽を培養すべきなり。是れ我義務の最要なるものなり。

九、内 象

仁義は精神的現象なり、所謂内的現象なり。

内象の天地は洪漠無限の寶山なり。

内象の寶山、外柵ありて、人の之を犯すを許さず。

只主人公は其財寶を集むるに於て些の障害なし。

寶の山に入り、手を空しくして還るべからざるなり。

一〇、外 象

毀譽褒貶は外象なり、富貴利達は外象なり。

外象の天地は洪漠無際の際山なり。

外象の際山、登るべき徑路なきにあらず、然れども半峯の暴風、人之を制する能はず。其掩投に逢はざるは僥倖のみ。

君子者は彼の寶山を棄て、此際山を攀づる愚を學ばざるなり。

唯、寶山は所々際山に通ずる大道あり。

一一、權勢と君子

君子は權勢の爲めに苦しめらるゝことなし。而も従はざるものを罰するは、權勢の擅にする所。君子は之

に對して心を動かさず。唯彼の權勢者、先に臨むに不義を以てし、之に次ぐに刑罰を以てす。不義を重ねるの愚、誠に憫むべきなり。ソクラテス氏とメレタス氏、釋迦と提婆、蓋し比對は以て益々道義の光彩を放たしむるもの歟。

一二、道德と執著

執著は惡差別の迷界に屬す。

道義は正差別の悟境に存す。

執著者は争鬪を主義とす。

有道者は不争を主義とす。

其熱情は或は同じきが如し。然れども、其内境は、有限界と無限界との別あり。

一三、無限は眞理なり精氣なり

無限に多名あり。其一を宇宙の眞理と云ひ、其二を天地の精氣と云ふ。

人之を得て能く人たり、物之を得て能く物たるは、眞理精氣の賜ものなり。

故に彼道心は、之を天命の性と云ひ、又之を他力回向の信と云ふ、所謂回光返照なり。

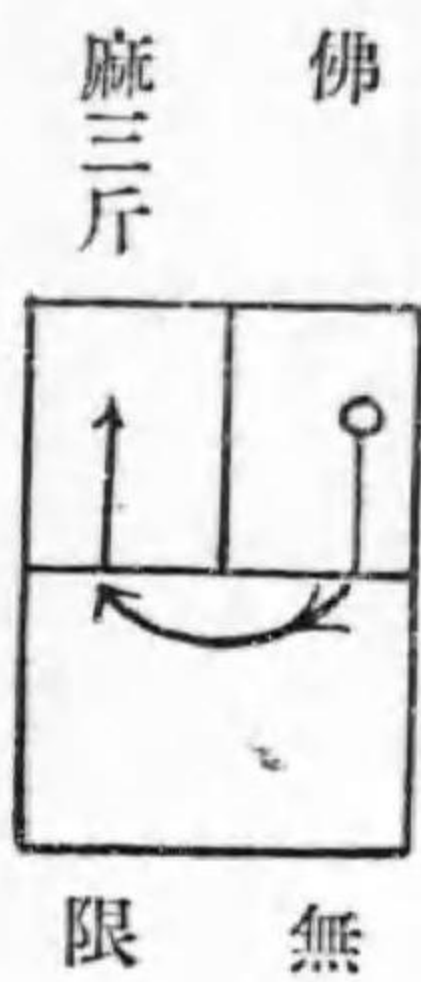
一四、道心は生命なり

道心は君子者の生命なり。權勢は我衣を剝ぎ、我食を斷ち、我身體を迫害するを得べし。

然れども、彼れ決して我不滅の道心を奪ふ能はじ。我、我道心を失はず、我生命に於て損する所なし。

一五、無限的眼光

擧、僧問洞山、如何是佛。 山云、麻三斤。 『永平清規』注云、洞山時爲典座、在庫下秤麻。



一六、宗教の効用

無限的眼光は有限界の缺乏なり。宗教は此缺漏を填補するものなり。無限的眼光は、先づ各個の業務を絶對無限視せしむ。是れ業務に忠實ならしむる根基なり。(汝等所行是菩薩道)

一七、佛教の特長

或は佛教の理論を飄忽的なりと呵す。然れども此飄忽的視せらるゝ所、是れ佛教が最上の妙致を露呈して藏さざる所。一念三千と云ひ、一色一香と云ふ。是れ一切の所業に對して、汝等所行是菩薩道と喝破し得る所以なり。

一八、我に絶對あり

物皆絶對的存在なり。我豈に絶對的精神ならざらんや。唯夫れ絶對的精神なり。故に能く絶對無限的業務

(之を天職と云ふ)に従事し、絶對無限的動作を爲す。何ぞ外他の物境を羨求することを爲さん。是れ忍辱的精神の發動する源泉ならずや。

一九、病者に對して示すためエビクテタスの言を書き送れと

井上豊忠兄より來書ありしゆゑ左の數項を書き送る

意の如くなるものあり、意の如くならざるものあり。意の如くなるものとは、意見、發動、欣厭、是なり。意の如くならざるものとは、身體(病氣は之に屬す)、財産、名譽、官爵、是なり。(畢竟)自に屬するものと、然らざるものとなり。如意なるものに對しては、吾人は自在なり、制限及妨害を受くることなきなり。不如意なるものに對しては、吾人は脆弱なり、奴隸的なり、他の掌中にあるなり。此區分を誤想するときは、(即ち不如意なるものを如意なりと思ひ、之に對して煩惱するときは)、吾人は妨害に遭ひ、悲歎號泣に陥り、神人を怨謗するに至るなり。如意の區分を守るものは、抑壓せらるゝことなく、妨害を受くることなく、人をも謗らず、天をも怨みず、人に傷けられず、人を傷けず、天下に怨敵なきなり。

疾病、死亡、貧困は不如意なるものなり。之を避けんとするときは、苦悶を免がるゝ能はじ。誹謗を爲し打擲を加ふるもの、我を凌辱するにあらざるなり。是等に對する我意見(即ち怨嗟等)が、我を凌辱するものなり。

(天我に賦與するに大心を以てす。天我に賦與するに忍力を以てす。天の賦與を辱しめざることを證するは、病の我を侵すときにあり、死の我を襲ふときにあり、須らく勇士の戰場に出づるときの如くあるべし。須らく力士の角場に出づるときの如くあるべし。)

(括弧内は、愚注又愚解を以て布陳したるものなり。)

二〇、日常止觀

〔日常は平生なり、止は精神を靜止するなり。(禪定是なり。)觀は對境を觀察するなり。〕

吾人は無意無覺に想念を發す。是れ無念無想の念想なり、最も珍重すべし。所謂萬事に對する初一念は、即ち是なり。此念や無邪氣なり、絶對的なり。然れども吾人は(智識を増すに隨ひ)此無邪氣なる精神を失却するに至る。是れ人生至當の順序なり。是に於てか教化の必要あり。他なし、更に止觀修養の方便によりて、彼の無邪氣的態度に復歸せしむることは是なり。是れ絶對の信念なくして達得せらるゝものにあらず。絶對の信念は、即ち絶對的精神なり、絶對的の見識なり、絶對的眼光なり、此狀態を名けて、無我と云ひ、無一物と云ひ、心外無別法と云ひ、唯我獨尊と云ふ。止觀とは禪定に住して、此狀態を觀察するを云ふなり。而して止觀は必ず其對境を要す。内外、色心、我他、彼此、等の事象は、其對境たるものなり。其期する所は、内外萬境に對して、常に絶對的眼光を失却せざるにあり。是れ即ち智の奥底を盡して、而も無智的無邪氣的操行に達せしむる大道なり(是れ所謂神人感通、感應道交の原基なり。)

二一、衣・食・住・具

衣、食、住、具、等は生活の必需品なり。之を求得せざる可らず。而して此に許多の謬見あり。

徒に多きを要するは謬見なり。況んや之に誇るをや。

徒に美を要するは謬なり。況んや之に誇るをや。

儉約は此需用に對する根本の徳義なり。

二三、儉約

儉約は衣食等に對する根本的徳義なるのみならず、身體及其動作に對する根本的徳義なり。吾人は徒勞を省かさるべからず。故に器械的工業の進歩は最も急要なり。蓄積を貴ばずして、融通を貴ぶは、畢竟、少高を以て大用を爲さしむるが爲なり。是れ正に儉約の主義に順ずるものなり。分業法の如きは、全く儉約を補助するの大法たるなり。

儉約の要旨は、最小力を以て最大績を擧ぐるにあり。(決して單純なる約減にあらざるなり。)

二三、儉約の實行

儉約は美德なり。言ひ易しと雖も、行ひ難し。蓋し儉約の根基は、克己制欲にあり、而して克己制欲の事最も能くし難ければなり。

有形上の工夫は、儉約の主義を進めて、或る點に達せしむ。而も未だ需用を満足せしむる能はず。之を處

理するの唯一法は、克己制欲によりて、此の需用其ものを儉約するにあり。

(一) 勤勞の儉約、物品の儉約、等。

(二) 需用の儉約。

二四、克己制欲

克己制欲を以て、直に消極的なり、厭世的なりと言ふを止めよ。克己とは善心(良心)の惡心(邪念)に克つを云ふなり。制欲とは、正(欲)の邪(欲)を制するを云ふなり。

良心とは道義に向ふの心なり。

邪念とは道義に背くの心なり。

正欲とは道義を助くるの欲なり。

邪欲とは道義を傷ふの欲なり。

二五、貧富は精神にあり

貧を貧と思はざれば、是れ富なり。

富を富と思はざれば、是れ貧なり。

貧富は、強ち財貨の多少に關することにあらざるなり。充足を知ると、知らざること依ることなり。財少くも、足るを知るものは、是れ富なり。

財多きも、足るを知らざるものは、是れ貧なり。

貧富の本據は、畢竟精神的なり。

故に貧富は、寧ろ貧心富心と云うて可なり。

二六、充足不足の世界

求を充たすを充足と云ひ、求を充たさざるを不足と云ふ。精神的世界は充分を與ふる所なり。物質的世界は不足を惹起する所なり。精神的現象も物質的世界に入れば、充足を與へず。物質的事項も精神的世界に入れば、不足を免るべし。

二七、道心と人心との争闘

精神作用の活動(反復)によりて、其勢力の強盛を得るは、天賦の妙致に屬す。(身體も亦然り、使用により増育す。)故に善心も、之を發動せしめざれば、枯死するに至る。人生の要は、善心を涵養修練するにあり。故に道心を發動せしむるの方法は、一日片時も忘れざるを努むべし。而して之を妨害するものは、人心なり、邪念なり、邪欲なり、物質的満足を追するの心なり。吾人は力を盡して之を伏滅せざる可らず。之を伏滅する方法は、理想的の克己制欲を標準として、觀想工夫を凝らすにあり。曰く、身體は是れ苦器のみ、故に吾人は身體ある以上は、苦を受くるが當然なり。若し樂を欲せば、身體以外に(身體の苦痛を顧みずして)之を求めざる可らず、即ち體欲を勦絶して而して後にあらずば、眞正の歡樂ある能はず、と。

二八、知愚の天性

智者の子、必ずしも智ならず。愚者の兒、必ずしも愚ならず。智愚の天性は、吾人の測知する能はざる所。然れども教化の天性を左右する所は、吾人の最も注意を要する所なり。少年の才子は天性の智に出づるもの多し。其智を恃みて教化を怠れば、癡呆となる。少年の魯子は、天性の愚を受くと雖も、勉強して止まされば英傑となる。教化は最も注意せざる可からず。教化を注意するの方は、之を受くるを以て、人生の大義なりと思はしむるにあり。

二九、順境と逆境

順境に勇みて、逆境に萎むは、人の常情なり、是れ人類の弱點なり。是れ我の境遇の爲めに轉ぜらるゝなり。自ら順境を愛し、逆境を惡むの心は、やがて他の順境に勇むを羨嫉し、自ら逆境に萎むを憤惋す。許多の妄念此より起る。之を醫するの道、他なし。順境は、我能力の達し得る範圍内にあるものにして、反て我力を減殺するものなり。逆境は、我能力の達し得る範圍外にあるものにして、反て我力を増長するものなることを回想するにあり。力足らざるものと角して、勝を得るも快事にあらず、力勝れたるものに向つて、勝を得るが快事たることを思ふべし。

三〇、角力は人生の快事なり

人生は角力場なり。人生の快事は角力になり。角力は大力を貴ぶ。力量は、角力によりて増進す。吾人は

務めて角力すべきなり。而して角力の大對手は、吾人の境遇なり、吾人の妄念なり。吾人は之に克勝するの能力を修養せざる可からず。其修養の法は勉めて境遇と角力し、妄念と角力するにあり。力士の能事は角力するにあり。角力を卒へて隠居すれば、力士の資格を失ふものたるを忘る可からず。

三一、電氣には兩極あり

積極のみあることなし、必ず消極と相對して存す。電氣には常に兩極あり。眞理豈に兩極なからんや。積極的思想、盛なる時は、消極的思想の必要なることを忘るべからず。春華を賞して秋殺を忘るゝものは、智者にあらざるなり、春華には春華の美麗あり、秋殺には秋殺の妙致あるなり。春華は秋殺に對して眞美を呈し、秋殺は春華と待て妙用を露はすなり。世事は春華なり、出世事は秋殺なり。至(成)人は春華を賞し、亦秋殺をも觀ず可きなり。實相の華は春陽の園に爛漫たり、眞如の月は秋殺の天に玲瓏たるなり。

眞理は積極のみにあるにあらず。

眞理は消極のみにあるにあらず。

眞理は兩極の中道にあり。

眞理は兩極の互働にあり。

眞理は兩極の融和にあり。

三二、虚浮を觀ぜよ

聲色は虚浮なり、名利は虚浮なり、身命も亦虚浮なり、之に感溺すべからず、之れが執著を打破せよ、無我を諦觀せよ、無一物に悟達せよ。無我觀、無一物見を拂掃せよ、諸有差別を勦絶せよ。差別盡きて平等現はれ平等顯れて、差別亦立す。之を身心脱落(單差別消滅)脱落身心(平等上差別立)と云ふ。身心脱落は機の深信なり。脱落身心は法の深信なり。

三三、不可知的

相對有限の物象界に徹底の眞理を見んとするものは、スペンセル氏の『哲學原理』を一讀すべし。物質、運動、時間、空間等の根本思念に就て、確實の根據を求むるに至るべし。而してス氏は之を不可知的に結歸す。果して不可知的なりや、否や、之を決定せずして、物理を説き、化學を論ず、空中の樓閣たらずして何ぞ。況んや財貨功名を談ずるをや。

三四、依頼は苦痛の源なり

財貨を依頼めば、財貨の爲めに苦あらる。人物を依頼めば、人物の爲に苦めらる。我身を依頼めば、我身の爲めに苦めらる。神佛をたのめば、神佛の爲に苦めらる。其故何ぞや。他なし、「たのむ」心が有相の執心なればなり。之を自力の依頼心と云ふ。

三五、人智は薄弱なり

戦争は法理を打破し、實物は數理を打破し、實行は哲理を打破す。

是皆人智の有限薄弱なることを證明するものなり。

然れども、之に由て直に法理を無し、數理を無し、哲理を無するものは、是れ尤も卑陋の漢にして、畢竟世界社會の秩序を壞亂するものなり。何となれば、世界社會の秩序は、必ずや彼等學理による外なければなり。

三六、學理の成立

法理は戰爭に破られ、數理は實物に破られ、學理は實行に破らる。然れども世界社會の秩序は、必ずや彼等學理に依らざる可からず。此學理の成立は如何と云ふに眞理は最後の勝利者なることを仰信するに根す。是れ空想なりと雖も、而も最強最深最高の思念なり。之ありて而して後學理あり、之滅せば則ち學理崩る。眞理の絶對的信仰は學理の根據たるなり。故に曰く學理は信仰に基くと。

三七、是非善惡

是非の心あり、而して科學起る。科學の究竟する所哲學に入る。

善惡の心あり、而して道義起る。道義の究竟する所（其本源）宗教となる。

科學と道義との對象は有限的なり。哲學と宗教との對象は無限的なり。

科學の理、之を無限化すれば哲學となり、道義の事、之を無限化すれば宗教となる。

三八、他人を咎めんとする心を咎めよ

他を咎むる勿れ、他を咎めんとする心を咎めよ。自の多過多失あることを知れば、他を咎むる資格なかる

べし。而るを之を忘れて、他を咎めんとす、是れ大に咎むべきなり。若し或は他の過失の如き、我決して之に陥ることなしとせば、失づ天の我に幸するの深きを感謝せよ。他の天賦の薄きを憐念せよ。決して他を咎むるの暇なかるべし。

三九、寂寞樂むべきか憂ふべきか

修養の爲に好んで寂寞を求むるものあり。世人の爲に棄られ、寂寞に陥るものあり。求めて得たりと觀せば、寂寞や樂かるべし。棄られて陥りたりと觀せば、寂寞は憂かるべし。畢竟之に臨むの心情如何にあり。

四〇、閑寂何在

閑寂ならんことを求めて、他處に行くも、到底之を得る能はざるべし、家に在りて閑靜なる能はざるものは、他に在るも閑靜なる能はず。黙すること能はざるものは談すること能はず。従ふこと能はざるものは、制すること能はざると同一なり。

坐禪せば四條五條の橋の上往來の人を深山樹に見て

然れども、是れ或は達人の境遇なり。吾人は内外二面より求道の精神を修養すべきなり。

四一、我職業を愛重せよ

我職業は天與の任務なり。之を愛重せざるは天與を辱むるものなり。若し我職業に對して不滿の念に生ずるあるは、是れ妄念の善心を害せんとするものなり。當に勉めて之を拂掃すべし。玉に積るの塵は時に之を

拂拭するを要するなり。若し其素璞は根本的に琢磨を加へて、其光輝を發せしめざるべからず。如何なる職業も、其正當なる所に付て之を觀察せば、畢竟絶對無限の價値あるに至るなり。

四二、能を誇るべからず

人各能あり、不能あり、是れ天與なり。其能あるものは、畢竟天與の幸なり。之を以て人に誇るは、天與を忘れて我有と誤れるなり。大に懺悔すべきなり。

四三、不能を蔽ふべからず

不能を不能とする、是れ耻づべきことにあらず。不能を蔽うて、能く装はんとする、是れ大に耻づべきの罪なり。虚飾は大罪なりと信知すべし。其人を欺かんとするは、尙可なり、或は天を欺かんとするに至るなり、戒めざる可らず。許多の罪過は大底虚飾より發生するものなり。嫩芽の未だ甚だ成長せざるに先ち、之を刈除すべきなり。然るに世或は却て虚飾を奨勵するが如きこと多きは何たる顛倒ぞや。

四四、飢ゑよ渴けよ

飢ゑざれば食の味を知るべからず。渴かざれば飲の味を知るべからず。

飢ゑよ、渴けよ、而して飲食の甘味を知得せよ。

有限の不完全なることを反省せよ、而して無限の完全なることを識得せよ。

四五、艱難汝を玉にす

艱難は汝の試金石なり。艱難に遭ひ而して挫せず屈せず、茲に汝の純金たるを證すべし。汝に確守する所なくば、汝は此遭會に敗北せん。汝は何を確守するや。汝の有限力を以て外圍の萬障に對せんとす。汝は何の信據する所あるや。曰く我は道義の爲に殉ぜんとするなり。

四六、苦惱の本源

世人の意の如くならず、吾人の自由なる能はざるは、吾人が有限なるが爲なり。是れ苦惱の本源なり。此苦惱を耐忍する方法は、勉めて有限の實相を觀するにあり。

四七、遺傳と經驗

我の現性は遺傳と經驗の結果なり。遺傳の部分は天性と云ふべしと雖も其實は過去の業報なり。父母の性質と、我の業因と二者相依て我なるものを形成せるなり。其父母の性質は、我の業因に對して相應の縁たりしなり。故に此より我の來生を思へば、今生に於て我最も高尚なりとする所の生活に相應せる業因を準備すべきなり。而して來生の父母には、又其業因に相應せる縁を得べきなり。是れ經驗上に注意を要する所以なり。

四八、偽善は罪惡なり

偽善は精神なくして、善の形式を表するものなり、道德を侵害する大敵なり。知らず識らず偽善に陥ると云ふは、形式に拘泥するの謂のみ、是れ嘉すべきにあらず。然れども尙恕すべき所あり。若し夫れ故意に偽

善を行ふものに至りては、是れ全く詐欺を行ふものなり。自ら我良心を殺滅するものなり。罪惡にあらずして何ぞや。

四九、至誠は道義の根本なり

「至誠は忠信なり、内外なきなり、表裏相應なり。此原性なきものは、道義の範囲に入る能はざるなり。否至誠に背反するものは、道義の怨敵なり。故に内外相違し、表裏相應せざるものは、道義の第一原理に悖戻するものなり。罪惡の首魁なり。」

五〇、違 順

人の我に違するの時、注意して忍心を失ふべからず。然れども更に注意を要するは、人の我に順する時なり。此時や屢判断(省察)を鹿漫にし、後煩を忘却するなり。(或は道義をも忘却することあり。)

五一、宗教の情は實修門にあり

自力門の行者、其解行の相應せざるを省る毎に、慚愧の情に堪へざるべし。是れやがて懺悔の門に入るものなり。而して悉有佛性、莫不成佛の公理は、更に踊躍歡喜の情を催し、勇修奮行の事に従はしむ。其情の切なるに従ひ、其進取益々盛なるを得べし。

他力門の行者は、其自己の陋劣なるを省る毎に、慚愧の情に堪へざるべし。而も佛陀の大悲を仰觀するや、其攝取不捨の過たざるを思うて、踊躍歡喜の情を催し、念々稱名と共に勇みある報恩の事に従ふべし。

而して其情の切なるに従ひ、報恩の經營益々盛なるを得べし。而して、自力門の進修と他力門の經營は、共に自利々他の六度萬行たるべきこと論を待たざるなり。

五二、無 執 無 著

佛教の要は無執無著に達せしむるにあり。吾人は我に執著し、法に執著し、心に執著し、境に執著し、彼に執著し、此に執著し、眞如に執著し、萬法に執著し、離無執著に執著し、終に眞に無執著に達する能はず。之を破し、破し、破し、盡さしめんとす。是れ無盡破の必要なる所以なり。之は或は中を求め、中の中を求め、中の中の中を求め、無窮の中に向はむと云ふ。無盡の破、無窮の中、是れ大自在の境界なり。大自在の境界と云ふ、尙且つ立言の偏執なりと雖も、達者は其偏執を達見すべし。此無執無著の境界にありて、眞個の大執著あり、之を佛の大慈大悲と云ふ。故に慈悲の根源は、無執著たらざるべからず。吾人幾分の執著を脱し得たる所に於て、幾分の慈悲を生じ、無執著の度益々進むに従ひ、慈悲の量愈盛なるを得べく、完全なる無執著の位地に達して、無限の大慈大悲を垂るゝを得るなり。

五三、執著は奴隸心の源なり

奴隸心とは、我をして彼に服従せしむる心なり。人自ら獨立自由を欲す。然れども、執著或は愛著は我をして、其執著或は愛著の目的に服従せしめ、之が爲に使役せられしむ。是れ豈に我をして彼の目的の奴隸たらしむるにあらずして何ぞや。

花を愛するものは、花の爲に使役せられ、月を愛するものは、月の爲に使役せらる。是れ花月の奴隸たるなり。財貨を愛するものは、財貨の爲に使役せられ、功名を愛するものは功名の爲に使役せらる。是れ財貨功名の奴隸たるなり。

奴隸心を滅せんとせば、愛著心を絶せざるべからず。或は愛著心を以て快樂の源と思ふものあり。是れ奴隸心を以て快樂の源と爲すものなり。吾人は固より快樂を求むるものなるべし。吾人は固より奴隸心を脱せざるべし。然れども、若し快樂を求めば、無限の快樂を求むべし。若し奴隸心に住せんには、至上の奴隸心に住すべし。至上の奴隸心は絶対無限に歸服するにあり。無限の快樂は涅槃の妙樂にあり。而して無限に歸せんには、有限に歸するの念を斷ぜざるべからず。涅槃の樂を得んには、相對の樂(苦樂相代るの樂)を離れざるべからず。是れ破執求中の要ある所以なり。

五四、宗教の實用

宗教は有限の無限に對する心情なり。此心情の何様たるべきやは、無限對有限、絶待對相待、完全對不完全、至善對至惡、無罪對有罪、君父對臣子、自由對不自由、至樂對至苦、至美對至醜、光明對無明等の比對に參照して之を實究すべし。而して其實用に至りては、各自の對境を以て、無限絶對等と觀念すべし、各自の事業を以て、絶対無限に對する行業と觀念すべし。各自の任務を以て、絶対無限の命する所の職分と觀念すべし。各自の使用する所の器械を以て、絶対無限の附與せる所の用具と觀念すべし。各自の運用する所の材

料を以て、絶対無限の給與せる所の物品と觀念すべし。各自の往來する所を以て、絶対無限の領地と觀念すべし。各自の對する所の人士を以て、絶対無限の遣はせる所の使節と觀念すべし。各自の應答する所の云爲を以て、絶対無限に對するの云爲と觀念すべし。各自の獲得する所を以て、絶対無限の恩賜せる所の惠與なりと觀念すべし。畢竟絶対無限は、常恒不斷に我の四邊に嚴臨して離れざることを觀念し、我は常恒不斷に其恩波に浴しつゝあることを觀念すべし。至誠の心、感謝の情は湧然として溢流し、慚愧の心、恐懼の情は法然として浸出すべし。而して改悔懺悔は歡喜慶喜と交互して鞭策の効を奏すべきなり。

資生産業皆是佛道。

汝等所行是菩薩道。

朝與佛起夕與佛臥。

身體髮膚之を父母に受く、敢て毀傷せざるは孝の始なり。然り身體髮膚之を絶対無限に受く、敢て毀傷せざるは報恩の始なり。

身體髮膚は絶対無限の恩賜なり。決して我物にあらざるなり。身體髮膚尙且我有にあらす。況んや之より外他なるものをや。四圍の物件一として我有なるものなく、一として絶対無限の有ならざるはなし。何物をか取て以て我有と執著せん。徹底無一物の觀念に住して而も絶対無限を辱しめざるの行爲に出づべきなり。無對無限の恩賜に假り、絶対無限の使命に従ふべきのみ。

佛の就かしめ給ふには之に就き、

佛の去らしめ給ふには之を去り、

佛の取らしめ給ふは之を取り、

佛の捨てしめ給ふは之を捨て、

至誠心を盡して佛の命示を領すべきなり。(佛は至誠心の存する所に存し、至誠心の指示すところを命示し給ふなり) (至誠心は他力回向の佛心なればなり。)

五五、罪惡の念

我嘗て罪惡の言を聞き、之を嘲笑しき。如今少しく修養の事に従ひ、善惡の義を思ふに至りて、終に罪惡の念に到達せり。何ぞや、曰く、自ら善と思ふ所の事あり、而して之に背反するの行爲を避くる能はざるは、是れ罪惡なり。又自ら惡と思ふ所の事あり。而して之を制止する能はざるは、是れ罪惡なり。是に至りて、先の他言を嘲笑せるを顧みれば、懺懼尙且つ犯罪の苦痛を消す能はず。

五六、顯微鏡と望遠鏡

他の善と、自の惡とは、顯微鏡にて、之を見よ。其如何に大なるかを感じべし。

他の惡と、自の善とは、望遠鏡にて、之を見よ。其如何に小なるかを感じべし。

而して實際自他善惡の大小は、彼の鏡下に見えたるが如きものなるべし。何となれば、我情なるものは、

常に自他善惡の感覺を曲折して、其間に大小の誤見を生じつゝあればなり。

五七、無限の境界には善惡なし

善惡功罪は根本的思念なりと雖も、是れ有限差別の世界に屬するものなり。若し夫れ無限平等の境界には、善惡功罪の區分あることなし。吾人の靈妙なるは、有限なると同時に、無限なることあり。故に此善惡差別の世界にありては、善を勸めて惡を懲さざる可からずと雖も、若し夫れ無限の境界に入らんとせば、不思議善不思惡の見地に安住して、萬事を觀察すべきなり。此觀察方法を説示するもの、之を宗教と云ふ。然れども、吾人は全く無限なるものにあらず、一方に無限的性能ありと雖も、亦一方には有限的存在なり。故に此有限的(其表號は身體なり、衣食住の必要あり。)根蒂ある以上は、吾人は有限的差別に順應せざる可からず。是れ避惡就善の事に従はざる可からず。何となれば、避惡就善の有限差別の間に、無限的境界を連接するの唯一法あればなり。乃ち避惡就善は、畢竟社會の有限差別の境界に於て、窮悶せるものをして、其窮悶を脱却せしめ、以て無限界に遊ばしむる餘地を生ずるものなればなり。

五八、福利の増進

福利の増進は進歩の大目的なり。故に之を普遍的に云へば、吾人は一般に増利増進の事に従事せざるべからず。而して此に積極的と消極的の二面あり。所謂精進の法と、忍辱の法との二者なり。此二者は互に反對するが如しと雖も、共に此有限差別の世界に於て、無限平等の境界を享有せんとするにあり。無限平等の信

念なくして、精進忍辱の事に従はんとするは、是れ全く無根蒂の妄想にして、或は益々有限差別するの私利的偏見なり。是れ決して吾人の認許すべきものにあらざるなり。是れ固より良心の苦責する所なりと雖も、亦吾人は人爲的に、之を斥責するの方便を取らざる可からざるなり。

故に吾人は根本的に無限平等的の觀念に安住せざるべからず。無限平等的の觀念よりして此世界を觀察せざるべからず。差別的の世界にありて、平等的の觀念を持す。其結果や上にあるは下を導き、下にあるは上に順ひ、上下輯穆して、始めて世界の慶福を享有すべきなり。(富者の貧者を恤み、智者の愚者を教へ、貧愚者の富智者を敬重する等、社會の秩序は此より起らざる可からず。)而して上者の上者たる資格を破り、下者の下者たる資格を壞るは、是れ社會の公德を毀損するものにして、所謂没倫の罪惡たるものなり。社會は常に此罪惡に對して、奮闘せざる可からず。是れ敎家の常に *Selfish Egoism* を打撃して止まざる所以なり。道心とは他のことあらず、此打撃に向て精進以て無限平等的福利の發達を期し、忍辱以て有限差別的私欲の制限を期するの精神にあり。

一言以つて之を掩へば、有限をして無限を離れしめず、差別をして平等を犯さざらしむるが吾人の道義の大本なり。

五九、公の爲にせよ

有限の世界にありて、無限の境界を享有せんとするものは、過者、不及者、互に相施受して平等的慶福を

期圖すべし。而して上者には上者の徳あり、下者には下者の徳あり、以て互に相施受すべきなり。上下各其の有する所を以て、公の爲に盡すべきなり。(我を措て他の爲にすべしと云ふことあり、是れ少しく誤まれり。何んとなれば我は到底措かるべきものにあらざればなり。今公と云ふは、彼我を合せて之れを云ふなり。彼を捨るは固より偏私の大罪なり。然れども我を棄るも亦決して正當にあらず。彼我を攝して偏せざるは公と云はざるべからず。公の要は彼我を忘るゝにあり、是れ無限平等の念なり。至心信樂已を忘るゝとは、公の要を表するものたるなり。)

公は天なり。公に盡すの心は仁なり、道心なり。公は彼を攝し、我を攝し、一切を攝す。故に公は大慈悲者なり。公の爲にするものは、大慈悲心を分享するものなり。

六〇、各其能を盡せ

人各其能を盡さざる可からず。然れども私の爲にすべからず。公の爲にするの精神を失ふなかれ。公の爲に盡すは、私を忘れて盡すにあり。若し其能を盡すも、私に利するの欲念を脱せざるは、罪惡たることを觀念せよ。

六一、公の爲にするものは秩序を重んず

公は平等なり、無限なり、然れども惡平等にあらず、妄無限にあらざるなり。有限差別の内にありて、無限平等を忘れざるが公なり。有限差別の秩序を遺れて、惡平等、妄無限に陥るものは、眞の公にあらざるな

り。公の内には、我あり、彼あるなり、上あり、下あるなり。富あり、貧あるなり、智あり、愚あるなり、君臣あり、父子あり、兄弟あり、長幼あるなり。其各分を盡して、公の義成る。故に公の爲にするものは、秩序を守りて其分を盡すべし。

六二、公の爲にするものは約を重んず

公の爲にする秩序あり。秩序を立つるの公式は約（成文不文）にあり。故に約を破るものは、公を侵害するものなり。故に約を破るものは、公に對して犯罪するものなり。法律は國家の約なり。倫常は人類の約なり。故に法律を破るものは國家の罪人なり。倫常を亂るものは人類の罪人なり。犯罪の源は公を忘るゝにあり、公を知らざるにあり。

六三、公共の範圍に大小あり

人類全體に通ずるは一種の公共なり。一國家に通ずる公共は又一種なり。一組織に通ずる公共は又一種なり。一社會に通ずる公共は又一種なり。一團體に通ずる公共は又一種なり。一地方に通ずる公共は又一種なり。一家に通ずる公共は又一種なり。其他公共に多種あり、多類あり。故に公共の範圍は、大小頗る不同なり。然れども、皆其範圍に通ずるが故に、公共たるを失はず。

六四、公共の各範圍に約束あり

公共の各範圍、一々其約束（成文的或は不文的）あり。故に其約束を犯すものは、皆公共の徳を害するも

のにして、犯罪者たるなり。成法上のみならず、不成法上に於ても、嚴然之が制裁を加へざるべからず。

六五、國家主義と個人主義との調和

秩序的公共主義は、國家主義と個人主義とを調和するものなり。其公の爲にするは、國家の爲にするなり。而して其間に秩序（上下貴賤等）を認持するは、個人の爲にすることを包括するなり。

六六、公共の爲にするものは我を別立せず

公共の内には、固より我あり。然れども其我は公共の一分子たるに過ぎず。故に之を別立するは、未だ公共の眞意に達せざるものなり。公共を區分して、我と他人とに別立するものは、多數の他人を一方に置き、單獨の我を一方に置き、其平衡を持たしめんとするものにして、自己に不當の價值を附加するものなり。是れ全然たる私曲にあらずと雖ども、大に之に類するものなり。若し夫れ眞正の公共心は、我を以て公共の内に入らし去り、公共以外に我を別認せざるものなり。己を忘れたるものたらざる可からず。之を獻身的態度と云ふ。故に眞正の公共心は、獻心的精神たるなり。是に於てか、眞正の利他心を見るべし。眞正の利他心は、自の價值を揚擧して、自に對する他を利すと云ふにあらず。自を忘じ去りて、唯公あることを認め、之れを利するの心を云ふなり。

六七、公共心を修養せんには無限を觀するを要す

公共心は修養を要す。其修養の最上方法は、絶對無限者の性能を觀するにあり。絶對無限の觀想、心裡に

瀾漫するに従ひ、公共心の實用漸く隆盛なるを得べし。

六八、公共心は無我心たるを觀すべし

主我心は私心なり。公共心は私心と背反するものなり。己を忘れたる心は無我心たること勿論なり。既に無我心なり、我慢心、我見心、我愛心ならざること勿論なり。

而も尙ほ我心を免かれざるは、止觀の足らざるが爲なり。勉めて修養に従事すべし。

六九、公共心は無畏心たるを觀すべし

怖畏の情は、我の他に侵害せらるゝことを怖畏するなり。既に己を忘れて無我の心に住するものは、怖畏の情を滅殺し得べきなり。而も尙怖畏を免かれざるあるは、無我心の確立せざるにあるを反省すべし。此の如きは、只修養によりて之を確立せしむるを要す。修養とは止觀是なり。

七〇、公共心は不動心たるを觀すべし

迷惑動搖は、有限怖畏の心情より生ずるものなり。既に無限不畏心に住するものは、迷惑動搖を免がるべきなり。而も尙之を免るゝ能はざるは、修養の足らざるが故なり、反覆此止觀に従事すべし。

七一、百般の妄情は我心に根す

貪欲と云ひ、瞋恚と云ひ、詐欺と云ひ、傲慢と云ひ、嫉妬と云ひ、猜忌と云ふ等、百般無數の妄情は、畢竟我見、我所見に基因するものなり。既に無我心に住するものは、此等の妄情を脱却すべきなり。而も尙然

る能はざるは、修養の足らざるが故なり。勉めて反省思惟以て道心を鍛鍊すべきなり。

七二、報恩の經營は義務を守るにあり

絶對無限は我を救済するの大慈悲者なり。其慈恩に報ずるの心は、愈々大悲の救済を顯揚せんとするの情操たるべし。而して報恩の經營は、情操の發現する所にして、自ら絶對無限を顯揚するの義務を勵守するを期すべし。故に義務を守るの心なきは、報恩の情を缺くものなり。故に道德に勇まざるは宗教を得ざるが爲なり。(宗教とは大慈悲者に對する信仰なればなり。)

七三、絶對無限と人格

絶對無限は萬徳を包括す。故に人格にして道心の修練に大用あるものとせば、吾人は絶對無限に擬するに、完全無缺の人格を以てすべきなり。或は絶對無限を最上理想に止むるを欲せば、決して之を妨げず。然れども理想にして、吾人を慰安し、吾人を策勵する以上は、之を人格的に觀するに於て、毫も故障あるべからず。唯人格とは、吾人有限の成立を以て、之を無限の成立に擬するものたるを知るべきのみ。

七四、應無所住而生其心

是れ公共心を以て活動するものゝ心地なり。住する所なきは、無念想、無執著の謂なり。己を忘れて無我なるものゝ心は、何所と定めて住する所なきなり。而も何事をも思はず、何事をも爲さずと云ふにあらず。活潑々地に社會に行動す、其思念の盛なるや勿論なり。故に而生其心と云ふなり。

*この言葉は『金剛經』に出でたる言葉で、禪の極意とするところである。——曉鳥註

七五、無念無想を誤るなかれ

無念無想なれと云ふは、執著的、偏固的、私我的の念想を絶せよと云ふことなり、決して枯木死灰となれと云ふことにあらず。妄念邪想を離れて、真正なる念想に従へと云ふものなり。邪智巧慧を去りて、天真爛漫の妙用を爲せと云ふものなり。工夫を盡し、盡して、工夫の絶したる心狀を云ふものなり。深く修養を加ふるにあらずば達し難き所なり。

七六、道德と宗教

(八月十八日)

道德は止惡作善に外ならざるにあらずや、而して之が制裁は何所にありや。

反善向惡が罪惡なりとの信念確立を要するにあらずや。

善惡の標準は外的なりや、内的なりやは今措いて問はず。

法律尙制裁を要す、道德豈に制裁を要せざらんや。

結果の苦樂之が制裁たり得るや、所謂惡を作して、却て樂を得るものを如何。善を爲して却つて苦を得たるものを如何。

若し良心の苦樂之が制裁たるべしと云はゞ、惡を作すに良心の苦を感じざるもの、善を爲すに良心の樂を感じざるもの、所謂良心の死却せるものを如何にするや。

結果は苦樂が制裁たる能はざるは勿論なり。而して良心の苦樂なるものは、抑發育開展を要するものなり。其育成が正しく道德的修養なるものなり。換言すれば良心育成の爲めに制裁が必要なるなり。良心ありて制裁を成し得るにあらざるなり。(良心——而後——制裁)にあらず。(制裁——而後——良心)たるべきなり。

制裁は如何にして確立し得べきや。是れ道德上の根本問題なり。

法律上の制裁は形而下なり、實現なり、其すら、尙完全を期し難し。缺席裁判の、遂に其罪人を逸する場合あり。犯罪ありて發見せられざる場合あり。

道德的制裁の成立、決して人爲人力の創造し得るものにあらざるなり。是れ二世に亘り、(耶蘇教の如き)三世に亘り(佛教の如き)て因果應報の説ある所以ならずや。

而して因果應報は常に絶對的力用を具せざるべからず。完全的力用を具せざる可らず。至上的力用を具せざる可らず。

吾人は果して絶對的完全的至上的なるものを識知し得るや。

相對有限の吾人に、絶對無限の識知なかる可からざるなり。而して識知は必ず相對有限ならざるべからずと謂ふべきや。

嗚呼道德は終に其根據を獲得する能はざる乎。

夫れ然り豈夫れ然らんや。何ぞ智力的直覺なしと云ふや、何ぞ宗教的信念なしと云ふや。

若し夫れ智力的直覺を立し、宗教的信念を立せば、何ぞ絶対無限の得難きを歎ずるを要せんや。

而して宗教的世界は、絶対無限の制裁を以て、罪惡を制止するものなり。絶対無限の制裁と、罪惡の觀念とは、並存せざる可からざるなり。絶対無限の制裁なき所には、眞の罪惡の觀念成立する能はず。罪惡の觀念存立せざる所には、絶対無限の制裁あるなきなり。而して罪惡の存立は信念たらざる能はず。

絶対無限の制裁も畢竟亦信念たらざるなきなり。

或は制裁は因果應報の完全なるなりと云ひ、或は制裁は因果を支配する所の神佛の存在なりと云ひ、或は制裁は絶対眞理其物の妙用なりと云ふを得べし。而も此等制裁の現實は、其吾人の信念の確立せる所にありて存するのみ。

故に吾人道德行爲の制裁は畢竟吾人の信念が、自ら活動するものに外ならず。

自らの信念が、自らの妄想を制裁するもの、是れ道德的の制裁なり。

而して完全なる道德は完全なる（不動の）信念を要す。完全なる（不動の）信念は、絶対無限に對する信念たらざるべからず。

絶対無限に對する信念は、是れ正に宗教の精髓なり。

故に曰く、道德の成立は宗教を待たざるべからざるなりと。

根本的に之を論ぜんか。

（八月十九日）

善惡なるものありや、なきや。

之なしと云ふは、平等門なり。是れ固より眞理なり。

然れども此門より云はゞ、邪正も、是非も、曲直もなき筈なり。否、眞理（對非眞理）其物もなき筈なり。絶対平等無差別あるのみ。此の如き見地は是れ正に宗教の態度なり。

然るに平等門に對して、亦差別門あり。

善惡、邪正、是非、曲直は此門内の談なり。此門内には亦眞理と非眞理との相對あるなり。其非眞理、之を妄想妄念と云ひ、或は煩惱業障と云ふ。之に對して眞智あり、正念あり、菩提あり、涅槃あるなり。常識の門は此差別門なり。故に善惡あり、徳不徳あるなり。是れ即ち道義の源泉なり。

道義 實行——去惡就善

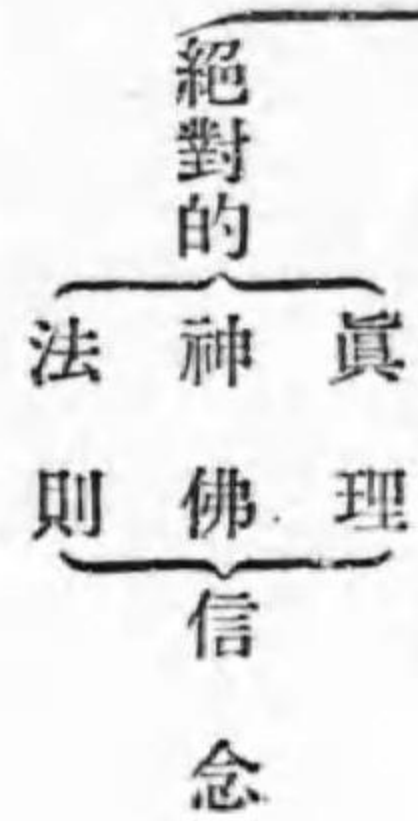
制裁——因果應報

實行 無上命令的
本具心念的

結果の苦樂（利害の計算）

法律的

制裁 輿論的



(一) 利害の計算は到底完備なる能はず。

(二) 法律の拘束は逸脱あり。

(三) 輿論の賞罰は漠然にして、亦常に當を得るにあらず。

(四) 絕對的制裁こそ、眞の制裁たるを得るものなれども、此には眞理、神佛、法則、等の別あり。而も此等は皆吾人の之に對する信念（慧見）によりて初めて活動し得るのみ。故に其實は自己の信念が、自己の行爲を制裁するものなり。是れ眞の克己復禮にして所謂獨立自在の活作用なり。是れ道義の根本なり。故に曰く、道義の根本は、宗教的信念の確立を要す、と。

而も更に絕對、何の爲に此の如き制裁を爲すや。抑制裁の成立する眞意は如何と問へば、畢竟絕對か止惡作善を意念するが爲と云はざる可からざるなり。法律の制裁は法律が非法を防がんと意念すればなり。

輿論の制裁は輿論が非道を防がんと意念すればなり。今絕對の制裁、何ぞ此に異なるあらんや。然らば止惡作善は絕對の意念なり。而して吾人に無上命令を與ふるものは、絕對の意志なり。吾人に本具心念あるは絕對の意志なり。吾人の道義的成立は全く絕對の本性に基くものなり。吾人が止惡作善は絕對の本性に順するものなり。云々。

七七、無上命令（本具心念）

無上命令は、絕對無限が必然的必須的に、相對有限に命令するものなり。本具心念は絕對無限が必然的必須的に、相對有限に賦與せる心念なり。（或は之を良心と云ふも、亦同じ。）是れ蓋し相對有限が絕對無限の境界に冥通し得る所以の根基なり。故に此命令心念に順すると違するとに於て、絕對無限的の快苦を感ずるなり。是れ本心の喜悅と、本心の呵責とは、共に絕對無限的なる所以なり。

七八、昇沈

所謂我なるものは、強ち有限のものにあらず。一たび無限を認信せば、我は無有限の一致體なり（佛凡一體）。而して其行爲が無有限なれば、其境界は無有限なり。其行爲が有限なるときは、其境界は有限的なり。故に我は、或は無有限界に昇登し、或は有限界に沈落して、轉變止むなきなり。然れども修養は終に我をして永く無限界に安住せしむるに至るなり。

七九、希望

將來に對しては唯希望を持せよ。希望は現在に歡樂を生ずべし。

八〇、苦 痛 (恐怖)

將來に苦痛を想像して恐怖(之を杞憂と云ふ)するは妄念なり、煩惱なり。決して之を爲す勿れ。

八一、苦 樂

苦樂は現在にあり。現在の樂は之を避けよ。現在の樂は之を進めよ。

八二、死生を均くす

死生を均しくするの人は、現在に苦を感じざるべし。其未だ苦を脱せざるは、其未だ死生を均くし了らざるが爲なり。

八三、一定の惡あることなし

一定の惡あることなし。先づ受動的のものに就て之を見よ。人の我を侵害するは、或は我の業報なりと感ぜば、必然の結果と諦め得べし。而して此の如き業報は、我をして善に進ましむるの方便なりと觀ぜば、侵害は即ち我病に對する良藥なりと知らるべし。(艱難辛苦は人を玉にするの材料なり。)次に我が人に對して爲すこと、人或は之を惡と感ずるあらん。而も我に於ては是れ彼を道に到らしむるの方便たるべし。是れ彼は之を惡とするも、(彼覺らざるが故なり)我に於ては、彼に對する好意なり、善巧方便なり。

故に吾人は各自に、惡は之を避け、善は之に進むの一道に心掛くべし。此の心確立せば、我は惡を脱し

て、善の世界に逍遙するものなり。此の極や既に對すべき惡なし、故に之を善と名くべからず。(善惡は相對なればなり。)故に是非善惡なし。之を平等界と云ふ。

八四、平等界は無功用以上なり

一念の惡なきは純善の境界なり。是れ無善惡の境界なり。此境界は其行爲に於て善の修練を積み、進みに所謂任運無功用に、善を行ふを得る以上の境界なり。故に其人自らも此境界に到りては、最早善惡の念想を脱却せるものなり。知らず識らず帝の則に契ふの境界なり。自然にして法に合する境界なり。行爲の妙境は皆是なり。(運筆の妙、劍法の妙等以て參すべし。)之に達せざるは差別の執著あるが故なり。故に妙境に進むの方法は、執著を打破するにあり。(執著を打破するとは、畢竟善く修練するに過ぎざるなり。)

意識的動作(コンシヤス、アクション)は、進みて無意識的動作(アンコンシヤス、アクション)となり、意念的動作(アーチフシヤル、アクション)は、進みて自然的動作(スポンテニアス、アクション)となる。有意的動作(ヴォランタリー、アクション)は、進みて無意的動作(インヴォランタリー、アクション)となり、感覺的動作(センセーションナル、アクション)は、進みて反對的動作(レフレツクス、アクション)となる。

八五、宗教は信念の確立を主とす

宗教は信念の確立を主要とす。

智は論理的なり、故に相對的なり。前提斷案の相對。

情は感覺的なり、故に相對的なり。能覺所覺。

意は被動的なり、故に相對的なり。能動所動。

唯信念は絶對的なり。

信念は前提を建設し得べし。

信念は能覺所覺を創造し得べし。

信念は能動所動を建造し得べし。

信念其物は他に建造さるゝ能はじ。

八六、學理は信念に根據す

(八月二十七日)

論理學は學理の原則を究定する學なり。而して其基範は三大則にあらずや。均同の方則。背反の方則。不容間位の方則。是れ何によりて其根基を得とするや。或は之を自明の理なりと言ふべきか、而も自明とは信念上に自明なるにあらずや。

其他萬有一揆の天律、原因結果の天則、等其究竟根基皆悉く先天的或は後天的の信念にあらずや。

數學は萬有學の原則とする所なり。而して其所謂自明の原理、^{アキシオムス}措定の原理、^{ポスチュレイト}は何に根據するものなりや。

物理、化學、礦物の諸學、其源頭に措設する所の空間、時間、勢力、運動、物質、分量、等の諸範疇は何を以て最後の根基とするものなりや。

哲學は萬學の基礎を究定すと云ふ、而も究理は常に相對界に落在す。相對界より一躍して、絶對界に登到する其雲梯は是れ何ものぞや。直覺と云ひ接觸と云ふも、信念の明瞭なるに何れぞや。

實驗と云ひ、觀察と云ひ、經驗と云ふ、是れ吾人が若干の信念を確立せる上のことならずや。

而も實驗觀察に根據せざる信念は正確ならずと云ふや、豈に自家撞着の至大なるものにあらずや。

之を要するに、吾人が有する幾多の官能作用は、皆悉く相對的を脱する能はず。唯信や能く絶對的の天地に翱翔して、無礙自在なるを得べきのみ。

八七、我現在の信念

我は我あることを信ず。(統一的原理或は心王)

我は外物あるを信ず。

我は我と外物に各其作用(變化)あるを信ず。

我は我と外物との間に接觸互働の可能を信ず。

我は外物の作用に規律あるを信ず。

我は我作用に規律あるを信ず。

我は我に絶對的性能あるを信ず。

我は我成立の絶對的(無限的)にして亦相對的(有限的)なるを信ず。

我は矛盾の一致あるを信ず。

我は善惡の成立に疑あり。(意的)

我は邪正の成立に疑あり。(智的)

我は美醜の成立に疑あり。(情的)

八八、我の信界



我は若干の信念を有し、之に基きて推理を建設し、其斷案として、實際に達す。是れ我が意識的世界なり。之を攪亂するものは無意識的世界なり。

我は我意識的世界の外に、無意識的世界あるを認定す。

然れども此無意識的世界は、今は我管轄外なりと雖も、終には我管轄内に包容し得べきものなりと信ず。

無意識世界が、我意識世界を擾亂する限りは、我は之を對治せんことを希望す、此希望に對しては、意識

世界は眞理界にして、無意識世界は妄想界なり。

智と意とは眞理界に關する作用にして、情は妄想界に關する作用なり。

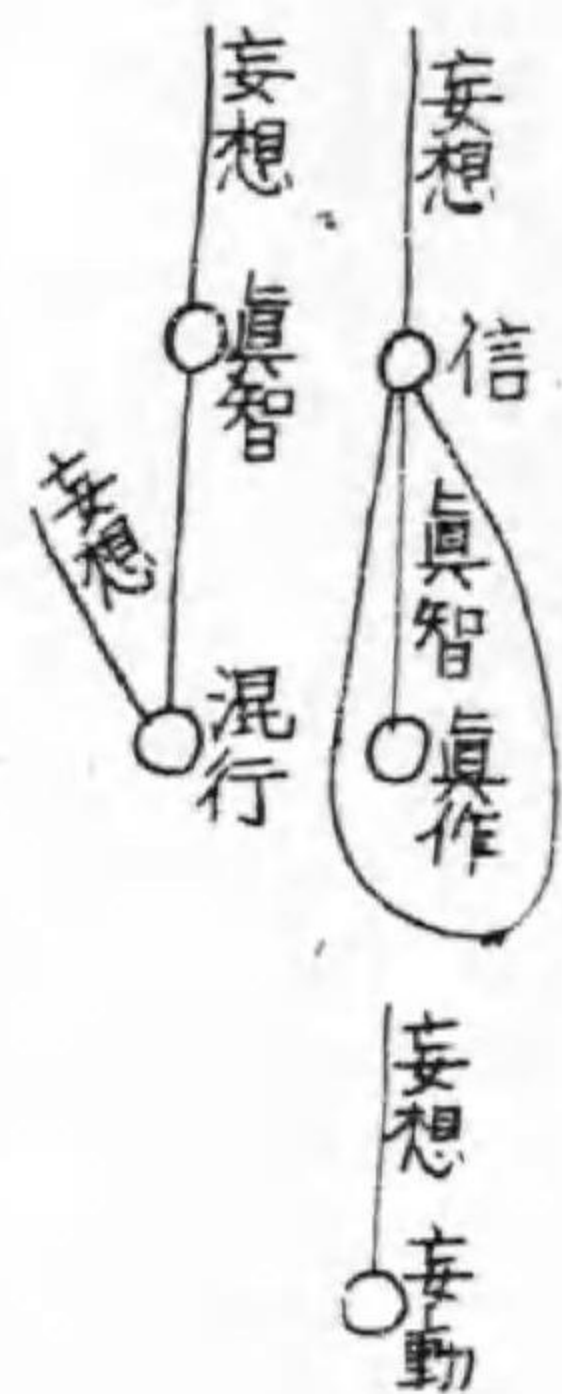
信は眞妄混絶の境界に關する作用なり。

信に基かざる智は妄想なり。

信に基ける智は眞智なり。

妄想に促さるゝ實行は妄動なり。

眞智に起さるゝ實行は眞作なり。



吾人は妄想を對治せざる可からず。之を爲すの道は信界を純淨ならしむるにあり。乃ち基本たる信念を明白にし、其より流出する所の論理を齊整するにあり。〔是れ矛盾の原理が世界を洗淨(ピュリファイ)するの準備たる所以なり。〕

故に道德界宗教界は、全く信に基き、智に依り、情を治め、意に發する者たる也。

八九、精神界と物質界

(八月三十日)

精神と物質とは究竟は不一不二のものなるべし。然れども吾人は現在に於ては之を區別しつゝあり。是れ

恰も無限と有限とを區別しつゝあると同一範なり。

然るに吾人の無限なることは、最も切に精神的範圍に明なり。

吾人が無限を觀想し、無限界を成立し得るは、全く理想的なり。而して理想は現實を惹起するの指導者なり。

今吾人が有限不自由の境界より、進んで到達せんとする所の無限自在の境界は、全く理想に過ぎざるなり。

此理想を現實ならしむるは如何せば可なりや。

曰く、精神界をして物質界を克伏せしむるにあり。

克伏とは強て物質界を排斥することにあらず。物質界を研究して、精神界の需要に服從 (serve) せしむる

にあり。(外物に誘惑せらざして之を使用するにあり)

此進歩の極や、

天地萬物皆我有
一切衆生皆我子
の理想界

と云ふの態度に到着すべし。

是れ一方には學理の進歩によりて、吾人が自然界を支配し進むと(水力氣力等を利用すると云ふは此一部なり。)一方には道德的交際によりて博愛相濟の道に進むと、(親密なる交友の間には彼物は我自由に之を受用し、我物は彼自由に之を受用するを妨げざるが如きは吾人の實驗にあらずや)にあり。而して其之に勇進し

得る根據は、蓋し

吾人は其實、彼我同體の絶對無限たるが故にあり。(是れ現在にありては一理想なり。)

吾人は飽迄此信念を確立して、以て生々たる活動に従事せざる可らざる也。

佛教に於て我法の二執を破斥する所以は、吾人が彼我同體の絶對無限たることを覺らず(之を不覺妄念と云ふ。)して、

先づ照差別的有限の我を執して、永く他人と隔別し、外物と隔別するの妄想、(即ち他人と外物とは、其實、我と同體一味なることを覺らずして、却て他人外物の爲に苦悶せしめらるゝの迷倒)を斷ぜしむるにあり。

之を要するに、

理想界——文明
學術技藝
道德交際
の發達——宗教(精神的克復物質的)

他人の身體や、他人の財産は、固より他人の所有に屬するものなり。然れども、我若し其人に對して充分の道德的交際を爲し、天下國家の爲になるべき事業に従ふことを談せば、其人必ず其身と財とを以て之を助くべし。是我が他人の身體と財産とを我用に供するに非ずや。他人より我を利用することも亦此の如くなるべし。而して吾人が相互に其身體財産を利用するを得ば、我も法界の主となり、彼も法界の主となりて、其

活動は同時に亦同處にして、毫も相衝突違乖する所なきなり。之を名けて圓融無礙の境界と云ふなり。

此の如き圓融無礙の境界は、吾人の現在にありては、全く理想的なり。然れども、吾人は此の理想を實現せざるべからず。而して其之を實現し得るは現社會の未來に在るべく、亦吾人の個人的生活の未來に在るべし。其何れに在るに關せず、吾人は現在に於て之に向進するの事に著手せざる可からず。之を名づけて實行と云ふ。實行は吾人眼前の要務なり。而して實行の端緒は理想の確信にあり。確信の成立する所は精神界にあり。是れ精神的修養が實行の基本なる所以なり。故に吾人の要務は、彼の理想的萬有一體の原理即ち絕對無限の存在を確信し、實際に我他彼此阻隔の迷妄を拂掃するの道義的實行に勇進せざる可からざるなり。唯此に最も注意すべきは、吾人の境界は決して頑固固定のものにあらずして、吾人の心界と共に發展するもの（隨其心淨則佛土淨とは其理想なり。）にして、吾人が現社會に又未來界に高妙なる境界を受有し得るは、其心界の高妙なる程度に相應することこれなり。（今日文明人の世界と野蠻人の世界とは其實決して一様ならず。一は多樂界にして、一は多苦界なり。一は比較的自在の境界にして、一は比較的不自在の境界なり。而して其苦樂自由の程度は、全く文明人の精神が大に發展して外物を利用し、交際を擴張せるが爲なり。之より推して求むれば、妙樂大自在の境界を發展するの道、亦大に開物成務の功を積み、道義發揚の事を務むるの外なきこと瞭然たり。）

九〇、絶對的考察

唯物論。物質とは何ぞや、元素とは何ぞや。

器械的、無生的、無覺的、無念的、無想的のものたるべし。

無は有を生ずること能はざるなり。

故に物質的存在は、畢竟無念無想の世界に、無念無想の運動を爲すに過ぎざるべし。

是れ果して今日の實際なりや、是れ果して究竟の境界なるべきや。

然れども無念無想の境界は、決して全然の非眞理にあらず、佛教禪宗の指示する所に就て其眞理を知るべし。

引證……………

九一、世界觀

吾人が世界を觀察考究せんとするに、劈頭二種の異説に突會す。

一は、我等の知識は經驗によりて、制限せらる、故に絶對的に之を觀知する能はずと云ひ、

一は、我等の思想は其自身に絶對的性能を有するが故に、絶對的に世界を觀知することを得と云ふ。

今（第一）を名づけて相對論と云ひ、（第二）を名づけて絶對論と云ふべし。

世界觀
相對論——經驗論
絶對論——實在論

經驗論は自ら二種に分る。一は經驗以外に假定或は知見を許さざるものと其反對と是なり。(第一)は竟經驗其ものを絶對と爲すも畢のにして、相對論中には矛盾的なりと雖も、其實此論者は經驗論者中の極端にして、當初主客兩觀の實在を假定して、其上に經驗なるものを構説したるも、其論理中經驗以外に假定を許すの不可なるを知り、終に經驗以外一物をも許さざる極端に走りて、自家撞著を爲せるものなり。(第二)は經驗の基礎として、主客兩觀の必要を忘れざるも、如何せん、經驗以外には到底確實なる斷言を爲す能はざるが故に、只何か經驗外の實物存することをのみ主張して、其如何なるものなりやは不可知なりとするに至れるなり。不可知なるものを、存在すと云ふは明瞭なる大矛盾なり。之を要するに、經驗論は畢竟自家矛盾を免るゝこと能はざるものなり。

經驗論
經驗相對論(唯感覺論)
經驗絶對論(可知界)
不可知界

實在論は思想の性、能く絶對を觀知し得べしと爲すものなり。而して茲に思想と云ふは一種の心性作用と云ふ底の意義にして、此内部には多種の論者あり。今之を總括せば三要者を得。(第一者)は論理的に絶對を觀知し得べしと爲すもの、(第二者)は頓悟的に絶對を觀知し得べしと爲すもの、(第三者)は信念的に絶對を觀知し得べしとなすものなり。此三者中、第一者は吾人にありて尤も正確なるが如しと雖も、其實後二者の如く堅牢なる能はざるなり。其故如何となれば、論理は畢竟命題(即ち判斷)の連鎖によら

ざる可からざるが故に、最上の命題は決して論理的證明の保成し得る所にあらず。故に遂に論理以外の方法を要求せざる能はず。而して其方法は假定、悟斷、信念の外ある能はざるなり。中に就て、假定は以て論理の基本とするに足らず。故に悟斷又は信念を以て論理の基本と爲さざる可からざるなり。

論理的
絶對論
頓悟的
信念的

夫れ此の如くして吾人は絶對的に世界の成立を觀知し得るとせば、吾人は先づ茲に絶對と相對との關係を明にせざるべからず。而して其論系凡そ三種あり、左の如し。

- (一) 創造論
- (二) 顯現論
- (三) 轉化論(進化論)

創造論は絶對的存在が世界萬有を創造すと云ふものにして、所謂神造物の論なり。然るに此論の中に多神が多物を創造とするものと、二神(通常善惡二神)が二界を創造とするものと、獨一眞神が一切萬有を創造すと云ふものとあり。

多元的——多神
 創造論——二元論——善惡二神
 一元論——獨一眞神

顯現論は絶対的本體が萬多の現象を呈露すと云ふものにして、通常一元論なりと雖も、若し其本體を不可知的なりとするものにおいて、多元二元の論もなきにあらず。例せば、主観には主観の本體あり、客観には客観の本體ありとするが如きは、二元論の顯現論と云はざる可らず。多元論の論も亦推想し得べきなり。然れども、若し此の如き多元二元の本體を可知的なりとせば、皆自家撞著を免かるゝ能はざるなり。何んとなれば、可知的區域内に絶対の多數ある能はざればなり。

多元的
 不可知的
 顯現論——二元論
 一元論

轉化論（進化あれば退化あり得べし、今双方を合して命名して轉化論と云ふ。）は絶対的存在が始終轉化しつゝあるが、世界の成立なりとするものなり。而して其内多元的（極微、分子、單子の論の如き）二元論（眞如無明の互働論の如き）一元論（唯物、唯心の論の如き）ありと雖も、其尤も注意を要するものは無論一元論的轉化論なり。

多元的
 轉化論——二元論
 一元論——唯物論
 唯心論

第三篇 行化時代

精神主義

この精神主義の中に收めた各文は明治二十四年一月創刊の雑誌『精神界』の毎號卷頭に掲げられたものである。『精神界』を發行するに當り、先生が何を書きませうかと問はれたので、『精神界』の卷頭文ですから『精神主義』として書いて下さいというて書いていただいたのである。だから、先生の精神主義は世の多くの主義者の唱ふるやうな固定した主義ではないのである。——鳴鳥註

一 精神主義

吾人の世に在るや、必ず一の完全なる立脚地なかるべからず。若し之なくして、世に處し、事を爲さむとするは、恰も浮雲の上に立ちて技藝を演ぜんとするもの、如く、其轉覆を免るゝ事能はざること言を待たざるなり。然らば吾人は如何にして處世の完全なる立脚地を獲得すべきや、蓋し絶對無限者によるの外ある能はざるべし。此の如き無限者の吾人精神内にあるか、精神外にあるかは、吾人一偏に之を斷言するの要を見ず。何となれば彼の絶對無限者は、之を求むる人の之に接する所にあり、内とも限るべからず、外とも限るべからざればなり。吾人は只此の如き無限者に接せざれば、處世に於ける完全なる立脚地ある能はざること云

ふのみ。而して此の如き立脚地を得たる精神の發達する條路、之を名けて精神主義といふ。

精神主義は自家の精神内に充足を求むるものなり。故に外物を追ひ他人に従ひて、爲に煩悶憂苦することなし。而して其或は外物を追ひ、他人に従ふ形状あるも、決して自家の不足なるが爲に追従するものたるべからず。精神主義を取るものにして、自ら不足を感ずることあらんか、其充足は之を絶對無限者に求むべくして、之を相對有限の人と物とに求むべからざるなり。

然れ共、精神主義は強ちに外物を排斥するものにあらず。若し外物に對して行動することある場合には、彼の外物の爲に煩悶憂苦せざるのみならず、彼の外物は精神の模様に従ひ、自由に之を變轉せしめ得べきことを信するなり。故に彼の「隨其心淨、則佛土淨」とは、是れ善く精神主義の外物に對する見地を表白したるものといふて可なり。

又精神主義は自家の精神を以て必要とするが故に、其の外貌或は利己の偏に僻し、他人を排斥するが如きものなきに非ず。然れ共、精神主義は決して利己一偏を目的とするものにあらず、又他人を蔑視するものにあらず。只自家の立脚地をだも確めずして、先づ他人の立脚地を確めんとするの不當なるを信じ、自家の立脚地だに確乎たらしむるを得ば、以て之を人に移し得べきことを信じ、勉めて自家の確立を專要とするが精神主義の取る所の順序なり。

故に若し外物又は他人と交際して、自他の幸福を増進することに至りては、精神主義は決して此事を排斥せず。寧ろ反て之を歓迎するなり。故に精神主義は決して隱遁主義にあらず、亦退嬰主義にもあらざるなり。協同和合によりて社會國家の福祉を發達せしめんことは、寧ろ精神主義の獎勵する所なり。

精神主義は完全なる自由主義なり。若し其制限束縛せらるゝことあらば、是れ全く自限自縛たるべく、外他の人物の爲に制限束縛せらるゝにあらざるべし。自己も完全なる自由を有し、他人も完全なる自由を有し、而して彼の自由と我の自由と衝突することなきもの、是れ即ち精神主義の交際といふべきなり。

而して通常の場合に於ては、彼の自由と我の自由と衝突なき能はざる如きは何ぞや。他なし、此の如き自由は完全なる自由にあらざるが故に、完全なる服従と平行せざればなり。今精神主義によりて云ふ所の自由は、完全の自由なるが故に、如何なる場合に於ても、常に絶對的服従と平行するを以て、自由に自家の主張を變更して他人の自由を調和することを得て、決して彼の自由と衝突することあらざるなり。

然るに此の如き服従の場合に於て、最も注意すべき所の要件あり、煩悶憂苦の有無即ち是なり。此點に就ては精神主義に一種の要義あり、他にあらず、精神主義は總ての煩悶憂苦を以て、全く各人自己の妄念より生ずる幻影と信するにあり。乃ち、精神主義よりして之を云へば、我は外他の人物を苦むること能はざると同じく、外他の人物は我を苦むること能はざるなり。故に或は外他の人物の動作によりて我が苦惱するが如きことあるも、精神主義よりして之を云へば、是れ我が妄想の爲に苦惱するものとし、決して外他人物の爲めに苦惱せざるものとするなり。(之に反する場合も推して知るべし。)而して此の如き苦惱は畢竟妄念より

生ずる幻影に過ぎざるが故に、精神主義の實行が進歩するに従ひ、吾人の立脚地の益々明確となると共に彼の苦惱は漸次に減退消散するものたるなり。

之を要するに、精神主義は吾人の世に處するの實行主義にして、其第一義は、充分の満足を精神内に求め得べきことを信するにあり。而して其發動するところは、外物他人に追従して苦惱せざるにあり。交際協和して人生の幸樂を増進するにあり。完全なる自由と絶對的服従とを雙運して以て此間に於ける一切の苦患を拂掃するに在り。(明治三十四年一月發行「精神界」所載)

二 精神主義と物質的文明

玉杯象箸、高樓に宴安するは、常識の以て盛大となす所なり。簞食瓢飲、陋巷に潜居するは、凡情の以て陋小となす所なり。輕車肥馬、堂々として國事に奔走するは、常識の以て盛大となす所なり。赤脚草鞋、役として家業に勞働するは、凡情の以て陋小となす所なり。乃ち陋巷を卑とし、高樓を尊とし、脚鞋を賤とし、車馬を貴とし、天下を擧げて車馬高樓を羨望し、脚鞋陋巷を厭斥す。是れ一方には競争相奪の根源にして、一方には奢侈贅澤の濫觴なり。豈警戒すべきことならずや。精神主義は、之に對して一段の見解を捧げんとするものなり。今少しく之を開陳せん。

世に一種の主義あり。前段の事象に關して、直面反對の見地を立て、車馬高樓を卑賤として之を厭斥し、脚鞋陋巷を尊貴として、之を羨望せんとす。精神主義は物質的文明に對して、此の如き消極主義を宣揚する

にあらざるなり。

車馬可なり、高樓可なり、脚鞋可なり、陋巷可なり。此の如き客觀的事象に對して卑を見ず、賤を見ず、尊を見ず、貴を見ず。略言せば、能く平等の見地に住せんこと、是れ精神主義の要義とする所なり。

夫れ吾人の生存は、是れ與へられたる問題なり。貧富貴賤、士農工商、吾人は生れて各異れる家庭にあり、各異れる身心を以て、各異れる經驗を受く。如何に勉めて之を平等ならしめんとするも、吾人は決して其目的を達すべきにあらず。況んや、男女老幼天然に相同じからざる諸點あるに於てをや。然れば即ち、人生の行路に於て、或は輕車肥馬高樓宴安の舞臺に立つものあり、或は赤脚草鞋陋巷潜在の隱居に處するものあるは、固より當然と云ふべきなり。加之、世相の變轉、富も變じて貧となり、貴も轉じて賤となるを免れず。此間に處して、能く不動の安心に住せんとするもの、豈彼の車馬高樓と脚鞋陋巷との爲に變轉して可ならんや。吾人は吾人現在の境遇を以て、其車馬高樓たとを問はず、之を與へられたる問題として解釋せざるべからず。而して此問題を解釋せんとせば、吾人は吾人現在の境遇の中に於て満足の見地を得得せざるべからざるなり。是れ精神主義の活動によらずば、決して達し得られざる所なり。

然れば則ち、精神主義は如何に活動して、彼の問題を解釋せんとするか。精神主義の活動は、眞理の遍在を確信するを以て、根據とするなり。乃ち眞理が萬物に遍在する以上は、客觀の上にも主觀の上にも、眞理は決して缺乏することあるべからず。而して客觀上の眞理は主觀上の眞理によりて、始めて觀見せらるゝも

のなるが故に、吾人は彼の客觀上の眞理を觀見せんが爲にも、先づ主觀上の眞理を自覺せざるべからざるなり。而して主觀的眞理の自覺が即ち精神主義に外ならざるが故に、精神主義は常に主觀的作用の完全圓滿に到達し得べきことを確信するもの也。果して主觀的作用が完全圓滿に到達し得べしとせば、吾人は、現在に於ては、客觀的事象に對して、彼を厭ひ此を望むが如き妄念の爲に障礙せられて、平等の見地に住する能はずと雖も、是れ畢竟自覺の未だ充分ならざるによるものにして、決して彼の客觀的事象に尊卑貴賤等の性質あるにあらざることを信知するなり。即ち彼の陋巷は決して陋小なるにあらず、之を陋小なりとする我心が陋小なるを信じ、彼の赤脚草鞋は決して卑賤なるにあらず、之を卑賤なりとする我心が卑賤なるを知るなり。是に於てか、吾人は現在の境遇に不満を感じずして、只管自家修養の道に傾注するに至る。而して彌々修養の道に於て進達する所あらんか、吾人は、彼の境遇に對して、嘗に不満を感じざるのみならず、如何なる所にも無限の妙致を發見して、到る所に充分なる満足を獲得すべきなり。是れ即ち、精神主義の客觀的事象に對する活動の概觀なり。

終りに精神主義の客觀的事象に對する態度を反面的に略言せば、精神主義は彼の客觀事業の進歩、特に物質的文明の進歩に對しては、敢て妨害せんとするものにあざると同時に敢て貢獻せんとするものにあざるなり。精神主義は、物質的文明が進歩すれば、其進歩したる所に活動の地歩を占め、物質的文明が退歩すれば、其退歩したる所に活動の地歩を占むることを得るなり。此點に於ては精神主義は、客觀的事象と、全

く關係なきものと云ふべきなり。

之を要するに、精神主義が客觀的事象に關係する所は、其主觀的成立即ち物質的文明の價値、趣味、品格、意匠等を認識する所にして、精神主義は實に此等認識の唯一主宰者なり。而して精神主義活動の極致は、萬物に於て同一價値、同一趣味、同一品格、同一意匠等を認識せしむるにあり。此の如き精神主義の活動は、則ち、是れ競争相奪の害を防ぎ、奢侈贅澤の弊を救ふの必須條件なり。(明治三十四年五月發行「精神界」所載)

三 精神主義と競争

名譽の競争あり、財産の競争あり、實力の競争あり、門閥の競争あり、他の歡心を買はんとする競争あり、人の機嫌を損せざらんとするの競争あり、上を凌がんとするの競争あり、下に凌がれざらんとするの競争あり。凡そ社會活動の現象は、見來れば、一として或る競争の事にあらざるものなし。否、社會活動の現象のみならず、萬有活動の現象は、悉く是れ勢力競争の事にあらざるものなしと云ふものあり。

然り而して、彼の無意無心なるものの動化を活動と名けて、之に競争と稱すべき作用ありやなきやは、今の要問にあらず。吾人は今活動と云ふべきもの。競争と云ふべきもののある所の範圍内に就きて、檢する所あらんのみ。而して、競争は精神主義と如何なる關係に立つものなりや。

競争は如何なる場合に於ても、客觀的對象を離れざること勿論なり。故に競争は第一着歩に於て、精神主義と反對する所あること明なり。特に吾人に最も近切なる競争の對手は、常に社會に於ける吾人の同胞なり。

換言せば、吾人は日夜に同胞に對する競争に驅られて、苦悶を脱する能はざるなり。更に緊切なる事例に就かんか。吾人が君上に忠順なる能はざるは、一種の競争心を以て、其根底となせるなり。吾人が父母に對して孝順なる能はざるは、一種の競争心を以て、其根底となせるなり。吾人が朋友に對して柔順なる能はざるは、一種の競争心を以て其根底となせるなり。其吾人が所謂修身道德の大義と稱する所の事に於て、吾人が其實踐躬行に達する能はざる所以は、蓋し幾多の競争心が吾人の心裡に潜在して、常に從順の本心を壞亂するが爲ならざるなし。所謂修身道德の心と競争とは終に兩立する能はざるものなり。或は云はん、修身道德も、亦進化の現象なり、而して其進化は亦競争心に據らざるべからずと。吾人は今茲に修身道德の進化論の實踐躬行上に於て、修身道德と競争心との衝突あることを指すのみ。是れ吾人の實驗を表白するものなり。即ち換言せば、吾人の内的實驗は、常に修身道德の心と競争心との衝突を感じしむるなり。而して吾人の修身道德の心が競争に據りて進化したるものなるや否やは、毫も此實驗に影響する所なきなり。

更に進んで吾人の實驗を開陳せば、吾人の競争心は、客觀的對手が、目前に實現したる時に於て、最も強盛なるを覺ゆ。名譽の場合に於ても、財産の場合に於ても、實力の場合に於ても、門閥の場合に於ても、他の歡心を買はんとする場合に於ても、人の機嫌を損せざらんとする場合に於ても、上を凌がんとする場合に於ても、下に凌がれざらんとする場合に於ても、其競争の主因となるべき事件が、吾人の眼前に存せざる間は、吾人は、幾分か之に對して競争するの念を脱却し得べしと雖も、一たび其事件が目前他人の上に發現せ

んか、吾人は直に之に向ひて、競争の念止む能はざるものあり、他人の名譽を見れば、直に之に競争せんとし、他人の財産を見れば、直ちに之に競争せんとし、他人の實力を見れば、直に之に競争せんとし、他人の門閥を見れば、直に之に競争せんとし、他を見れば、直に其の歡心を買はんとし、人を見れば、直に其の機嫌を損せざらんとし、上を見れば、直に之を凌がんとし、下を見れば、直に之に凌がれざらんとす。之を要するに、客觀的對象の實現は競争心を激成するの大動機たるものなり。

夫れ此の如く、競争心は客觀的對象の實現を以て大動機とす。故に、彼の客觀的對象の實現に動轉せられざらんとする所の精神主義は、蓋し競争心とは、相兩立せざるものたるを知るべきなり。精神主義は自家の内部に圓滿を期するものなり。外他を望觀して煩悶苦惱することを爲さざるものなり。是れ競争心の根據に背馳するものなり。乃ち知るべし、競争心に驅らるれば、驅らるゝ丈、其丈精神主義に乖離し、精神主義に進めば、進む丈、其丈競争心を脱却すべきことを。(明治三十四年七月發行「精神界」所載)

四 精神主義と唯心論

吾人の精神主義を宣揚するや、屢々物質を排して精神を採り、客觀を斥けて主觀を取る。其論固より實際門内の言にして、敢て哲學的理論に亘るものにあらずと雖も、或は亦此點の明瞭を缺くものなきにあらざるべし。而して精神主義の最も混化し易き哲學的理論は、蓋し彼の唯心一元論なるべし。

精神主義と唯心論との區別は、第一に宇宙萬有に對する見解に就きて見るべし。唯心論は宇宙萬有を以て、

直に之を心的現象となし、所謂物質なるものも、亦是れ心的現象にして獨立存在のものにあらずとなす。然るに、精神主義は此の如き定説を要とせず。宇宙萬有が心的現象なるも物的現象なるも、所謂物質なるものが是れ心的現象なるも或は亦獨立存在のものなるも、精神主義は、此等哲學的理論には、其如何なるものなるも、毫も關係することなく、只彼等哲學上の諸論が、何れも除却する能はざる所の、我と萬物、主觀と客觀との對立を基本として、其上に於ける實際に就きて、主觀的精神の内に、満足と自由との存じ得べきことを宣揚するなり。故に唯心一元論は唯物一元論と、物心二元論は絶對迷妄論と兩立する能はざるも、精神主義は毫も此等諸論と抵觸することなきなり。

次に萬有中の邪惡なるものに對しても、唯心論は（此點には他の諸論と同じく）何故に此の如きものが存在するやの説明を爲さざるべからず。然るに、精神主義は此點に於て、頗る其趣致を異にするなり。所謂毒蛇惡龍なるものありとせんも、其ものを毒蛇惡龍と見るか、藥蛇善龍と見るかは、是れ吾人の精神如何によることにして、吾人は此事に關して充分の自由を有するものとするが、精神主義の一大要義とする所なり。故に其物が客觀的實在上に於て毒たり惡たるの説明を要とせざるのみならず、其物が主觀に對して毒たり惡たるの説明をも要とせざるなり。何となれば、精神主義より見れば、其物が客觀的實在上に毒たり惡たらざるのみならず、其物が主觀に對しても、毒たり惡たるにあらずして、只全く精神の開展其當を得ざるが爲に毒惡を感じるものに過ぎずとすればなり。換言すれば、精神主義より云へば、毒惡と云ふことは、全く精神

内のことにして外物に關することにあらざるなり。

唯心論は絶對心の一元を主張すと雖も、而も亦我と萬物との相對を許すが故に、所謂大我と小我、絶對心と相對心の關係を明にせざるべからず。是れ哲學上最後の難問題にして、今日尙一人の是が明解を與ふるものなき、寔に其所なり。然るに精神主義は、此の如き難問題を抱持せず。只吾人各自の精神が、其開展の様によりて、能く満足と自由との福樂を受有し得べきことを指説するなり。之を例するに、美衣美食を好み惡衣惡食を耻づるが如き、是れ實際上の問題なり。而も亦之に對して大我の要求する所如何、小我の要求する所如何と考究し得べからざるにあらず。然るに、大我小我の何たるも明にせずして、此の如き考究に關入するは、是れ塵を抑へんと欲して彌々塵を揚ぐるものたらずばあらず。精神主義は、之に反して實際問題は實際問題として、美衣美食を好むの精神如何、惡衣惡食を耻づるの精神如何、此精神心地は決して轉改せられざるものなるや如何。「士、道に志して惡衣惡食を耻づるものは、未だ與に議するに足らざるなり。」而して小兒は道に志さざるも惡衣惡食を耻ぢざるなり。美を好み惡を耻づるは、決して不變の精神にあらざるなり。何すれど、吾人は彼を耻ぢ之を厭ひ、福樂を捨て、禍苦を取る。吾人は須らく吾人の心機を開展して、實際に満足と自由とを享有すべきなり。精神主義が實際問題を解決する、蓋し此の如きのみ。決して唯心論の如き哲學的問題よりして、大我小我、絶對心相對心等の説明を根據とするを要せざるなり。

之を要するに吾人の所謂精神主義は實際門内の主義にして、理論上の系統にはあらざるなり。而して心機

の開展を説き、満足と自由とを唱ふるが爲に、或は唯心一元論の絶對的自由の萬有開展と混するが如きことなきにあらざるが如しと雖も、精神主義は、萬有の成立の説明に對して、其唯心論たると唯物論たると、物心二元論等たるとに關せず、主客兩觀相對立せる實際に於て心機の開展を唱導すること（第一）、其相對立せる主客兩觀上に就ても、善惡正邪、有害無害等の相對的性質は、之を客觀的實在の上に存するものと見ずして、全く主觀的精神の開展如何によるものなりと定むること（第二）、及び、此主觀的精神其物の成立に對しても、決して此が哲學的説明を要求せず、只實際的發動の上に於て、満足と自由を享有し得べきことを宣揚すること（第三）、によりて、充分に唯心論や其他哲學的諸論と甄別し得べきなり。

（明治三十四年十月發行『精神界』所載）

五 精神主義と他力

精神主義は、各自の心中に満足を求め得と云ふ。忽にして之を見れば、實に自力全能を主張するもの、如し。然れども、是れ未だ精神主義の實際に明なるものと云ふべからざるなり。精神主義は寧ろ之に反して純然たる他力主義に據るものと云はざるべからず。

抑々精神主義は、相對が絶對に入り、有限が無限に合する所に發展する所の實際主義に外ならざるなり。其所謂入と云ひ合と云へることを説明せんとするは、不可能のことなりと雖ども、而も吾人が今此事に關して自力他力を説かんとする以上は、吾人は精神主義の他力的なることを宣言せざる能はざるなり。何となれ

ば、相對が絶對に入り、有限が無限と合すと云ふ所に於て、吾人は相對の外に絶對を説き、有限の外に無限を説き、而して吾人が所謂自己心中の満足なるものは、即ち此絶對無限の賦與する所に外ならざればなり。

更に吾人が自己心中に満足を得る模様を檢察するに、吾人は世上百般の事に當りて、不満足の爲に煩悶することあるも、一たび轉じて絶對無限、如來大悲の實在に想ひ到れば、先の不満足の煩悶は煥然として消散し、満足の歡喜は油然として流出するを覺ゆ。蓋し吾人が不満足を思ふは、畢竟自己の意力の薄弱なるに基因するものにして、若し自己の意力の牢強なるものは、如何なる境遇に臨み、如何なる状態に陥りても、毫も不満に沈むことなく、常に其の境遇と其の状態とに満足して、只管自己の職分を盡さんことに進むのみなり。然るに此の如き意力は、決して吾人の常に有する所にあらず、吾人は寧ろ意力（只意志あるのみを云ふにあらず、能く其の意志に順じて終始を貫徹する力用をも併せ云ふ。）の非常に薄弱なるを感ず。而して此意力の薄弱なるものが、其の心中に満足を得る所以は、如何と云ふに、吾人が無限大悲の實在を感ずるにより、自己は唯其無限大悲の賦與に屬する分限内のみ自由を得、其分限外の範圍に於ても、別に如來大悲の妙巧あるべきことを信するが故に、自己の内外に對して、共に不満の念あることなし、是れ豈無限大悲の他力的感動と云ふべからずや。

然り而して、無限大悲の他力により、自己の内外に對し満足すと云ふ中に就きて、其自己内に關するの點は則ち可なり。其自己外に對するに當りて、只管無限大悲の妙巧を信すと云ふに至りては、其意を領し難き

ものあり。喩へば、路傍に急患の爲に呻吟する者あり、之に一顧の惠を與へ、之が一時の急を救ふは易々たる事なるも、精神主義のものは、之を無限大悲の妙巧に任せて、平然知らぬ振りして通過し去ると云ふもの如し、果して然るや、と。是れ屢々吾人の精神主義に對して發せらるゝ所の疑問なり。請ふ少しく之を辯明せん。

精神主義の他力を云云するは、其他力が各自の精神に感ぜらるる所を基本とするなり。此點よりして之を云へば、假令無限大悲は所謂客觀的には實在せるも、夫が吾人の精神上に感ぜられざる以上は、精神主義は之に關係せざるなり。而して此事情は總ての場合に及ぶ事にして、吾人が他力によりて自己の内外に對して満足を得と云ふも、皆一一の場合に於て、彼の他力が自己の精神上に感ぜられたる時に就きて云ふものなり。故に今彼の路傍の急患者の場合の如き、精神主義が之に對して他力の妙巧を信すと云ふは、決して知らぬ振りして平然通過し去ると限るべからず。寧ろ直に歩を止め、全力を盡して之を介抱するを當然と云ふべきなり。其介抱と通過とは、精神主義の一定する所にあらず。無限大悲が吾人の精神上に現じて、介抱を命じたまはゞ、吾人は之を介抱し、通過を命じたまはゞ、吾人之を通過するなり。通過と介抱との二點に就きては、吾人は自ら虚心平氣にして、無限大悲の指命を待つのみ。常に他人の危急に就きてのみならず、自己の危急に於けるも亦同般なり。大地震轟し來りて家屋將に顛覆せんとするとき、走り出づべきか、走り出づべからざるか、走り出でて災害に逢ふことあり、災害を免るることあり、走り出でずして災害に逢ふことあり、

災害を免るゝことあり。災害の來否は、吾人の知見し得る所にあらざるなり。知見し得ざることに對して狂亂するは無用のことなり。吾人は此無用のことに對しては、勉めて虚心平氣の工夫を盡し、而して、走り出づべきか、走り出づべからざるかの直接問題に對しては、一に無限大悲の指命に待ち、若し走り出でんとするの念起らば、驀直に走進し、若し走り出でんとするの念起らずば、泰然として安坐すべきなり。然り而して、自他の危急等に就き、通過と介抱、走進と安坐との如く、其何れかの一方に他力の指命を得る場合は、即ち決定を得べしとするも、其他力の指命が判然たらざる場合は如何、豈煩悶なきを得んや、と。是れ亦精神主義の他力門に對する一個の疑問なり。然れども精神主義に於ける他力を感知し得るものは、深く此の如き疑問に惱亂せらるることなかるべし。何となれば、此の如き猶豫不定の間に居らしめたまふも、亦是れ無限大悲の妙巧に出づることを感知し得べければなり。乃ち此の如き場合に臨まば、吾人は彌々勉めて虚心平氣に指命を待ちつゝ満足すべきなり。(明治三十四年十一月發行「精神界」所載)

六 精神主義と三世

精神主義は過去の事に對するアキラメ主義なり。精神主義は現在の事に對する安住主義なり。精神主義は未來の事に對する奮勵主義なり。

吾人が過去の事に對するや、固より苦痛と快樂との場合あるべきなり。而して此快樂に放心し、其苦痛に傷惱するは、蓋し通常の事なるべし。驕傲愼怠、彼より起り、悲泣怨恨、此より生ず。人生の弊竇、其過去

の事蹟に對する感想より發するもの、實に鮮少なからざるなり。精神主義は此の如き場合にあたりて、一方には快樂苦痛の主觀的現象なることを覺りて、其轉換の自由あることを知らしめ、一方には事の成績に就ては、無限大悲の善巧方便あることを諒とし、其良否の共に意味あることを領せしむ。乃ち放心と傷惱とは自然に消散し去りて、所謂驕傲、懶怠、悲泣、怨恨等の弊癘、亦生起せざるに至る。精神主義が過去の事に對するアキラメ主義なりとすべきは、蓋し其吾人をして放心と傷惱とを脱却せしむるを云ふなり。而して其吾人をして放心と傷惱を脱却せしむる結果は、やがて亦吾人をして、驕傲、懶怠、悲泣、怨恨等を脱却せしむるなり。然り而して、此は是れ消極的言明なり。若し夫れ之を積極的に開設せんか、放心の消散する所に懺悔の心生じ、傷惱の消散する所に感謝の念發す。乃ち驕傲、懶怠、悲泣、怨恨等の代りに、忍辱、精進、歡喜、愛樂等の好果觀るべきなり。

然りと雖ども、一概に過去に傾注して、其より好果を觀んことは、決して精神主義の本旨とする所にあらずるなり。否、精神主義は寧ろ現在の安住を主要とするものなり。彼の無限大悲の善巧方便を諒知することの如きも、先づ現在の信念を確立したる上にあらでは、明瞭なる能はざるなり。現在に於ける無限大悲の實現を感知するものにして、始めてこの無限大悲の過去に於ける善巧施設を信するを得るなり。現前信仰の一念が救濟の大事を完了し、吾人永劫の未來が、信仰の一念に決定せらるるの妙旨を會得したるものにあらずば、過去未來に關する大義を領解する位地を得たるものにあらずるなり。精神主義は常に此信念を發揮せん

が爲に、此無限大悲を感知せんが爲に、敢て客觀主義を排して主觀主義を唱ふるなり。即ち精神主義の目的は物質主義を去り、動物主義を去り、社會主義を去り、國家主義を去り、個人主義の中にも、肉體主義、不足主義、競争主義を去りて、精神主義、満足主義、自由主義に就くにあり。語を換へて之を言はんか、精神主義は、彼の生物(特に吾人々類)を解剖分析して、物質の集合體に過ぎずとする説明を以て、吾人に安住を得せしむるものとする能はざるなり。精神主義は彼の動物の状態を査察して、動物此の如きが故に、人類も亦此の如くあるべしと云ふ推論が、吾人に安住を得せしむるものとする能はざるなり。精神主義は、彼の社會の爲め、國家の爲めを先として、自己の爲めを知らざる主義が、吾人に安住を與ふるものとする能はざるなり。精神主義は、個人主義を取ると雖ども、彼の個人の肉體を以て第一義とし、現在の境遇を不足とし、他人を倒しても己れを利せんとする主義が、吾人に安住を與ふるものとする能はざるなり。即ち精神主義は、自己の精神を第一義とし、其精神が現在の境遇に満足して自由自在に活動する處に、吾人は安住の地位を得べきことを唱導するなり。而して吾人は、吾人の精神が無限大悲の光明懷裡に攝取せらるゝにあらずば、此満足と自由とを得る能はざることを斷言せんとするものなり。

然り而して、安住と云ひ、満足と云ふ、其未來の事に對するに於て、優柔沈滯の憂なきやと。是れ吾人に對して屢々來問せらるゝ所なり、吾人は常に此に對して、只之を反言するの要を見るのみ。抑々安住と不安と何れか事を爲すに力あるか。吾人は安住せるものにして始めて事を作すに足るを見る。彼の戰々慄々とし

て常に不安に驅らるゝものは、決して事を作す能はざるなり。泰然自若と云ひ、綽々として餘裕ありと云ふが如き、皆是れ事を爲すに當りて、重要な性行に非ずや。而して、皆是れ安住の或状態を表する者に非ずや。而して満足の義に就ては、吾人は常に満足せざるもの、働く能はざるを聞くものなり。吾人が事を爲さんとするに當りて、心中に不足を思ひ、不平を懐く時には、吾人は殆んど其事に著手する能はざるにあらずや。不平不足の思念が活動を麻痺せしむるに反して、満足と平安とが活動を策勵せしむること吾人の常に實驗する所にあらずや。彼小兒の行動に就て見るも、彼等が求むるものを與へられざるか、或は與へらるるも充分ならざる場合に當りて、不足不平に堪へざる間は、顛轉號泣して、殆んど狂倒するが如きも、一たび其欲する所の満足を得るや、忽ちにして其狂亂は鎮靜して、滿面笑を含みて其姿勢をも端正にし、活潑々地の行動に勇進するを見る。是れ豈吾人自然の傾向ならずや。然れば則ち吾人が精神主義の指導によりて、實地に満足と安住とを得ば吾人は自然に彼小兒の如く活潑々地の行動に勇進し得べきなり。自由の活動とは則ち是なり。精神主義は未來の事に對しては實に奮勵の主義たるなり。(明治三十五年二月發行「精神界」所載)

七 精神主義と共同作用

精神主義は、一に内觀主義と云ひ、或は主觀主義と云ふ。即ち、外界客觀に對して、毫も頓着することなく、隨て社會同胞と相接して、共同作用を爲すの意なかるべく、よし之ありとするも、其間に規律と秩序とを認むることなかるべし、果して然るや、と。是れ定に好個の疑問なり。今少しく之を解説せん。

吾人の所謂精神主義は、實に内觀主義を要義とするものなり。然れども、此が爲に外界客觀を否定するものにあらざることは、先に屢々言明する所なり。而も外界客觀に對して頓着することなしと云ふ場合は、彼の外客の模様によりて煩悶し惱亂せざるを云ふなり。決して接觸を拒否し、共同作用を廢絶するにあらざるなり。固より強ちに隱遁を排し孤棲を斥することは、之なしと雖も、而も、社會同胞に交際して、共同の事に従ふに於て、決して躑躅逡巡することを要とするものにはあらざるなり。

然り而して、所謂規律秩序なるものに至りても、精神主義は、決して之を無視するの要を認めざるなり。唯其所謂規律秩序なるものを認定するに於て、精神主義は、其根本據たる萬物一體の原理により、萬物の動作は、皆是れ唯一本體の規律的秩序的活動なることを信知するなり。即ち換言せば、精神主義は、宇宙萬化の全體に亘りて、嚴然たる規律秩序の存することを確信するものにして、其萬化の一部たる人間活動の範圍に於ても、固より規律と秩序との嚴在することを疑はざるなり。故に、精神主義は、此點に於ては、或は部分的に、或は人爲的に、規律と秩序なるものを按排し、此の部分には規律秩序あれども、彼の部分には規律秩序なく、此は紊亂なり、彼は紊亂にあらずと云ふが如き差別的見解を異にして、所謂規律秩序なるものを、平等的に一切の活動一、切の作用に遍在すと爲すなり。

而して、精神主義が、共同作用の規律秩序に就て、特に貢獻するものあり。他にあらず、精神主義は、他の如何なる作用に對しても、常に内部の満足を得るものなるが故に、共同作用の調和し難き場合にありて

は、容易に全體の便宜に服従して、其共同作用を調和せしむることを得るなり。是れ精神主義が、或は頗る非活動的のものたるが如くにして、却て非常なる活動主義たる所以なり。而して共同作用の場合に於て、最も明瞭に之を認知し得べきなり。只所謂活動と發動とを一視し、發動にあらざれば活動にあらずとするの誤解なきを要するのみ。

發動と云ひ、受動と云ふ。各活動の一面たるものなり。獨り發動のみを活動なりとするの誤れること、言を待たざるなり。而して、之を最も明瞭ならしむるは、共同作用にあり。抑も共同作用なるものは、一方より之を觀れば、各別なる多數人の活動なりと雖ども、又一方より之を觀れば、一團體の活動なり、而して、之を各別の個人よりして云はゞ、受動もあるべく、發動もあるべしと雖ども、之を一團體活動として見るときは如何。蓋し活動と云ふの外なかるべし。即ち個人個人の發動受動は、皆各全團體の活動の一部分を成すものと云うて不可なきにあらずや。換言せば個人個人に取りては、或は發動的或は受動的の差別ありと雖ども、之を相寄りて一團體の活動を成すものと見るときは、發動も其活動の一部分なれば、受動も亦等しく其活動の一部分たるなり。

然り而して、尙一段の指説すべきものあり。所謂團體なるものが、二人より成立せる場合にありては、其團體の活動は、一人の發動と一人の受動とより成立すべしと雖ども、若し一團體が三人以上より成立せる場合にありては、其團體の活動は、一人の發動に對する二人以上の受動より成立せざるべからず。之を推言す

るに、一團體の人数の増加すればするに従ひ、受動者の數は其に順じて増加せざるべからず。而して、此の如く團體の人数が増加する間に於て、發動者の數は、毫も變動することなくして、常に一人以上たる能はざるなり。乃ち彼の共同作用の模範とすべき議會なるものに就て見るべし。嘗に之を統理するに議長といふ者を要するのみならず、議員が其意見を戦はずと云ふ時に於ても、一議員が其意見を開陳しつゝある間は、他の多數の議員も、議長其人迄も、皆共に之を傾聽しつゝあらざるべからざるにあらずや。即ち、議會の統一的共同作用は、一發動に對する多數の受動より成立するものたらざるべからざるなり。果して然れば、團體の共同作用に於ては、受動の必要なること頗る明瞭なるのみならず、團體の増大するに従ひ、受動の之に順じて増加せざるべからざることを知るべきなり。而して、此の如く共同作用に必要な受動を體認するの心地は、精神主義の指導によりて、大に開展せられ得べきなり。

之を要するに、精神主義は、自由と服従との雙運を覺悟せしめて、發動と受動との兩面に活動を指導すと雖とも、其頗る消極的非活動的なるが如く誤らるる所の服従獎勵の方面に於ても、其實、活動を助長し、特に團體的活動に資益すること寔に大なるを知るべきなり。(明治三十五年三月發行「精神界」所載)

信ずるは力なり

この文章は、先生が東京の浩々洞でこの題の下にお話しになつたのを多田鼎君が書いたものである。小公子の話などは、多田君が自意をもつて挿入したものである。先生がこの文章を見られ「小公子といふ小説がありましたか。一度読んでおかねばなりません。」と云うてお讀みになりました。私共門弟に對する先生の態度は常にこんなあんなばいでありました。先生が亡くなられたとき、先輩門弟集りて先生の法名を信力院と定めたのも、先生の信力の人であつたことを一同で思ひ合はしたからでありました。——曉島註

近ごろ日本に廣く行はれて居る小公子フオントルロイの物語は、人を信ずるといふことの力が如何に強大なるものであるか、といふことを示して居る。

諸君の知らるゝ如く、小公子フオントルロイの祖父の老侯爵は、極めて頑冥といはれたる人で、且つ冷酷氷の如く、慈悲人情といふものは少しも味はない、利己心又は主我心の化現である、といはれたる程の人であつた。然るに、フオントルロイの母は賢明なる人であつた故、フオントルロイに對して、少しも此舅が悪人であるといふ事を知らせぬ、却て、此老侯爵は、最も慈悲の深い、殊に小兒に對して極めて親切な人であつて、恐らく天下に之ほど善い人はあるまいと教へた。フオントルロイは之を信じた。母のこの教を信ずる

と共に、祖父老侯爵が慈悲深い人であるといふことを信じて疑はぬ。常に鬼の如き祖父を佛の如く思うて敬ふ、一念一刹那も之に背かぬ。フオントルロイが祖父を信ずること、斯様に強くあつた故、さすがの老侯爵も弱り果てて、とうとう此天真爛漫たる孫に感化せられて、終にフオントルロイの思うて居た祖父と同じやうな、極めて慈悲の深い老翁となつてしまふた。之は固より一の物語に過ぎぬ。けれども、其中に深い意義が含まれてあると思ふ。

凡そ我々が世に立つに當つて最も大切なことは、我々の精神の基礎を定むることである。礎がなければ家は立たぬ。精神の基礎がなかつたならば、我精神は決して安立することはできぬ。安立することができぬ故、活動といふことは固よりできる譯はない。それ故、我々は是非とも精神の基礎を見つけねばならぬ。されば、其基礎とは何であるか。それは、財産でもない、權勢でもない、地位でもない、學識でもない、一個の至誠の心である。かの財産の如きは、天災若しくは盜賊等のために奪ひ去らるるものである。かの權勢地位の如きは、他人の變心又は迫害のために除かるるものである。殊に今日の學者の誇る所の學問上の智識の如きものは、多く書物やノートの上に存するもの故、火災や水難のために失はれてしまふ、さなくとも、病氣の爲にとり去らるるやうなものである。けれども、至誠の心は斯様な價なきものではない、かやうな力ないものではない。至誠の心は、火にも焼けぬ、水にも腐らぬ、盜賊の爲に奪はるることもない、病氣のためには失はるることもない、白刃のために滅さるることもない、動かす、ゆるがず、常住不變、金剛不壞、大盤

石も以てその譬とすることのできぬほど、堅固なものである。我々が此堅固なる至誠の心を一たび見つけ來るとき、そこに始めて我々が安立すべき精神の基礎を得ることが出来る。精神の基礎ここに確定する故、我々が活動すべき勢力の源泉、亦ここに生じ來るのである。

今、他人を信ずるといふことは、この至誠の心を他人の上に認むるといふことである、他人の心の上にこの大盤石よりも堅固なる至誠の精神を見つけるといふことである。我々が父母を信ずるとき、我々は父母の中にこの至誠が働いてをるを認むる。我々が友を信ずるとき、我々は朋友の中にこの至誠が働いて居るを感じる。それ故、我々が他人を信ずるとき、我々は我精神の基礎が一層廣く且つ固くなつたことを感ずる。随つて、我々は活動力の源泉が一層大きく且つ強くなつたことを感ずる。それ故、我々の勢力は、不知不識、強大になる。我々の中に驚くほどの勇氣が生じてくる。随つて、事業を爲すに當つて、安樂を感じて困難を感ぜぬ、愉快を感じて苦痛を感ぜぬ。之によつて、我々が事業の成績も自然に廣大なるものとなる。

はじめにちよつと考へた時には、頗る危険であると思ふたことも、人を信ずるによつて、それを易く扱ふことができるやうになる。前には頗る困難であると心配したことも、人を信じて行つたために、それをサツサとらしくやつてのけることができるやうになる。人を信じたために、我々は大なる力を得るのである。フオントロイが、一個の小兒でありながら、幾十年世上の風波にもまれて鐵の如く硬くなつた祖父を感化したのも、一に彼が祖父を信じてかかつたからである。この經驗は、私自身の今日までの經歷で度々實驗致し

て居る。それ故、今日に及びて愈々人を信ずるといふことが自分の勢力の強大となる源泉である、といふことを信じて疑はぬ。

然るに。世の中にはわるい見をもつて居る人がある。その人はかういふ、他人は決して信すべきものではない、人を信ずるときには、人が我を困難の穴に擠すが故に、我は人を信ぜずして事業をせねばならぬ、と。斯様に申すけれども、之は大なる誤である。他人が多少自分の不利益なことをしたればとて、それで他人に對する信をなくしてしまふやうになるならば、其人が前に他人に對して持つて居た信といふのも、餘程怪しい信である。その様な怪しい信が役に立つといふことはない。其人が之がために困難に陥つたのも、尤もである。それ故、斯様な人は、人を信じたによつて不利益を招いたでなくして、本當に人を信じなかつたために不利益をうけ、他人に擠されたのである。咎むべきは、信でなくして疑である。我疑を以て人に對ふ、人亦どうして疑を以て我に對はぬことがあらうか。疑と疑と相交はりて、互に相害し相損ひて、事業は決して成就するといふことはできぬ。若し一點でも事を成したいといふ希望があるならば、我々はぜひとも他人を信ぜねばならぬ。醫者を信ずる故に、病氣がなほるではないか、先生を信ずる故に、智識が進むではないか。國民を疑ふ者は、政治を爲すことはできぬ、人類を疑ふ者は、道徳を唱ふことはできぬ。國民を信じて、我政治上の意見が正當ならば、國民は早晚必ず同意するものである、と信すればこそ、政治が成り立つのではないか。人類を信じて、人類は何等かの方法によれば、必ずや道徳上の進歩をすべき者である、と信すれば

こそ、道徳も組み立てらるるではないか。其他、社會百般の物事皆同じことである。世界は信の上に成り立つて居るものである。然るに、他人を疑ふといふ者は、世界を破壊する者である。其者の事業が成立する筈がない。懷疑といふことが、學問の上で自家撞着として排斥せらるる、と同じやうに、他人を疑つて事業を成さうとする者は、社會上において矛盾の甚しきものとしてはねのけられねばならぬ。

此道理によりて我々は常に、信ずるは力である、といふことを忘れてはならぬ。いかなることありとも、人を信ぜねばならぬ。父母を信じ、朋友を信じ、兄弟を信じ、家族を信じ、國家を信じ、國民を信じ、世界を信じ、人類を信ぜねばならぬ。之を信じて常に一點の疑を挿まぬやうにせねばならぬ。親が毆つとも撫で摩するとも、孝子は常に親を信じて、その恩を感謝すると同じく、我々は、順逆如何なる場合にでも、他を信じて疑はぬやうにせねばならぬ。かくして我々は大なる力を獲來るのである。

けれども、之がなかなか容易でない。我々は多く外界に支配せられて、其ために左右せられ易い者である故、他人の我に對する行爲のすがたの如何によつて、或は信じ或は疑ふやうになる。斯の如くであつては、眞實に他を信じて居るのではない。之は若存若亡の信である故、いつはりの信である、質の信である。にせいつはりの信は、我々の勢力の源とならぬばかりではない、我々の衰弱の源となる。我々は是非之を斥けて、眞實の信を求め來らぬばならぬ。之を求むるには、如何致したならば宜しからうか。

全體、にせいつはりの信の出て來るのは、我々が常に他人の表面にばかり着目して、其奥底を忘れて居る

からのことである。他人の身又は心の形相ばかりをながめて、其本體を見ぬからのことである、それ故、我々が眞實の信に到達せやうとするには、この奥底の本體を見つけねばならぬ。この本體といふのは外のものではない。即ち、絶對といひ、無限といひ、光明といはるる所のものである。

我々は此絶對的無限の光明を忘れてはならぬ、この光明に着目せねばならぬ。この光明は限りなき至誠である故、之に着目するとき、我々はこの光明を信知して、之によりかかき之に入りて、安住することができる。この光明に入りて之に安住するとき、我々は、世界の一切の事物の中にこの光明のあらはるるを、認むることができる。天地間の森羅萬象、すがたは異なり、形は同じくなくれども、其體みな唯一の絶對無限の光明であると認むる。父母兄弟の上にも此光明を見、朋友親族の上にも此光明を見、國家國民世界人類の上にもこの光明を觀する。其故、父母兄弟に向つても、朋友親族に向つても、國家國民又は世界人類に對しても、共に同じく絶對無限の信を以て之に對する。嘗に此等のものばかりではない、宇宙間一切の事物に向つて皆同様に、其處にあらはるる絶對無限の光明を認めて、絶對無限の信を以て之に向ふ。信、既に絶對無限である故、之によつて得來る所の我々の力、亦絶對無限である。力、既に絶對無限である故、之によつて我が行ふ所の活動及び事業、亦絶對無限であることができる。佛の有せらるる自在神力といふものは、正に之である。

私は諸君が速に此自在神力を獲んことを希望して居ります。(明治三十四年一月發行「精神界」所載)

萬物一體

萬物一體の眞理は、或は唯心論と説かれ、或は汎神論と説かれ、或は「事々無礙法界」と説かれ、或は「一色一香無レ非ニ中道」と説かれ、或は「心外無レ別法」と説かれ、或は「光明遍照ニ十方世界」と説かるる等、其説明頗る多様なりと雖ども、要するに、宇宙間に存在する千萬無量の物體が、決して各個別々に獨立自存するものにあらずして、互に相依り相待ちて一組織體を成すものなることを、表示するものなり。此眞理の學問上に重要なをことは別問題として、吾人は茲に少しく此眞理の實踐上に關するものを開陳せん。

萬物一體の眞理は、吾人が之を覺知せざる間も、常に吾人の上に活動しつゝあるなり。吾人は空氣や日光や山川や草木や鳥獸や他人やを以て、吾人より別離せる外物となすにあらずや。然れども、吾人は空氣なくして生存する能はざるなり、日光なくして生存する能はざるなり。山川や草木や鳥獸や他人やに至りては、其關係空氣や日光やの如く近切ならずと雖も、其或は衣服の材料を供給し、或は飲食の材料を供給し、或は住居の材料を供給するによりて見れば、其吾人の生存と離れざることを辯を持たざるなり。更に吾人の精神界に就きて之をいへば、吾人の精神内に存する所の知識思想の多くは、是れ吾人以外の人物に就いて得來る所

のものにして、彼の人物なかりせば決して存する能はざる者たるなり。それ此の如く萬物一體の眞理は常に吾人の上に活動しつゝあり。故に、我よりして之を見れば、彼の萬物は皆我が爲に存在するものなりといふも、決して不當にあらざるなり。而して我よりしていひ得べきことは、他の人物よりしても亦同様に云ひ得べきは勿論なり。即ち、甲よりして之をいへば、天地萬物は皆悉く甲に屬する天地萬物なり、乙よりして之をいへば、天地萬物は皆悉く乙に屬する天地萬物なり、丙よりしていふも、丁よりしていふも、亦皆然り。乃ち、天地間如何なるものに就いて見るも、或一物よりして之をいへば、其他の萬物は皆此一物に屬するものたるなり、釋迦牟尼物は此事を説き示して、「三界は皆是れ我が有なり。」といひ、又殊に其物に對する慈悲心よりして、「其中の衆生は悉く是れ吾が子なり。」といへり。

夫れ吾人をして最も吾人の赤心を表せしむるものは、財産の事と子孫の事とに過ぐるものなし。而して今や、天地萬物が皆我が財産たり、一切生物が皆我が子たり、吾人は萬物を保重し生物を愛重せざらんとするも能はざるべし。吾人にして實に萬物を保重せんか、吾人は決して之を傷害せざるべし。吾人にして誠に生物を愛重せんか、吾人は決して之を惱苦せしめざるべし。公共の道德此に於てか生じ、救濟の教法此に於てか起る。

人或は云はん、此の如きは是れ聖賢の事なり大人の業なり、吾人凡庸者の當り得る所にあらざるなりと。然り、此の如きは是れ佛陀の見地なり、是れ佛陀の實行なり、吾人の容易に得て企て及ぶ所にあらず。然れ

ども、これ到底吾人の企及すべからざる所なりとはいふべからず。何となれば、斯くあるべき所の根據たる萬物一體の眞理は、決して吾人を離れざればなり。但、吾人が佛陀と成り得る迄の方法と歲月とは、各自の事情に應じて種々不同あるべきのみ。

而して今實際吾人の眞理に就きて之を尋ぬるに、吾人は到底、天地萬有を我が有として之を保有し、一切生物を我が子として之を愛重するの、精神を確立する能はざるを感ず。然れども、亦其間に於て、道德の必要を聞けば之に首肯し、救済の德音を聞けば之に感謝することあり。則ち知る、吾人の胸裡決して道德宗教の本性なきにあらざることを。既に此本性あり、吾人は之を培養し之を保育し、以て爛漫たる美華を開かしめずんば止む能はざるなり。故に見るべし、吾人が道德宗教の訓誡を聞き、而して之を遵奉する能はざる時には、吾人は吾人の胸裏に一種不可思議なる苦痛煩悶を感ずることを。所謂良心の苦痛感覺なるもの即ち是なり。是れ吾人人性の至奥より發する至深の苦痛なり。是れ吾人の本性が妨壓せられて正當なる作用を爲す能はざる爲に發する所の反抗なり。而して其苦痛の劇しきは反抗の盛なるによるものにして、本性の作用が漸く蔽障を打破し來りて、其自由なる天地に出でんとする徴なり。所謂道德より一轉して宗教に入るといふものは、蓋し良心の苦痛が進みて罪惡の感覺となり、罪惡の感覺はやがて解脱の見地を惹起するの順序をいふものなり。

世に宗教者の説く所の神佛の命を以て全く良心の聲に過ぎずと云ふ學者あり。是れ未だ宗教に達せざるも

のなり。宗教に達せざる間は只道德あるを知るのみ。故に、良心の苦痛を知るも、其苦痛の救済を知らず、罪惡の行ふべからざるを知るも、其罪惡を滅するの法を知らず。故に徒らに苦痛を訴へ徒らに罪惡を云ふ、終に其言論の效用を見る能はざるなり。眞正の宗教は是と異り、苦痛を訴ふれば其救済の道を教へ、罪惡を云へば其消滅の法を授く。乃ち阿彌陀佛の攝受に就きて之を見よ。「汝等衆生、一心正念にして我に來れ、我汝等の善と惡と智と愚とを問はず、一切汝等の爲に其責に任じて、汝等を攝受すべし。」と。此德音を信受する者、誰か復自己の善惡智愚に就きて迷悶憂苦するものぞ。唯當に一心正念にして佛陀に歸仰すべきのみ。即ち、良心の苦痛罪惡の感覺は煥然として氷釋すべきなり。蓋し、吾人の道に達し徳に進む能はざるは、只自己の云爲能力のみを以て道德を造作せんとするによる。所謂虚偽虚飾・偽善偽徳の汜濫するは畢竟此が爲なり。蓋し、道德を以て一己を私行となし、其成績によりて以て己が威福の資に供せんとするによるものなり。然るに、眞正の道德は決して此の如き隔歴差別の妄念より生ずるものにあらず、萬物一體の眞理に基ける平等無碍の正念より起るべきものなり。而して此の如き正念の本體は是れ阿彌陀佛なり。阿彌陀佛の一心正念より出づる德音に促されて、吾人に一心正念の發動するもの、是れ即ち宗教の眞髓なり、道德の源泉なり。

(明治三十四年三月發行「精神界」所載)

自由と服従との雙運

吾人は自由を愛して之を求め、服従を憎んで之を厭ふ。是れ自由と服従とを以て互に相容れざるものとなすものなり。自由と服従とは果して然かく相容れざるものなりや、如何。

吾人の世に在るや、決して單孤獨尊するものにあらず、常に外他の人物と相待ちて存立す。自由と服従との發現するや、全く此存立の上にあるなり。故に、吾人が自由の位地を占めんには、外他の人物は服従の位地に陥らざるべからず、外他の人物が、自由の位地を占めんには、吾人は服従の位地に陥らざるべからざるなり。然れば則ち、此間に於て吾人が自由を愛して之を求め、服従を憎みて之を厭ふは、是れ我獨り完全なる自由を占め、外他の人物をして悉く服従に處せしめんとするものにして、暴慢の甚しきものと云はざるべからず。吾人は此暴慢を脱して眞正の自由と服従とを得んと思ふ。

我は他人を苦しめずして自由ならんことを欲し、我は自ら苦まずして服従せんことを願ふ。他人を苦めざらんとせば、我は決して彼の自由を害すべからざるなり、自ら苦まざらんとせば、我は他人をして我が自由を害せしむべからざるなり。是に於てか彼我の間に自由の範圍を制限せんことの止むを得ざるを覺ゆ。然れ

ども、自由に範圍あり制限ありと云ふ、明らかに自家撞着にあらずや。吾人は此自家撞着を脱せざるべからず。

吾人が自由を思ひて自家撞着に陥れるは、自由の範圍を制限せんとしたればなり。而して自由の範圍を制限せんとしたるは、自他相害の苦を除かんとしたるに因る。然れば則ち、今自由に對して自家撞着を脱せんとせば、吾人は此自他相害の苦に就きて一考する所あるを要す。

抑々自他相害の苦は如何なる事情より生起するものなりやと云ふに、蓋し自他の間に利害を異にするを以て源泉とす。若し我の利が即ち彼の利となり、彼の害が即ち我の害とならんか、吾人は決して自他相害の苦に沈淪せざるべし。何となれば、我の利は亦彼の利なるか故に、我が利を得るときは、彼亦利を得べく、彼の害は亦我の害なるが故に、我が害を避くるときは、彼亦害を避くべければなり。然れば則ち、自他相害の苦を救はんとせば、吾人は自他の間に利害の乖背を除きて、自他同感の心地に安住せざるべからざるなり。所謂天下と共に樂み、天下と共に憂ふるの見地に到達せざるべからざるなり。

天下と共に樂み、天下と共に憂ふ、其事甚大、吾人の容易に得て企て及ぶ所にあらざるが如しと雖も、然れども、其主義の根基は決して吾人を離れたるものにあらざるなり。何となれば、是れ吾人の根本的成立の上存する「萬物一體」の眞理より發現し來る所の一活動に外ならざればなり。唯夫れ之を實修し、之を實行するの一段に至りては、其範圍の廣狹・其程度の淺深等頗る其不同あるべきのみ。

吾人にして一たび天下と共に樂み、天下と共に憂ふるの見地に到達せんか、吾人は茲に吾人の外他人物に對する態度に非常の變化なき能はざるなり。即ち吾人は、彼の見地と共に、萬物一體の自覺の明らかなるに従ひ、自己と外他人物とは是れ一體の兩面に過ぎざるを感じて、自己の活動の外に外他人物の活動あることなく、外他人物の活動の外に自己の活動あることなく、自己の活動と外他人物の活動とは、全く一にして二にあらざることを、認知するに至る。是に於てか、吾人は自由と服従との二者に對して亦全く其觀想を一變すべきなり。即ち、彼の自由と服従と、從來二者全く相容れざりしものが、決して然く相容れざるものにあらずして、自由は唯是れ本體の自動的本面、服従は唯是れ本體の他動的方面にして、共に以て本體の活動を相成すもの、吾人は決して其一方面のみを求めて他の方面を厭ふべきにあらざることを了解すべきなり。

自由と服従とに關する吾人の見解は略此の如し。然るに、尙茲に一言すべきものあり。自由と服従とに對する苦樂の感覺是なり。吾人は自由に就きて樂を感じ、服従に就きて苦を感ず、而して其感情定に切實なり。是れ吾人が常に自由と服従とを別離して、其間に取捨を思ふの本據なり。然れども、感情なるものは屢々吾人を誘惑するの幻影、吾人は勉めて其真相を看破せざるべからず。今此自由と服従とに於ける感情中、自由に就きての樂感はその弊なしと雖も、服従に就きての苦感はその誘惑的の幻影なり。何となれば自由と服従とは共に同一本體の活動作用にして、常に相待ち相並びて發現するものなるが故に、萬物一體の眞理を自覺せる吾人は、二者の間に苦樂の別を脱せざるべからざればなり。然れども、苦樂は是れ實際の感覺なり。吾

人が自由と服従との實際に當りて、其間に苦樂の別を脱する能はざることあるは、是れ吾人の修養の至らざるに基因するもの、吾人は之が爲に決して彼の自由と服従との調和に對して絶望すべからざるなり。

之を要するに、自由と服従とは決して相容れざるものにあらざるなり。之を相容れざるものとするは、畢竟、吾人を以て彼我利害を異にする所の個別の存在と爲すの迷謬に基因するを見る。故に、今萬物一體の眞理に體達し、吾人は常に彼我利害を一にすべきものなることを了解し、天下と共に樂み、天下と共に憂ふるの見地に安住するに至らば、自由と服従とは、固と是れ同一本體の活動上に於ける兩々相依の必然的の二方面に過ぎずして、自由は即ち彼の本體の自動的方面、服従は即ちその他動的方面、吾人は此二方面に對して常に平等の心地を保持せざるべからざることを認知すべきなり。(明治三十四年三月發行「精神界」所載)

遠美近醜

明治三十四年三月先生が眞宗京都中學校にてこの題目にて講話せられ、後東京浩浩河の日曜講話にて同趣旨の講話をせられたのを多田鼎君が筆記したのがこの一文である。——曉島註

東海道を旅した者は、誰も富士山の美しいことを賞めます。玲瓏として白扇の側に懸つて居る様に聳えて居る其姿や、縹緲として白衣の神女が遊んで居るかと思はるる其峰の雲など、洵に美しい。けれども、之は唯遠くから望む時だけの事、一たび山に登つて見ると、誰とて其美しくないのに驚かぬ者はない。見る所ただ焼石や鐵渣の様なものばかりである。斯様に遠くから望めば美しいけれども、近づいて見ると甚だ醜く感ぜらるる事を、私は遠美近醜と申します。

此遠美近醜といふことは、富士山の場合ばかりでない。私共が到る處で出會ふ事柄である。油繪などは少し離れて見ると頗る美しい、人物でも山水でも花鳥でも殆んど眞に逼る様である。けれども、近づいて見ると、唯繪の具がこてこて塗りつけてあるのを認むるばかりである、さきの美は、どうしても見ることができぬ。是れ遠美近醜の一例である。

また田舎に居ると、東京といふ所は餘程美しい所の様に思はる。別して銀座など、聞いては、金銀七寶の鏤められてある街であらうかと思はる。されど、實際來て見ると餘り奇麗でない。銀座の街頭をいかほど探しても、金銀七寶などは見當らぬ、却て塵や芥などの汚い物が目につく。田舎から初めて出て來た者は誰も驚く。之を遠美近醜の一例である。

また奈良などもさうである。まだ一度も行つて見ぬうちは、奈良といふ所は餘程美しい都の様に思はる。「奈良七重七堂伽藍八重櫻」などといふ故、花の雲が靉靆として、金碧燦爛たる殿堂を鎖して居るであらう、如何計か奇麗なことであらうと思ふ。けれども、行つて見ると、是亦思つて居た程奇麗ではない、古い殿堂や古い佛像が多いばかりである。之を遠美近醜の一例である。

進んで人事界に入ると、亦この例が多い。有名な人などは、まだ其人に接せず、唯遠方で其人の評判を聞き、又は其人の議論や文章を新聞雜誌或は著書の上などで見て居るうちは、餘程えらい人の様に思ふ。ところが、實際其人に面會して見ると、其議論も左程立派でない、其品格や性質も存外えらくない。之がために竊に自ら力を落す様なことがある。

學校などもさうである。身は田舎に居て、新聞雜誌で東京の學校の評判を聞いて居ると、餘程立派の様に思はる。そこで規則書を取り寄せて見ると、其設備といひ規則といひ講師といひ、何一つとして不足なことはない。が、實際東京に出て其學校に入つて見ると、其設備なども頗る不完全である、其規則も大に不行

屈である、其講師なども餘り立派でない、却て田舎の名のしれぬ學校より不完全である様に感ぜらるる。此等のことは地方から初めて出て來た學生の多く感ずる所である。

斯様に遠美近醜といふ事は世の中到處に行はれて居る。大抵の人は皆之を實驗して居る通常の事である故、一般に之は何でもない事の様に見える。けれども、善く考へて見ると、決してさうではない。之が人間を迷はしむる一つの主因になつて居る。東京に居る學生であつて、この爲に失敗する者が少くはない。東京には同じ程度の學校同じ種類の學校が澤山ある。彼等學生は先づ此中の一つに入學する。然るに、其學校も、入學せぬ前は餘程完全である様に見えるけれども、入學して見ると頗る不完全である。どうも面白くない。そこで他の學校を見ると、甚だ立派の様に見える。それ故、今までの學校を退いて他の學校に入る。すると、其學校が亦前には立派に見えたけれども、入學して見ると面白くない。そこで、又他の學校を見ると面白さうに見える故、又他の學校に轉ずる。かういふ工合で、始終轉校ばかり致して居る、其爲に時間を空しく費す、費用を損する、精神が亂れる、終に學業が遅れて、甚しきは此間に氣力もぬけて、何も得る所なくして失敗に終はる者が餘程多くある。是れ正に遠美近醜の爲に迷はさるるのである。

又、事業を爲すについても斯様なことが多くある。他人の爲して居る事は皆面白さうに見えて、自分の事はどうもつまらぬ様に感ずる。唯他人のする事ばかりでない、自分の事でも、將來爲さうと思ふ事などがいたく面白さうに見えて、現在のことが面白く思へぬ。それ故、今までの仕事はすてて、外の仕事をして見

るところが、自分にして見ると、其仕事はまた面白くない。そこで又他の事をする。が、又面白くない故、又仕事をかへる。斯様に常に仕事をかへて、蛇蜂とらずに終ることがある。斯様な例は世に少なくない事である。亦是れ遠美近醜のために迷はさるのである。

遠美近醜といふことは、斯様に人間の精神を亂して、専ら一つの事に落ちつくことのできぬ様に爲す者である。隨て事業の成功を害する。猶其上に、此事は常に現在の自分に不足を感じさせる故、絶えず不平の情を引起さしむる。又、常に自分以外のものを立派な者と思はする故、絶えず羨望の情を引起さしむる者である。それ故、精神は之がために常に亂され、常に苦まされ、隨て常に満足の地に安んずることができぬ様になる。それ故、私共は此遠美近醜といふことに迷はされぬ様に致さねばならぬ。それを爲すには、私共は先づ其迷の因つて生ずる源を明らかにせねばならぬ。

思ふに、我々は常に美醜といふことを自分以外の物の性質の様に心得て居る。此心得が遠美近醜のために迷はさるる抑々の原因である。私共はこれを改めねばならぬ。全體、物其自身には美醜の別はないのである。私共が美しいと思ふ物自身は、決して實際美しいのではない。私共が醜いと思ふ物自身は、決して實際醜いのではない。物自身は遠く美醜の別を離れたものである。若し美醜といふことが實際外物の上に附いて居るものならば、多くの人が或一つの物に對する美醜の考は同一であるべきである。又、一人についていふても、其人が或一つの物の美醜についての考は、常に同じくあるべきである。然るに、事實は之に反する。同一の

物に就いても各人の美醜の考は決して同じくない。或人は、日本畫は美しけれども、西洋畫は美しくないといふ。或人は、西洋畫が美しくして日本畫は美しくないといふ。或人は日本畫も西洋畫も共に美しいといふ。又或人は共に美しくないといふ。又其美しいといふ中でも、其度合や種類が各異なつて居る。又、一人でいふても、初は櫻や牡丹の花ばかりが美しくして、莖や五形などは美しくないと思つて居た者が、後には莖や五形なども美しく思はるる様になる進んでは、今迄目も觸れなかつた庭の隅の苔など迄、面白く感ぜらるる。終には、他人の見るさへいやに思ふ物迄が少からぬ美をあらはして居ると思ふ様になる。斯様に同じ物について美醜の感が互に異なり、一人の上でも漸々に變つて行くのを見れば、美醜といふ事は全く物自身の上にないものであることが明らかである。美醜既に物自身の上にないものならば、それはどこにあるのであるか、之ヲ尋ねて見るに、全く我が精神の上にあるのである。我が精神にして美しくあるならば、外物亦美しく感ぜらるる、我精神にして醜くあらざれば、外物亦醜く感ぜらるる。吾に美醜ばかりでない、善惡でも眞偽でも、皆外物の上の性質ではない、共に我精神の上存する區別である。然るに之を忘れて、美醜等の性質が正に外物の上にあるものと想ひ、外物其物の間に取捨を行ふといふ事は、頗る誤れる見解といはねばならぬ。捨つべきは、醜と認めらるる彼方の外物ではなくして醜と認むる此方の精神である。取るべきは、美と認めらるる彼方の外物ではなくして、美と認むる此方の精神である。取捨を加ふべきは、外物の上にあらずして、我が精神の上にある。我が精神の美をとり、我が精神の醜を去り、以て我が精神を進めて、

我が精神が完全なる美を以て満たさるる様にせねばならぬ。吾に美ばかりではない、眞實の善を以て満たされ、圓滿の眞を以て満たさるる様にせねばならぬ。

斯く美醜等の別、一に我が精神の上にあるのでありと了得して見れば、私共は決して遠美近醜のために迷はさるることはない。隨て、羨望の精神がなく、不平の情なく、苦みもがくことなく、常に満足の地に安んずることができます。(明治三十四年四月發行「精神界」所載)

本位本分の自覺

「自己を省察せよ」とは、古聖の吾人に遺せる不磨の金訓なり。自己を知るものは能く他を知ることを得るも、自己を知らざるものは決して他を知る能はざるなり。此事や、嘗に學理の考究のみに於けることにあらず、吾人の實行上に於ても亦最も慎重なる注意を要することなり。而して自己を知ると云ふは、決して外物を離れたる自己を知ると云ふにあらず、常に外物と相關係して離れざる自己を知るを云ふなり。蓋し、外物を離れたる自己は、是れ一個の妄想にして全く其實なきものなり。何んとなれば、眞實なる自己は、常に必ず外物と相關係して離れざるものなればなり。今特に實行上に就きて之を言はんか、自己を知るとは、吾人が自己以外の人物に對して如何に交際し如何に應酬すべきかを自覺することなり。是れ自己と外物との關係を審知せざるもの爲し得ることにあらず。換言せば、自己が萬物中に於て如何なる位地を占め、如何なる職分を有するものなりや、を知るにあらざれば、吾人は決して適當に外物に對して交際應酬すること能はざるなり。

而して吾人各自の位地と職分とは、一面には、是れ吾人各自の個人的位地職分なりと雖も、他面には、是れ萬物全體の公共的位地職分たる者なり。乃ち、吾人が吾人の自職に黽勉するが如き、之を一方より云へば、吾人各自の生活渡世の爲の私行なりと雖も、之を他方より云へば、是れ社會全體の進運開福の爲の公德たるなり。而して世人多くは、此二方面が吾人の一切の行爲の上に並存すべきことを覺知せずして、甲の行爲は是れ公德なり、乙の行爲は是れ私行なりと、公德と私行とが行爲其物に於て區別あるが如く思ひ、甚しきに至りては、私の爲にすれば公の爲に害ありとなす。古來私の爲にするを斥して公の爲にするを賞するは、蓋し此點に對して教訓する所あらんとすればなり。而して其私を斥し公を賞するもの、若し或種の行爲を斥して或種の行爲を賞する者とせんか、吾人は其甚だ至らざる者なることを斷言せんとす。何となれば、行爲は行爲としては決して之を是非褒貶すべき者に非ざればなり。同じく殺人の行爲なり、而して敵首を得れば賞せられ、同胞を刺せば斥せらる。行爲は則ち同一類にして、褒貶は則ち位地と職分とによりて決せらる。即ち、位地と職分とに相應せる行爲は、私行が即ち公德たるの行爲にして、位地と職分とに相應せざる行爲は、私行が即ち公德たる能はざるの行爲なり。故に知るべし、私行の公德と合せんことを欲せば、吾人は先づ吾人の萬物中に於ける位地と職分とを明らかにせざるべからざることを。

果して然らば、吾人が吾人の位地と職分とを明らかにするの道は之を如何にすべきや。他なし、吾人は、吾人と外他の人物とが全く相別離し互に相敵對するものなり、との根本的迷謬を打破し去りて、吾人と外物とは其實一個の有機組織體を成すものなることを達觀し、吾人各自は其の有機體の一細胞として、細胞相應

の性能を盡すべきものなることを、了知するにあり。而して有機體の細胞は、或は頭部を成すものあり、或は胴部を成すものあり、或は上肢を成すものあり、或は下肢を成すものあり、互に其位地を異にし其職分を別にすと雖も、各自の本位本分に應じて其性能を盡し、以て有機體の活動するが如く、吾人は各自己の本位本分を自覺して、其適當なる業務に盡瘁し、以て萬物全體の慶祥に資するの公德を實行すべきなり。然り而して、吾人の位地職分は、上下其の位地を異にし、農商其職分を別にすと雖も、其異なる位地と其別なる職分とは、皆各々萬物全體に於ける組織の必要より起これるものにして、彼此全く同一の價值と尊嚴とを具へて、毫も等差あることなきものなり。乃ち此點より見れば、彼の人を挽き人の米を炊ぐ業務と、彼の廟堂に坐して天下の政治を行ふの業務と、毫も其價值と其尊嚴とに於て等差あることなきなり。是れ常人の多く覺知せざる所にして、特に吾人をして本位本分の説を爲さしむる要點なり。

(明治三十四年四月「眞の人」序文)

宗教は主觀的事實なり

宗教は主觀的事實である。主觀的事實とは、其事實の正確なると否とを、私共の各自の内心に尋ねて決定すべきものにして、彼の客觀的事實の如く、私共が、外物の關係他人の意見等によりて、其正否を斷定すべきものではない。

宗教的信仰の内容に屬すべきことは、一一之を提議するに堪へぬけれども、今其一二を擧げて、其主觀的事實なることを指説して見ませう。先づ始めに、彼の神佛に對する信仰に就いて見ませう。天地萬物の關係上に於て、神佛は存在せねばならぬかどうか、と云ふことを決着した後でなければ、神佛の存在は正確ならずと云ふは、是れ神佛の存在を客觀的事實として研究しやうとするものである。又、神佛の存在は、古今東西の人士が殆んど普ねく確實なりと云ふことだから、神佛の存在は疑ひないと云ふも、やはり神佛の存在を客觀的事實として斷定せんとするものである。

地獄極樂の有無に就いても亦同様である。十萬億土を飛行して極樂の有無を調査し、一千由旬を掘下して地獄の有無を尋ねんとするは是れ亦地獄の有無を客觀的事實として研究しやうとするものである。又、地獄

極樂はいかなる宗教にも説いてある、基督教にもある佛教にもあるから、地獄極樂はあるにちがひないといふのは、之も亦地獄極樂の實有を客觀的事實として断定しやうとするものである。しかし私共は、此の如き研究斷定を以て、共に學問上の事にして、宗教の事ではない、とするものである。何となれば、斯の如きは、宗教の主觀的事實なるを知らずして、只客觀的事實として研究斷定をするものであるからである。

されば、主觀的事實として、神佛の存在、地獄極樂の有無は、どうして説明することができるか、之は甚だむづかしい事である。何となれば、之は、冷とは如何、暖とは如何、と云ふ問題に解答しやうとすると、同じい事であるからである。されども、今強いて其模様を云ふて見ますれば、私共は神佛が存在するが故に神佛を信するのではない。私共が神佛を信するが故に私共に對して神佛が存在するのである。又、私共は地獄極樂がある故に地獄極樂を信するのではない、私共が地獄極樂を信する時、地獄極樂は私共に對して存在するのである。之を喩て云へば、丁度かの冷と暖とのやうである。大體、冷暖と云ふことが客觀的事實として存在して居て、始めて私共が冷暖の事實を感じるのではない。私共が感ぜぬ間は、冷暖といふ事實は全く存在しないのである。而して之を私共が感ずる時。はじめて存在するのである。宗教的信仰の内部に於ける主觀的事實の概要は、之れ位で推知してもらひたい。

果して宗教が主觀的事實であるとせば、私共は宗教的信仰の事實につき、其事が客觀的に正確なりや如何と問ふが如きことは、不當の事とせねばなりません。即ち、宗教的信仰の内容については、私共は各自に自

ら其事を信じ得るや否やを問ふべくして、其事の各自の内心を離れて實なるや否やを議するの必要がない。

私共は常に「實なるが故に信するにあらず、信するが故に實なり。」との格言を忘れてはなりません。

(明治三十四年春發行「活世界」所載)